

Byzantines as the Others: the image of Byzantium in the contemporaries mind

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nezu, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034754

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



他者としてのビザンツ人

—同時代人の心象世界の中のビザンツ像—

(課題番号 : 15520446)

平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金

(基盤研究 C・一般)

研究成果報告書

平成 18 年 3 月

研究代表者 : 根津 由喜夫

(金沢大学文学部助教授)

金沢大学附属図書館



0800-04193-3



他者としてのビザンツ人

—同時代人の心象世界の中のビザンツ像—

(課題番号：15520446)

平成15年度～平成17年度科学研究費補助金

(基盤研究C・一般)

研究成果報告書

平成18年3月

研究代表者： 根津 由喜夫

(金沢大学文学部助教授)

目 次

序	研究の経緯と本報告書の構成	2
	研究活動の概要	3
I	アーサー王宮廷のビザンツ騎士	
	——クレチアン・ド・トロワ『クリジェス』雑考	4
(1)	はじめに	4
(2)	作者と物語	7
(3)	史実の探索	12
(4)	情報の結節点としてのシャンパーニュ宮廷	22
(5)	心象世界の中のビザンツ像	30
(6)	仮想体験物語の余波—結びに代えて—	46
II	ローマ生まれの救世主—ゴータイエ・ダラス『エラクル』を読む—	
(1)	はじめに	49
(2)	作者と作品	52
(3)	物語の概要	59
(4)	情報源の探求	68
(5)	文学と歴史の接点	81
(6)	繰り返される歴史	87
	文献目録	89

序 研究の経緯と本報告書の構成

330年にコンスタンティヌス大帝がボスフォラス海峡の畔の町ビザンティウムに都を移し、その名をコンスタンティノポリス（コンスタンティノーブル）と改めて以来、この都は西欧人たちの憧れと羨望の的であり続けた。800年のクリスマス、ローマでカール（シャルルマーニュ）が帝冠を受け、西欧に独自の皇帝権が成立したことも、ビザンツに倣いつつ、その隠然たる影響下から脱し、後者と対等な関係を結び、さらにはそれを凌駕したい、という西欧人の願望の現われに他ならなかった。ビザンツに対する、こうした憧憬と嫉妬と敵愾心が入り混じった西欧人の複雑な想念は、その後も連綿と受け継がれ、やがて十字軍運動が本格化して両者が東地中海沿岸域で直接、相まみえる頃には極めて深刻なものに発展していったのである。

今回の研究は、そうした現実の世界ではビザンツ・西欧間の緊張関係が日増しに増していた12世紀において、西欧、とりわけフランスで成立した文学作品の中に登場するビザンツ人やビザンツ帝国の姿を分析する試みである。ビザンツに対する西欧人の関心の高さを反映するかのように、この時代の多様な文学作品には様々なビザンツ人たちが登場する。しかもそれは一般に予想されるほどはシニカルなものではなく、しばしば好意的で共感をもって描き出されている点はいささか意外な感じを受けるほどである。

従来、これらの文学作品は作者の荒唐無稽な空想の産物として、実証を旨とする歴史家の関心を引くことはほとんどなかった。しかし、それらの作品は、作者の想念に負う部分が大きければ大きいほど、その時代の人々の心性（偏見や誤解や思い込みを含めて）をストレートに反映している可能性が高いことを見逃してはならない。それらは、その限りにおいて、この時代の人々の心性を探る試みに際して絶好のデータを提供する魅力的な分析対象と看做すことができるのである。

これまで、一般にこれらの作品を分析する任務は文献学者や文学史家に委ねられてきたが、それを歴史学、とりわけビザンツ史の視角から検証したならば、先行研究では掬い取ることのできなかつた新たな知見が得られることが期待されるだろう。いわば、今回の試みは、西欧人の偏見や思い込みの皮膜を通過して歪められたビザンツ像を現代のビザンツ研究者の目で検証し、こうした二重のプリズムを通して浮かび上がってくる画像をキャンパスに写し取ろうとするものである。こうした作業を通じて、我々は中世の西欧人が「他者」としてのビザンツ人にいかなる役回りを割り振ろうとしていたのか、そして反対に、そうした想念は彼ら西欧人のいかなる自己理解に基づくものなのかを究明することになるだろう。

研究活動の概要

研究種目 : 基盤C 一般(2)

研究期間 : 平成15年度～平成17年度

課題番号 : 15520446

研究課題名 : 他者としてのビザンツ人
—同時代人の心象世界の中のビザンツ像—

研究代表者 : 根津 由喜夫 (金沢大学文学部助教授)

交付決定額(配分額)

平成15年度	1,300
平成16年度	1,600
平成17年度	600 千円
総計	3,500 千円

研究発表(学会誌等)

1. 根津由喜夫「アーサー王宮廷のビザンツ騎士—クレチアン・ド・トロワ『クリジェス』雑考—」 『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』25号、2005年、1-38頁
2. 根津由喜夫「ローマ生まれの救世主—ゴーティエ・ダラス『エラクル』を読む—」 『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』26号、2006年、19-50頁

アーサー王宮廷のビザンツ騎士 ——クレチアン・ド・トロワ『クリジェス』雑考——

I はじめに

伝説のブリタニアの英雄アーサー王がオックスフォードで開催した馬上槍試合に、正体を隠した一人の騎士が現れた。

彼は連日のトーナメントで「湖の騎士」ランスロ、「聖杯の騎士」ペレスヴァルなど名高い円卓の騎士を打ち破り、王の甥ゴーヴァンとは互角の戦いを展開して、大いにその武名を称えられたのである。

この騎士の名はクリジェス。彼の母は前述のゴーヴァンの姉妹だったから、彼にとってアーサー王は大叔父にあたる。

注目すべきは彼の父方の血筋である。彼の父アレクサンドルはコンスタンティノープルとギリシアを支配する同名の皇帝アレクサンドルの長子であり、それゆえクリジェスは皇帝家の正嫡として将来、帝位に就くことが約束された青年だったのである。

もちろん、ここまで話してきたのは文学上の虚構の世界の出来事である。

それは、「フランス最初の偉大な物語作家」クレチアン・ド・トロワの主要な5つのロマンス作品のうち2番目に位置する『クリジェス』の筋書きなのであった。¹

いわゆる「ブルターニュもの」と総称されるアーサー王宮廷をめぐる物語にコンスタンティノープルの皇帝家出身の若者が主人公として登場しているだけでも充分、驚くべきことだが、『クリジェス』には他のクレチアンのロマンスとは異なる趣向が凝らされていたことも併せて注目しておかなければならない。すなわち、そこで作者が描き出しているのは、他の作品に漂う幻想的なケルトの異境のイメージではなく、現実の時間的、空間的な広がりをもった極めてリアリスティックな世界なのである。

そうした特徴を端的に示しているのが、『クリジェス』の中に次々と登場する具体

註

¹ 筆者が主に参照した校訂版は、Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Édition publiée sous la direction de D. Poirion avec la collaboration d' A. Berthelot, P.F. Dembowski, S. Lefèvre, K. D. Utti et Ph. Walter, Bibliothèque de la Pléiade, 1994 である。本文中で表示するテキストの行数は、本校訂版に基づいている。この他に、*Les romans de Chrétien de Troyes, II : Cligès*, éd. A. Micha, Paris, 1954 ; Chrétien de Troyes, *Cligès*, ed. S. Gregory and Cl. Luttrell, Cambridge, 1993 ; Chrétien de Troyes, *Cligès*, Translated by B. Raffel, New Heaven, 1997 を必要に応じて参照した。

的な地名である。

たとえば、コンスタンティノーブルを船出したアレクサンドルは、ブリテン島南岸のサウザンプトン(Sozhantone)に上陸し、当時、アーサー王が宮廷を構えていたウィンチェスター(Guincestre)に赴いている(vv. 272-300)。

また、ブルターニュに滞在中のアーサー王の許にブリテンの謀反の知らせが届いたのは、ロンドン(Londres)、カンタベリー(Quantorbire)を経由してドーヴァー海峡を渡ってのことであった(vv. 1052-1056)。

さらに物語の終盤でアーサー王がイングランド、フランドル、ノルマンディー、[イル・ド・]フランス、ブルターニュ、そしてスペインの隘路に至るまでの全土から大軍を集結させる場面など(vv. 6684-6689)、ドーヴァー海峡を挟んで英仏にまたがる広大な版図を誇ったヘンリー2世治下のアンジュー帝国を想起させている。²

こうした極めて具体的な地理的情報に加え、物語の中心を成すドイツとコンスタンティノーブル両皇帝家の政略結婚を巡る物語も、後述するように多くの研究者たちの関心を集め、同時代のヨーロッパ国際政治の中にそのモデルを探し出そうという試みが19世紀以来、繰り返されることになったのである。³

しかし、こうした史実の中に文学作品のモデルを探そうとした試みは、一時は大きな盛り上がりを見せたものの、1960年代にさしかかる頃にはすっかり下火になってしまったようである。

それは、何よりも、多くの仮説が提示されたものの、そのいずれもが決め手に欠け、議論が収斂してゆかなかったことが大きな要因だったと思われる。後に紹介するように、これらの議論の多くは、物語の筋の一部と似かよった史実を探し出してそれが作品のモデルだと主張する一方で、細部で両者が一致しない箇所については作者の創作上の意図に基づいて改変が施されたのだ、と語って済ますなど、多分にご都合主義的な論法が目立ち、そうした手法が、こうした研究の限界と認識されたのは間違いないものと思われる。

かくして、クレチアン・ド・トロワ研究の主たる潮流は、今日では、こうした作品の成立背景を探る試みから、テキスト自体の内容分析や、そこに隠された象徴的な意味を読解することを目指した研究へと移っているようである。⁴

だが、一見、見捨てられて久しい廢鉱のように見える、こうした研究領域も、歴史研究者の目から見れば、まだ魅力的な鉱脈が隠されている可能性があるように思われ

² cf. 青山吉信『アーサー伝説—歴史とロマンスの交錯—』岩波書店、1985年、254-258頁

³ 後で見るように、『クリジェス』の成立年代として今日、定説となっている1176年頃という年代も、こうした一連の同時代国際政治史との連関の中から導き出された数字である。

⁴ cf. 渡邊浩司『クレチアン・ド・トロワ研究序説—修辞学的研究から神話学的研究へ—』中央大学出版部、2002年、特に10-18頁。

る。また、この半世紀ほどの歴史学の進歩から得られた成果を踏まえて、この主題に取り組んだならば、50年前には気付かれなかった新たな知見を得ることも期待されるだろう。

そのための準備作業として、以下ではこれまでに提示されてきた学説を整理し、先人たちが『クリジェス』のモデルとして想定した史実を列挙してみることにしよう。なお、あらかじめ断っておくが、現時点において、過去の学説の中からひとつを作品の真のモデルとして選定することは、筆者の能力を超えており、本稿の目的とするものではない。ただ、これら一連の研究を渉猟する中で、この時期、西欧、とりわけフランスの王侯たちとビザンツ宮廷との間に思いのほか活発な交流があったことが確認されるのは興味深いことである。

こうした視角に着目すれば、いささか行き詰まりを示している従来の同時代史に文学作品のモデルを探す即物的な手法に代わって、歴史学研究者がこの作品にアプローチすべき別の手法が浮かび上がってくるのではないだろうか。

この点で参考になるのが、フランス中世社会史の大家ジョルジュ・デュビーが、宮廷風恋愛を扱った文学作品とフランス貴族社会との関係に触れた次のような発言である。

「この文学の主人公たちや女主人公たちに付与された仕草と感情は、詩人たちが喜ばせよう、と腐心した男や女の行動と無関係ではなかった。なぜならこれらの歌曲、これらの物語は気に入られたのであり、さもなければ彼らの言葉は決してわれわれにまで伝わらなかったであろう。それらが気に入られたのであるから、現実の一面を反映していたこと、それらの中に登場した人物たちが幻想とはいえそれほど奇異でもなく、かけ離れ過ぎてもおらず、彼らの愛の進展を情熱をこめてたどる騎士や貴婦人が登場人物に自分自身の態度のいくつかを認め、夢想の中で、彼らと自分とを一体化することが可能であった。ランスロ、グニエーヴルが身近に思えた。模倣できない相手ではなかった。現に彼らは模倣され、人は彼らを模倣するのを楽しんだ。聖者伝のように、気晴らしの文学はモデルを提示した。これらの手本は、度合いの違いはあれ追随者を生み、そのような模倣の結果、社会の現実がフィクションにいつそう密接に近づいた。」⁵

この発言のひそみに倣えば、クレチアン・ド・トロワの『クリジェス』に登場するビザンツ出身の騎士たちは、12世紀フランスの貴族たちの想念の中に結ばれた理想のビザンツ人の姿だったのではないだろうか。

⁵ ジョルジュ・デュビー（新倉俊一・松村剛訳）『十二世紀の女性たち』白水社、2003年、391頁。

12世紀、西欧人のビザンツ観は、南イタリアのノルマン人とビザンツとの相次ぐ戦争やそれに伴う後者の反ビザンツ・キャンペーン⁶、さらに十字軍行軍中のトラブル⁷などの影響で次第に悪化していったように考えられている。

そうしたなかでコンスタンティノーブルの皇子が、物語の主人公として一見したところでは極めて好意的に描かれていることは、非常に注目すべき事象だと言えることができるだろう。

そこで本稿では、先行研究に見られる史実と文学の照合作業に加えて、『クリジェス』自体のテキストに分け入り、そこから読み取れるフランス上層貴族層の心象世界の中のビザンツ人のイメージを復元する作業にもあわせて取り組みたいと考えている。こうした作業を通じて、我々は、12世紀後半、フランスの高位貴族たちの想念の中にあつた「ありうべきビザンツ人」の姿を具体的に描き出すことができるのではないだろうか。

II 作者と物語

具体的な考察に入る前に、今回、取り上げる『クリジェス』をめぐる基本的な情報を整理しておこう。

まず、作者であるクレチアン・ド・トロワについて。⁸

彼は「中世最大の作家であり、騎士道物語の真の創設者であつた」と称えられている⁹が、その生涯について知られていることは驚くほど少ない。「クレチアン・ド・トロワ」という完全な形の名称で彼が登場しているのも、彼のアーサー王ものの最初の作品『エレックとエニード』の冒頭部（第9行）の一度きりにすぎない。

ジャン・フラピエによれば、彼は、その文章に残された痕跡から、シャンパーニュ地方出身であつたことは間違いないものの、同地方の中心都市トロワの生まれである

⁶ ビザンツとノルマン・シチリア王国間の敵対関係については、さしあたり、H. Wieruszowski, "The Norman Kingdom of Sicily and the Crusades", in K. M. Setton ed., *A History of Crusades*, vol. II, Madison, 1969, pp. 5-42, esp. pp. 3-5, 10-16, 36f を参照。アンティオキア公ポエモン（ロベール・ギスカールの息子）が1107年に対ビザンツ遠征に乗り出すに先立って西欧で行なつたプロパガンダ活動については、R. B. Yewdale, *Bohemond I, Prince of Antioch*, Princeton, 1924 (rep. New York 1980), pp. 106-114 を参照のこと。

⁷ 十字軍行軍中のトラブルが、西欧側のビザンツに対する不信感を増幅させたことについては、さしあたり、S. Kindlimann, *Die Eroberung von Konstantinopel als politische Forderung des Westens im Hochmittelalter. Studien zur Entwicklung der Idee eines lateinischen Kaiserreichs in Byzanz*, Zürich, 1969, S. 57-68, 149-168, 205-217 を参照。

⁸ 彼の生涯に関しては、さしあたり、ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』朝日出版社、1988年、12-81頁、菊池淑子『クレチアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』平凡社、1994年、185-200頁等を参照。

⁹ 神沢栄三「物語の発生と展開」、福井芳男他編『フランス文学講座1—小説1』、大修館、1976年、22頁

かは確証できず、そこに一時的に滞在していただけの可能性も残されているという。

10

「クレチアン」という名前を手がかりに、同時代の史料に登場する同名の人物と彼を同定しようとする試み¹¹ や、彼を改宗ユダヤ人に比定する説¹² などが出されているがいずれも決め手に欠けている。天沢退二郎氏が、ロジェ・ドラゴネッティの説として、彼の筆名は「トロイ（＝異教世界）のキリスト教徒」を意味する、という解釈¹³ を紹介しているが、この仮説が受け入れられるとすれば、彼の正体はますます深い霧に包まれてゆくように感じられる。

現時点で彼のキャリアとしてほぼ確実なこととして言えることは、彼がトロワないしその周辺の聖堂附属学校で学業を積み、いわゆる三学（文法、修辞学、弁証法）に加え、おそらく四科（算術、幾何、天文学、音楽）を習得していたこと、そしてラテン語に通じ、古典作品に親しんでいたことが初期のオヴィディウスの翻案物から裏付けられること、くらいである。

文筆家としての彼の活動時期に関して手がかりになるのは、『荷車の騎士』の中に記されたシャンパーニュ伯妃マリーへの献辞と、『聖杯物語』がときのフランドル伯フィリップ・ダルザスに献呈されている、という2つの事実である。マリーがシャンパーニュ伯アンリ1世と結婚したのは1164年だったから、『荷車の騎士』はそれ以降の作品ということになる。また、フィリップがフランドル伯に就任するのは1168年であり、彼は1190年3月に第3回十字軍に参加して出陣し、翌91年6月にアッコン前面で死去しているから、『聖杯物語』はおそらく伯が出征する前に執筆が開始されたものと思われる。この作品は未完に終わっており、彼はその執筆中に死去したものと推定されている。

以上の考察から、彼は12世紀後半、シャンパーニュ地方を中心とした北フランスを舞台に活動していたことが確認できるだろう。その間、『クリジエス』で語られる英国の地理が詳細で正確であることを理由に、一時期、彼がイングランドに滞在していたと推測する研究者¹⁴ もいるが、確証する術はない。

¹⁰ ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』13頁

¹¹ たとえば、1173年の文書の登場するトロワの聖ルー修道院参事会員クリスチアヌスなど。

cf. Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, 1994, pp. xi-xii.

¹² 彼を改宗ユダヤ人と推定する根拠は、①その洗礼名がしばしば改宗ユダヤ人に付与されていること ②トロワには重要なユダヤ人共同体があったこと ③彼の『聖杯物語』は、古いモーセの律法が新しいキリスト教の教えに取って代わられること、すなわち、ユダヤ人の改宗を表す物語として解釈できること、である。cf. ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』246頁。これらの論拠はいずれも状況証拠の域を出ていないように思われる。

¹³ 新倉俊一他編『フランス中世文学集2－愛と剣と－』白水社1991年、401-402頁。

¹⁴ Chrétien de Troyes, *Cligès*, Translated by B. Raffel, p. 215f; K. N. Ciggar., *Western Travellers to Constantinople. The West and Byzantium, 962-1204: Cultural and Political Relations*,

『クリジェス』の写本にも一言、触れておこう。¹⁵

この作品には、8篇の写本¹⁶と3篇の断片が現存している。そのうち最古のものがパリ国立図書館所蔵の通称 Guiot 写本 (BN. fr. 794) である。その成立は 1230-1235 年頃と推定される。この写本を作成したギヨなる人物は、シャンパーニュ地方、プロヴァンの町のノートル・ダーム・デュ・ヴァル教会の近くに居住していた書籍商であり、彼はこれを売却する目的で作成したことが明らかになっている。¹⁷ この写本がその後たどった運命については、それが 1725 年、bibliothèque de Charles Cistery-Dufay から Imbert Châtre de Cangé に購入され、その後、同人によって 1733 年に国王に寄贈されたこと以外、何も知られておらず、それ以前の来歴については残念ながら何ひとつ確たる知見は得られない。

さて次に、物語の梗概を簡単に整理しておこう。

『クリジェス』は、主人公クリジェスの父母アレクサンドルとソルダモールの馴れ初めを語る第 1 部と、主人公とドイツ皇女フェニスのロマンス、そして叔父アリスとの三角関係が語られる第 2 部の 2 部構成になっている。親子 2 代の恋愛活劇といえ、ビザンツ史研究者ならばすぐに『ディゲニス・アクリタス』叙事詩¹⁸との類似性を思い浮かべるかもしれない。だが、ここではそうした議論に深入りせず、こうした 2 世代の物語は、トマ・ダングリテールの『トリスタン』における主人公の両親リヴァランとブランシュフルールの物語と釣り合いを取るためだった、というフラピエの説¹⁹を紹介するに留めておく。

作品の前段では、主人公クリジェスの両親の物語がかなり詳細に物語られている。

「コンスタンティノープルとギリシアの皇帝」アレクサンドルの長子、同名のアレクサンドルは、長じるに及んで、広く世に知られたアーサー王の宮廷に赴き、同王から騎士に叙任されることを熱望するようになる。彼は父帝の慰留を振り切り、イングランドへと向かう。

その地で彼は武名を挙げ、望みどおりアーサー王から騎士に叙任される一方で、同

Leiden, 1996, p. 238

¹⁵ 以下の記述は、主として Chrétien de Troyes, *Cligès*, ed. S. Gregory and Cl. Luttrell, pp. vii-xxvii に拠る。

¹⁶ 8 篇のうち 6 篇がパリの国立図書館所蔵、残り 2 篇はトゥール市立文書館とトリノ国立文書館に所蔵されている。このうちトゥール写本には、冒頭と巻末にかなりの欠損がある。

¹⁷ cf. M. Roque, "Le manuscrit B.N. fr. 794 et le scribe Guiot", *Romania*, 73, 1952, p. 178

¹⁸ *Digenis Akritas: The Grottaferrata and Escorial Versions*, edited and translated by E. Jeffreys, Cambridge, 1998 渡辺金一「ビザンツ文学—英雄詩『ディゲニス・アクリタス』—」『プラティア』2号。1983年、1-8頁、同3号、1984年、1-7頁

¹⁹ ジャン・フラピエ (松村剛訳) 『アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ』137頁

王の姪（王の甥ゴーヴァンの妹）ソルダモール²⁰と恋に落ち、王妃グニエーブルの配慮で両人は結婚、その14ヵ月後には嫡男クリジェスが誕生した。

その頃、コンスタンティノーブルでは父帝に死期が迫っていた。彼はイングランドから長子アレクサンドルを呼び戻そうと使節団を派遣するが、彼らに乗せた船は途中で難破してしまう。唯一人生き残った使者は、弟アリスに心を寄せている人物であった。彼は、帰路、乗船が難破しアレクサンドル皇子を含む全員が落命したと嘘をついて弟アリスが帝位に就く道を開いたのである。

とにかくするうち、故国で弟が帝位に昇ったことを知ったアレクサンドルは、急遽、妻子と40人の騎士を率いて帰国、アテネ滞在中のアリスと談判に及んだ。後者は顧問たちの勧め²¹で兄との妥協を図り、結局、アリスは皇帝としての名目的な地位とそれに伴う栄誉は保持するものの、帝国全土の統治権はアレクサンドルに引き渡すこと、そしてアリスは生涯、結婚せず、彼の死と共に帝位はクリジェスに継承されること、が両者の間で取り決められたのである。

その後、アレクサンドルとソルダモールは相次いで世を去り、物語の第1部は慌しく幕を閉じる。アレクサンドルは息子クリジェスに、彼もまたアーサー王宮廷を訪ね、修行を積むよう言い残して息を引き取ったのである。

皇帝アリスは、その後、数年間、兄との約定を守り、独身を保ってきたが、取り巻きたちの熱心な勧めに考えを改め、結婚することを決意する。皇妃候補として名が挙がったのは時のドイツ皇帝の娘フェニスだった。南ドイツ、ラティスボン（レーゲンスブルク）の宮廷で求婚の使節を迎えたドイツ皇帝は、彼女がすでにザクセン公と婚約していたにもかかわらず、それを破棄してこの申し出を了承する意を示したのである。

皇帝アリスは婚礼を挙げるため、甥クリジェスを伴い、大軍を率いて、その頃ドイツ皇帝が宮廷を移していたケルンの町に赴いた。ところが、両皇帝の対面の場で出会ったフェニスとクリジェスは一目で恋に落ちてしまう。婚礼の当日、フェニスは魔術に長けた侍女テッセラが調合した秘薬をアリスに飲ませ、彼に彼女の幻像を抱かせることで、好きでもない男に肉体を支配されることを巧みに回避したのである。²² 帰

²⁰ 'sororee d' amors' (v. 978) 「愛で飾られた」の意（渡邊浩司『クレチアン・ド・トロワ研究序説』121頁）。フラピエは「恋する金髪娘」という訳を付している（ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』137頁）。

²¹ 顧問たちは、ポリネクスとエティオクレスの故事（1155年頃成立した『テーベ物語』の登場人物。クレチアンがこの作品を知っていたことがこの箇所から確認される）を引き合いに出して、兄弟同士が殺し合い、国土を荒廃させることは回避すべきだとアリスに勧告したという。

²² クレチアンは、このことによって、フェニスとアリスの間には正式な婚姻関係は成立しなかった、と考えているようである。それゆえ、その後でフェニスとクリジェスが結ばれたとき、それはトリスタンとイゾーのような姦通愛ではなく、合法的な婚姻が成立するのである。

帰路、一行はラティスボン近郊でフェニスの身柄の強奪を図るザクセン公の軍勢の急襲を受けるが、クリジェスの活躍で事なきを得ている。

その後、フェニスに心を残したまま、クリジェスは父の遺言に従ってアーサー王の宮廷へ武者修行の旅に出た。本稿の冒頭で紹介したオックスフォードの馬上槍試合の挿話はこのときのことである。

しかしフェニスへの思いは断ちがたく、ほどなくしてクリジェスはギリシアに帰国する。両人は長い対話の末にお互いの思いを確認し合い、あわせてフェニスは秘薬の力でアリスを欺いた事の次第をクリジェスに語る。2人でブリテン島に駆け落ちしようというクリジェスの提案を一蹴し、彼女は自分たちの名誉も傷つけず、世間の非難を浴びぬような別の計画を明らかにした。彼女は侍女テッセラの第2の秘薬を用いて死を装い、その後、密かに墓所から脱出して秘密の隠れ家でクリジェスとの愛の生活を送ろうと考えたのである。

計画は成功し、恋人たちは、クリジェスの従者ジャンがコンスタンティノーブルの郊外に造営した秘密の塔の豪華な地下室で15ヶ月にわたって甘い生活を送ったのである。やがて春が訪れ、ナイチンゲールの囀りに誘われた2人は、地下室を出て、高い壁に囲まれた塔の美しい果樹園で過ごすようになる。

逃げたハイタカを追って1人の騎士が果樹園に侵入したことで、安逸の日々は突然、終止符が打たれた。彼はそこで2人の恋人を発見する。騎士はすぐさまそれを皇帝アリスに報告、クリジェスとフェニスは皇帝の差し向けた追っ手を逃れてアーサー王の宮廷へと逃亡した。

アリスの違約とクリジェスの窮状を耳にして憤慨したアーサー王は大軍を集めてコンスタンティノーブルへ征討の軍を進めることを決断する。だが、そこにアリス憤死の報が届く。クリジェスとフェニスはコンスタンティノーブルの正統な支配者として迎えられることになり、ここにおいて物語はハッピーエンドで大団円を迎えるのである。

天沢退二郎氏の評するところによれば、この物語は「巧みな設定により、この愛は不倫ではなく、伯父の存在もまた合法的に除かれ、ヒーローとヒロインは理想の夫婦の具現者となる」のである。²³

ジョルジュ・デュビーは、この物語の背景として、この時期、貨幣経済が発展し、それに伴って貴族の資産において不動産が占める比重が低下したことを指摘し、資産の流動性が高まったことで、次男以下に独身を迫る従来の家門政策が緩み、多くの戦

²³ 天沢退二郎「解説 クレチアン・ド・トロワ」、新倉俊一他編『フランス中世文学集2-愛と剣と一』所収、白水社1991年、401-405頁。引用箇所は403頁。

士が自前の家庭を築くことが可能になったことを想定している。²⁴

この物語の末尾に付された意味深長なエピローグについては、後で改めて検討を加えることにしたい。²⁵ また、物語の登場人物からいやでも看取されるトリスタン説話との関連性や、他の多くの文学作品にも登場する「偽りの死」の主題をめぐる議論などは、専門の文学研究者の考察に委ね、ここでは立ち入らないことにする。²⁶

以下においては、我々歴史研究者にとって関心の的である物語と史実の対応関係を論じた研究を対象を限定し、まずそれらについて発表された年代順に要点を整理する作業から取り組むことにしよう。

Ⅲ 史実の探索

ここでは、これまでに発表されてきた『クリジェス』の歴史上のモデルをめぐる議論を、公刊された年代順に要約、列挙することにする。その際、これらの学説相互の比較を容易にするため、以下で紹介する先行研究中の議論は、物語の軸を成す、帝位をめぐる叔父と甥の確執、およびドイツ皇帝家との通婚交渉という2つの論点に絞ることとし、それ以外の箇所と史実との関連に触れた部分は必要に応じて論及するに留めることにしたい。

まず、1908年に公刊されたF. セッテガストの説から始めよう。²⁷

彼は、物語の主要な登場人物のモデルとして、11世紀後半にビザンツで権力を握ることになるコムネノス家の人々を思い浮かべている。すなわち、物語冒頭でコンスタンティノーブルの帝位にあった老アレクサンドル（同名のアレクサンドルおよびアリスの父）は、同家で初めて帝位に登ったイサキオス1世（在位1057-1059）、そして前記2兄弟を、同帝の甥イサキオスとアレクシオスの兄弟に比定しているのである。

彼はその根拠として、先代の皇帝と年長の息子（実際には甥）の名前が同一であること、²⁸ 弟のアレクシオスの名はアリスの中に面影を留めていること、を指摘している。さらに、1081年のコムネノス兄弟の反乱と権力掌握に際して、兄のイサキオスが

²⁴ ジョルジュ・デュビー（新倉俊一・松村剛訳）『十二世紀の女性たち』111-125頁、特に123-124頁。

²⁵ cf. 渡邊浩司『クレチアン・ド・トロワ研究序説』125-126頁。

²⁶ トリスタン説話との関連については、さしあたり、神沢栄三「Chrétien de Troyesにおけるトリスタン神話—Cligèsについて—」、『名古屋大学文学部研究論集』73号、1978年、163-185頁、およびアルベール・ポフィレ（新倉俊一訳）『中世の遺贈—フランス中世文学への招待—』筑摩書房、1994年、187-196頁を参照。

²⁷ F. Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", *Zeitschrift für romanische Philologie*, 32, 1908, S. 400-422

²⁸ セッテガストによれば、彼らの名前がイサキオスからアレクサンドルに改められたのは、極めてユダヤ臭の強いイサキオス（イサク）という名が忌避され、いかにもギリシア的で、しかも弟のアレクシオス（アリス）と音の近いアレクサンドル（アレクサンドロス）がこれに代えて選ばれた結果であるという。

帝位を弟アレクシオスに譲り、自らはセバストラートの称号を得て専ら内政を主管したことも、物語の中の2人の兄弟の間で結ばれた協定に符合する事実として彼は指摘するのである。

彼の挙げる傍証はこれに留まらない。先にも述べたように、物語の中で主人公クリジェスはドイツ皇女と恋に落ちるのだが、それと同じように、1082年頃、セバストラート、イサキオスの長子（セツテガストは名を挙げていないが、それが後のセバストス、デュラキオン長官のヨハネス・コムネノスであるのは間違いない）とドイツ皇帝ハインリヒ4世の娘アグネスの縁組みが外交ルートを通じて進められていたのである。²⁹ しかも、物語の中でビザンツ側が結婚を申し込んだ際、ヒロインのフェニスはずでにザクセン公と婚約していたのとまさに同じように、アグネスもシュヴァーベン公フリードリヒ（バルバロッサ帝の祖父）と婚約中だったのである。

セツテガストによれば、史実のシュヴァーベン公が物語ではザクセン公に改められているのは、ハインリヒ4世とザクセン人との間の長期にわたる敵対関係の記憶が反映されていたのだという。ただし、史実と物語が相似するのはここまでであり、実際にはビザンツとドイツ両宮廷間の交渉は最終的には不調に終わり、アグネスは当初の計画通りシュヴァーベン公の許に嫁いでいる。³⁰ そのため、皇帝と皇妃、そして若い皇帝の甥との間の三角関係のモデルは、この後で見るように別のシチュエーションに求められねばならなかった。

他方、主人公クリジェスのモデルと目されるセバストラート、イサキオスの長子ヨハネスに視線を転じるとすれば、彼とドイツ皇女との間の縁談が交渉されていた頃、彼の叔父であるアレクシオス1世帝にはまだ嫡出子がなかったから、その時点では彼が帝位継承予定者となる可能性も小さくはなかった。子のない皇帝の後継者として皇帝の兄の息子が想定される、という物語と同じ筋立てがそこに認められるのである。これに加え、セツテガストは触れていないが、デュラキオン長官在任中の1091年頃に叔父アレクシオス1世に対する謀反の容疑をヨハネスがかけられていること³¹も、叔父に約定を破られ、帝位継承の望みが薄れたクリジェスの立場と重なり合うものがあるように感じられる。

²⁹ Anne Comnène, *Alexiade*, éd., B. Leib et P. Gautier, 4 vols, Paris, 1937-1976, vol. I, p. 135 ; F. Dölger und P. Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches*, vol. 2. 2Aufl. München, 1995, no. 1068, 1077

³⁰ セツテガストが語るところによれば、ハインリヒは軍事行動を起こすため、ビザンツ側からの資金援助を当てにしており、そのために先に結ばれた婚約を破棄する気などなかったにもかかわらず、交渉を長引かせてビザンツ側に気を持たせるような素振り続けたのだという。

³¹ cf. J.-C. Cheynet, *Pouvoirs et contestations à Byzance (963-1210)*, Paris, 1990, pp. 96f, 368 ; B. Skoulatos, *Les personnages byzantins de l' Alexiade. Analyse prosopographique et synthèse*, Louvain, 1980, no. 87, pp. 135-138.

彼はまた 1096 年 8 月にデュラキオンの町で第 1 回十字軍に参加したユーグ・ド・ヴェルマンドワ（仏王フィリップ 1 世の弟、ルイ 7 世の大叔父にあたる）の接遇にもあたっている³² ので、彼の噂はフランス王家の周辺にも伝わっていたことは充分ありえることだろう。

他方、セッテガストが、皇帝を出し抜いて皇妃と結婚するロマンの主人公のモデルとして挙げているのが、11 世紀前半にビザンツの帝位を占めたミカエル 4 世（在位 1034-1041）である。彼は政府の要人だった兄の仲介で宮廷に入り、女帝ゾエの愛人となって彼女の夫であるロマノス 3 世（在位 1028-1034）を殺害、彼から帝位を奪った人物である。³³ セッテガストは、この 11 世紀前半のエピソードが西欧に達したのは 12 世紀半ばのもう一人のミカエル、すなわちミカエル・グリュカスの年代記を通じてであると推定し、このグリュカス（ギリシア語で「甘美な」、「愛らしい」の意味にも解される）の名から「クリジェス」という主人公の名前が得られたのだと推理する。³⁴

次に『クリジェス』の史的モデルの探求と作品の年代画定において今日、通説の地位を築いているアンティーム・フーリエの学説を紹介しよう。³⁵

彼は、1170 年から 1176 年にかけてビザンツとドイツの両宮廷間で展開された活発な外交活動を、物語の背景に想定している。その際に彼が注目するのが交渉の舞台となったドイツ皇帝の宮廷所在地である。

『クリジェス』によれば、最初にドイツ皇女に求婚するためにコンスタンティノープルからの使節が現れるのはラティスボン（レーゲンスブルグ）の宮廷であり、次いでコロニー（ケルン）でアリス、クリジェスらの臨席のもと盛大な婚礼が執り行われ、そして一行は帰途、ラティスボン近郊のドナウ河畔でザクセン公の襲撃を受けることになる。³⁶

このラティスボン、コロニー、ラティスボンという順序に彼は注目する。そしてそれに合致する事例を渉猟した結果、前述した 1170-1176 年の時期に行き着いたのである。以下、フーリエの説明に従って事実関係を記せば以下ようになる。

1170 年 5 月 24 日、聖霊降臨祭にドイツ皇帝フリードリヒ 1 世バルバロッサはラテ

³² Anne Comnène, *Alexiade*, éd., B. Leib et P. Gautier, vol. II, p. 213f.

³³ cf. Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E. Renauld, 2éd., Paris, 1967, 2vols, vol. I, pp. 44-52

³⁴ F. Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S. 408-416. グリュカスをめぐる議論はこの後にもう一度取り上げる予定。

³⁵ A. Fourrier, "Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes", *Bulletin bibliographique de la Société internationale arthurienne*, 2, 1950, pp. 69-88; Id., *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, Paris, 1960, pp. 160-178.

³⁶ フーリエによれば、襲撃の場が南ドイツのレーゲンスブルグ近郊に設定されているのは、ときのザクセン大公ハインリヒと獅子公がバイエルン大公をも兼任していたという史実を反映しているのだという。cf. A. Fourrier, "Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes", p. 75.

イスボンに宮廷を開いた。フーリエによれば、「マインツ大司教クリスチアンをコンスタンティノーブルに派遣したのは明らかにそこから」であった。³⁷

翌 1171 年 6 月、バルバロッサはケルンに盛大な入市式を行なう。ここにビザンツ使節が来訪し、彼の息子とビザンツ皇帝マヌエル 1 世の一人娘マリアとの結婚が協議された。³⁸ さらにこの協議を継続させるために、翌 1172 年初頭にはウォルムス司教コンラートがコンスタンティノーブルに派遣されることになった。このドイツ使節の一行には、聖地巡礼に向かうザクセン大公ハインリヒも同行していた。

フーリエが語るところによれば、ドイツ皇帝の最大のライヴァルであったザクセン大公は、『クリジェス』に登場する彼の同輩同様、ビザンツとドイツ皇帝家の間に婚姻同盟が成立するのを自己の利益に反するものと考えていた。彼は聖地からの帰途、コンスタンティノーブルに立ち寄って皇帝マヌエルと会見しているが、ここで両者による反バルバロッサ同盟が協議された、とフーリエは推定している。

1174 年 6 月 24 日、ラティスボンで帝国集会が開催され、そこにはザクセン公ハインリヒの姿もあった。ここに来訪したビザンツ使節は、バルバロッサと婚姻同盟について最後の協議を行なったが成果はなかった。

その後、フリードリヒ・バルバロッサとハインリヒ獅子公との関係は、1175 年のバルバロッサ帝の北イタリア遠征にハインリヒが増援軍を送ることを拒否した挙句、翌 78 年 5 月、レニャーノの戦で皇帝軍が甚大な敗北を喫したことで決定的に悪化した。両者の対立は最終的には獅子公の失脚と帝国追放に帰着するのである。

フーリエによれば、『クリジェス』の成立は、バルバロッサと獅子公の対立が公然化した 1176 年以降のことであり、ザクセン公を敵役にする設定は、ドイツ皇帝に好意的なシャンパーニュ宮廷の空気を反映しているのだという。³⁹

フーリエは上記のごとく事実関係を整理したうえで、作者のクレチアンは、これを文学作品として仕上げるために以下の 3 点について事実を改変したのだと論じている。第一に、実際の外交交渉の場ではドイツ皇帝の息子とビザンツ皇帝の娘の間の結婚が協議されたのだが、『クリジェス』では男女の組み合わせが逆になっていること。第

³⁷ *ibid.*, p. 76.

³⁸ フーリエは、バルバロッサがレーゲンスブルグやマインツ、アーヘンなどには頻繁に訪れていたのに対し、ケルン訪問は稀だったこと（38 年間の治世中、5 度のみ。その最後がこの 1171 年の事例）を指摘し、『クリジェス』の中で、ことさらにケルンが皇帝の滞在地となっている点に注目している。

³⁹ A. Fourrier, "Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes", pp. 78-80; *Id.*, *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, pp. 170-175. ちなみに、M. Halperine, "Duke of Saxony and the Date *ad quem* of *Cligès*", *The Romanic Review*, 21, 1930, pp. 231-241 は、やはりザクセン大公が敵役として登場することに注目しているが、そのことから、『クリジェス』成立をむしろ、ハインリヒ獅子公がシャンパーニュ伯妃マリーの異父妹（アリエノール・ダキテーヌと英王ヘンリー 2 世の娘）マチルドが結婚した 1168 年よりも前に想定している。

二として、実際には交渉は決裂したが、物語では成立していること。そして第三に、史実ではビザンツ皇帝はザクセン大公と結託してドイツ皇帝に対抗しているのに対して、物語では2人の皇帝は一致して敵役であるザクセン大公と対決していること、以上である。

なお、フーリエは、『クリジェス』が1176年前後に成立したという自説を補強する傍証として、この時期、ボーヴェー司教にルイ7世王の甥フィリップ・ド・ドリュエーが就任していること⁴⁰を挙げている。クレチアンは『クリジェス』の種本をボーヴェーの聖ピエール大聖堂附属図書館で見つけたことを物語の冒頭で明言している(v.21)のだが、フーリエによれば、クレチアンが自由に同市の聖堂附属図書館をぶらつく機会を得たのは、フランス王家、シャンパーニュ伯家いずれとも親密な関係にあった⁴¹文芸愛好家の司教が就任したこの時期のことと推定されるからである。⁴²

以上のフーリエ説に対して全面的な反論を展開しているのがJ.ミスライである。⁴³

彼は『クリジェス』の全体的な筋立ての背景に取り立てて1170年代のフランス・ドイツ・ビザンツ関係を認める必要はなく、ドイツ皇帝とザクセン大公の対立に注目するならば、それはバルバロッサとハインリヒ獅子公の間の対立よりも、後者の父親ハインリヒ倣岸公とコンラート3世とのそれの方が物語のモデルとして相応しいと主張する。

さらにミスライが語るところによれば、フーリエ説の根拠は物語の舞台がラティスボン、ケルン、ラティスボンと移動してゆくことと、ドイツとビザンツとの間で政略結婚が協議されたことだけであるが、史実に照らせば、この縁談の男女の当事者の取り合わせが逆であり、また縁談自体、決して成立しなかったことに加え、舞台の移動に関する議論に関しても重大な現実との齟齬が生じていたのである。

すなわち、最初のラティスボンの場では、物語ではドイツ皇女に求婚するためにビザンツ使節が登場するのだが、史実ではそうした事実はなく、フーリエは、この地からコンスタンティノーブルへドイツ皇帝の使節が派遣された、という確証のない推論を提示しているだけなのだ。

次にケルンに関して言えば、史実では1171年6月にバルバロッサの長男とマヌエ

⁴⁰ フーリエによれば、フィリップがボーヴェー司教に就任したのは、前任者の司教の死(1175年5月17日)と、彼のためにこの人事に尽力した彼の叔父でランス大司教のアンリの死(同年11月13日)の間のこととされる。

⁴¹ フィリップの父とシャンパーニュ伯アンリ1世は良好な関係にあり、またフィリップ自身、アンリの友人であり、後者が1179年、十字軍に参加した際には彼に同行している。

⁴² A. Fourrier, *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, p. 173

⁴³ J. Misrahi, "More Light on the Chronology of Chrétien de Troyes?", *Bulletin bibliographique de la Société internationale arthurienne*, 11, 1959, pp. 89-120, esp. pp. 101-109.

ル1世の一人娘の結婚を協議するためにここにビザンツ使節が現れている。これが記録に残る最初のビザンツ使節であることをミスライは強調する。一方、物語の中でケルンに到着しているのはただの使節ではなく大軍を率いた皇帝アリスその人であった。しかも彼の来訪の目的は、交渉ではなく、1回目の交渉で合意済みのドイツ皇女との盛大な婚儀を執り行うためであった。

さらに2度目のラティスポンをめぐって牽強付会の度合いはさらに強まり、1174年、最終的に決裂した外交交渉と、物語における同市近郊でのザクセン大公による花嫁強奪作戦とを結びつけるのはどう見ても無理がある、とミスライは指摘している。

以上の議論と関連して、ミスライは、物語に登場するラティスポンとケルンという2つの都市のうち、ラティスポンはバルバロッサのお気に入りの滞在先のひとつであったこと、ケルンはそれと比べれば訪問回数は少ないにせよ、フランス人にはよく知られた有名な都市であり、ここで挙げられていても別段、不思議がる必要はないのだと言い添えている。

さらに彼がフーリエ説の致命的欠陥として指摘するのは、後者の主張する1170-1176年説では『クリジェス』の物語の主要なプロットを成す先代皇帝死去後、残された皇子たちの中で弟が兄を出し抜いて帝位を奪う、というモチーフが欠落していることである。

この点で彼がこうした設定に合致する事例として挙げているのが1143年のマヌエル1世即位時の状況である。この年、父ヨハネス2世（在位1118-1143）が没したとき、マヌエルは兄イサキオスを巧みに排除して権力を掌握することに成功した。

その後、1146年に彼はドイツ皇帝コンラート3世の義理の姉妹ベルタ・フォン・ズルツバッハと結婚しているが、その際、彼はベルタがコンラートの養女、つまりドイツ皇帝の娘、という資格を帯びることにこだわった。この点でミスライは、『クリジェス』と同様、ビザンツ皇帝とドイツ皇女の取り合わせが成立したことを強調する。しかも、当時、ドイツ皇帝の最大のライバルは、物語と同様に、ドイツ皇女を妻にもつザクセン大公だった、というのである。⁴⁴

以上の議論を踏まえてミスライは自信をもってこう断言している。「もしも具体的に歴史的状況が本当に『クリジェス』の中でほのめかされており、それによって *terminus a quo* 「始期」が示されるとしたら、それは私が思うに1171年や1176年であるよりもむしろ1146年である公算が高いだろう」⁴⁵

⁴⁴ 実を言えば、この場合、ビザンツ皇帝と結婚したドイツ皇女と、ザクセン大公の妻はもちろん同一人物ではない。ザクセン大公ハインリヒ倣岸公の妻はコンラートの1代前の皇帝ロータル3世の娘だった。

⁴⁵ J. Misrahi, "More Light on the Chronology of Chrétien de Troyes?" , p. 109.

続いて1962年にアンリとルネの2人のカーン（兄弟？）の連名で公刊された論文⁴⁶の考察に移りたい。

ここでは、フーリエが提示した基本的設定が受け入れられ、ビザンツ皇帝アリスがマヌエル1世、逸名のドイツ皇帝がフリードリヒ・バルバロッサ、そしてザクセン大公がハインリヒ獅子公に同定されている。こうした前提に基づいて、この論文は、物語の主人公であるクリジェスの歴史的モデルとして極めてユニークな人物を選び出している。それは当時のルーム・セルジューク朝スルタン、キリジ・アルスラン2世（在位1156-1192）である。カーンがこうした結論にたどりついたプロセスをたどると以下のようになる。

『クリジェス』において作者のクレチアンは、主人公クリジェスとドイツ皇帝を極めて好意的に描き出す一方で、ビザンツ皇帝アリスとザクセン大公を彼らの敵役として登場させている。そしてドイツ皇帝とザクセン大公の対立関係を踏まえるならば、クリジェスのモデルはマヌエル1世の敵対者たちの中から選ばねばならず、そこで第一に浮上するのが上述したスルタンだということである。

カーンによれば、このスルタンの公的な名であるキリジ・アルスラン Kilidji Arslan が Kilidji と Arslan という2つの構成要素に分けられ、その前半分に接尾辞 -s を付した Kilitzēs という形からクリジェス Cligès の名が成立したのだという。そしてその際、作者のクレチアンは、本来、赤の他人だったビザンツ皇帝とスルタンの関係を、物語では叔父と甥に改め、両者の政治的対立関係は一人の女性をめぐる恋の鞘当てに書き改められたのだ、と、説明しているのである。⁴⁷

カーンの議論は、これまで十分な説明が与えられてこなかった「クリジェス」という主人公の名前の由来についてほとんど初めて検討に値する説を提示している点においては評価できるものの、ビザンツの正統な帝位継承予定者の正体がイスラム教徒のトルコ人君主だった、というその結論は、どうしてもいささか突飛な感じは否めないだろう。

そうした疑問に対して、カーンは、スルタンに対する拒否反応を緩和させた要因として、彼が高貴なキリスト教徒女性の息子だった、という伝承があったことを指摘している。

その伝承によると、スルタンの母親は、第1回十字軍の有名な指導者の一人レーモン・ド・サン=ジルの姉妹イサベルだったという。彼女のもう一人の兄弟トゥールー

⁴⁶ H. et R. Kahne, "L'énigme du nom de Cligès", *Romania*, 82, 1962, pp. 113-121

⁴⁷ 第一の点に関して言えば、カーンは触れていないが、マヌエル帝とスルタンが外交書簡の中で互いに皇帝を「父」、スルタンを「息子」として呼びかけあった、という事実があったことが顧慮されるべきかもしれない。cf. Niketas Choniates, *Historia*, ed. J-L. van Dieten, Berlin, 1975, p. 123.

ズ伯ギョームはアリエノール・ダキテーヌの曾祖父にあたる。これらの家系は当時、聖地の十字軍国家のうちアンティオキア公領、トリポリ伯領を支配していたから、この伝承を信じるとすれば、スルタンはラテン的東方世界で最も名高い家系のひとつと縁戚関係にあったことになる。⁴⁸

スルタンを物語の主人公と結びつけるもうひとつの手がかりとしてカーンが指摘しているのは、前者がドイツ皇帝フリードリヒ・バルバロッサとの間で交わされていた婚姻同盟交渉である。

1173年、スルタンの使節がバルバロッサの宮廷を訪れ、スルタンの息子とバルバロッサの娘との結婚を申し入れた。結局、この縁談はバルバロッサの娘の早世によって消滅するのだが、この挿話には、求婚してきたのはスルタン本人だった、という異説があったことにカーンは注目している。その場合には、状況は『クリジェス』の設定といっそう適合するからである。⁴⁹

この交渉の際、スルタン以下、彼の臣民全体がキリスト教に改宗してもよい、という提案があったことが伝えられている⁵⁰が、一説によれば、既にスルタン自身はキリスト教を信仰していた。という同時代の風聞もあったようだ。⁵¹

さらに、マヌエル帝とセルジューク朝スルタンとの対立の構図が『クリジェス』の筋立てとよく似た展開を示している3番目のポイントとして、カーンは、1176年の有名なミュリオケファロンの敗戦後の皇帝の精神的落ち込みと心身の衰弱ぶりを伝える記述を指摘している。そこに見られる皇帝の描写は、カーンによれば、物語の末尾近くで、甥と妻の背信と逃亡を知り、悲憤慷慨のあまり命を縮めてしまう皇帝アリスの有様と酷似しているというのである。

以上の考察を踏まえて、カーンは、『クリジェス』の成立をミュリオケファロンの会戦以後、すなわち1176年9月以降、おそらく同年中、と想定している。カーンが考えるところによれば、この作品は、史実に素材を得る一方で、それを騎士道文学のコードに従って脚色することで成立しているのである。

最後に参照されるのは、1972年に公表されたイヴァンカの説である。⁵²

まず彼女は、カーンの説を踏襲して、主人公クリジェスの名前がルーム・セルジュ

⁴⁸ これ以外にも、スルタンの母親は、ロシア君侯とドイツ人女性の間生まれた娘だった、という噂もあったらしい。I. Seidel, *Byzanz im Spiegel der literarischen Entwicklung Frankreichs im 12. Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 1977, S. 154, Anm. 10. カール・ヨルダン (瀬原義生訳) 『ザクセン大公ハインリヒ獅子公—中世北ドイツの覇者—』ミネルヴァ書房、2004年、209頁にも、スルタンは「高貴なドイツ婦人を母親にしていた」という記述がある。

⁴⁹ H. et R. Kahne, "L'énigme du nom de Cligès", p. 118.

⁵⁰ さしあたり、拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年、261頁を参照のこと。

⁵¹ H. et R. Kahne, "L'énigme du nom de Cligès", p. 121, n. 1.

⁵² E. v. Ivanka, "Fragen eines Byzantinisten an Germanisten und Romanisten (Wolf Dietrich und Cligès)", *Germanisch-Romanische Monatsschrift*, N. S. 22, 1972, S. 433-435.

ーク朝スルタン、キリジ・アルスラン2世に由来することを確認する。しかし、彼女が物語の真のモデルとして想定しているのはスルタンではなかった。彼女によれば、それは、ハンガリーの王子で皇帝マヌエル1世の娘マリアの婚約者ベーラ・アレクシオス（後のハンガリー王ベーラ3世）だったのである。イヴァンカは、1162-1172年頃のビザンツとその周辺地域の政治情勢を考察し、そこから以下のように自説を展開している。

1164年、ハンガリーの王位争いに介入したマヌエル1世は、同国王イシュトバーン3世と和平協定を締結、その結果、同王の王位保持が認められた一方で、彼の後継者には彼の弟ベーラが就くことが取り決められた。同時にマヌエルは、ベーラをコンスタンティノープルに呼び寄せ、アレクシオスと改名させた上で、自分の一人娘のマリアと婚約させている。これと併せて彼にはデスポテースの称号が与えられ、帝位の後継者として宣言された。⁵³

ところが1168年、マヌエル帝に待望の男子（後のアレクシオス2世）が生まれる。母親は同帝が最初の妻であるドイツ出身のベルタと死別した後、1162年に再婚していたアンティオキア公家出身の皇后マリアである。この結果、ベーラ・アレクシオスはビザンツの帝位に就く可能性は閉ざされることになった。彼は皇女マリアとの婚約も解消させられ、ハンガリーに帰国することになる。以上の経緯は、在位中のビザンツ皇帝の結婚により、それまでの帝位継承予定者の権利が侵害されている、という点において『クリジェス』の筋立てと一致している、というのがイヴァンカの言い分である。

こうした一連の出来事は、1172年、聖地巡礼からの帰途、小アジアを横断中のザクセン大公ハインリヒがヘラクレイアでスルタン、キリジ・アルスラン2世と会談したおりに後者からザクセン大公に伝えられたとイヴァンカは想定する。彼女の推察するところによれば、ハインリヒ獅子公は帰国直後の117年にシャンパーニュ宮廷を訪ねてトロワの町に滞在した際に、旅の土産話としてこうしたビザンツの国内事情を伯妃マリーに語った可能性が高い。かくして情報源となったスルタンの名が主人公のそれに刻印を残す一方で、ハンガリー出身のベーラ・アレクシオスの帝位継承権剥奪をめぐる一連の事件が物語の骨組みを定める上で大きな役割を果たしたのである。そうし

⁵³ F. Dölger und P. Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches*, vol. 2. 2. Aufl. München, 1995, Nr. 1458; Niketas Choniates, *Historia*, ed. J.-L. van Dieten, Berlin, 1975, p. 137. これによってマヌエル帝は、ビザンツとハンガリーの同君連合、もしくはビザンツによるハンガリーの吸収合併を目論んでいたと言われている。cf. Gy. Moravcsik, *Byzantium and the Magyars*, Amsterdam, 1970, p. 89f; D. Obolensky, *The Byzantine Commonwealth. Eastern Europe, 500-1453*, London, 1974 (rep. New Heaven 1982), p. 214f; F. Makk, *The Arpáds and the Comneni: Political Relations between Hungary and Byzantium in the 12th Century*, Budapest, 1989, pp. 86-88, 96-98.

た理解に立てば、『クリジェス』の成立は 1172/1173 年以降、というのがイヴァンカの下した結論である。

ここまで見てきたように、『クリジェス』の筋立てと主要な登場人物のモデルを史実の中に探し出そうとするこれまでの試みは、実際のところ研究者ごとにまったくバラバラの結論に立ち至っていることがわかる。改めて主人公のクリジェスと彼の叔父で敵役のアリス、それに主人公の父親アレクサンドルに限定して先行研究が挙げているモデルを、各研究者が想定するこの作品の成立年代と併せて図示すれば以下のようなになる。

研究者名	クリジェス	アリス	アレクサンドル	成立年代
セツテガスト	ヨハネス・コムネノス	アレクシオス 1 世	イサキオス・コムネノス(左記皇帝の兄)	?
セツテガスト (第2案)	ミカエル 4 世	ロマノス 3 世	言及なし	?
フリーエ	該当者なし	マヌエル 1 世	イサキオス・コムネノス(左記皇帝の兄)	1176
ミスライ	言及なし	マヌエル 1 世	イサキオス・コムネノス(左記皇帝の兄)	1146
カーン	キリジ・アルスラン 2 世	マヌエル 1 世	言及なし	1176 末
イヴァンカ	内実はベラ・アレクシオス	マヌエル 1 世	言及なし	1172/1173

表を一瞥すれば分かるように、アリスのモデルとして作品と同時代のビザンツ皇帝マヌエル 1 世を推す声が高いが、それ以外の点については目立った一致点はほとんどない。主人公がルーム・セルジュク朝のスルタンの名に由来するという説は、セツテガストの推すグリュカス説を除けば他に見るべき解釈が見当たらない、という限りにおいて真摯に受け止めるべきかもしれない。ただし、そうかと言って、カーンのよ

うにそこから一足跳びにスルタンと物語の主人公を直結させるのはやはりいささかの躊躇を覚えてしまう。

結局のところ、複数の時代が物語のモデルとして多くの研究者たちに提示され、そのいずれもが物語の設定と完全に一致してはいない、という点を鑑みるならば、いずれの説も仮説の域を出ていない、というドナルド・M・マドックスの結論に行き着くことになるだろう。⁵⁴

そこで、ここでは物語のモデル探しの試みをいったん中断して、これまでの議論から明らかになってきたビザンツ情報の西欧への伝達過程について考察してみたい。というのも、『クリジェス』が成立した12世紀後半のシャンパーニュ伯宮廷には様々な回路から、思いのほか豊かなビザンツ・東方情報が集まっていたことが分かってきたからである。

IV 情報の結節点としてのシャンパーニュ宮廷

クレチアン・ド・トロワの庇護者マリー・ド・シャンパーニュの夫、シャンパーニュ伯アンリ1世（「寛大伯」le Libéral という異名をもっていた）は、フランス王家はもちろん、イングランドからドイツ帝国、そしてローマ教皇庁やビザンツ帝国に及ぶ広大な世界から様々な関係筋を介して情報を得ることのできた、という点でこの時代では極めて特異な才能の持ち主だった。⁵⁵

まず、彼は三重の婚姻関係でカペー朝のフランス王家と結ばれていた。すなわち、彼自身が1153年にフランス王ルイ7世とアリエノール・ダキテーヌの娘であるマリーと婚約、彼女と1164年に正式に結婚したことに加え、同じときに彼の弟のプロワ伯ティボー5世がマリーの妹アリックスと結婚、さらにそれ以前の1160年には伯の姉妹アリックスがルイ7世の3度目の結婚相手として嫁いでいるのである。この結果、伯はフランス王ルイ7世の義理の兄弟かつ娘婿かつ王女の義兄、というややこしい立場になった。次のフランス王フィリップ2世オーギュストは彼の甥にあたる。さらにルイ7世王の弟ロベール・ド・ドリュールとも彼は懇意の仲にあり、共に第2回十字軍に参加したことに加え、パレスティナから帰国した1149年春には早速、共同でトーナメント競技を開催して聖ベルナルドゥスを嘆かせたという。

イングランド王家との所縁も深い。彼の祖父、プロワ伯エチエンヌは、ウィリアム

⁵⁴ D. M. Maddox, "Critical Trends and Recent Work on the *Cligès* of Chrétien de Troyes", *Neuphilologische Mitteilungen*, 74, 1973, pp. 730-745, esp. 740f.

⁵⁵ 以下の記述は、特に事実関係のそれに関して、特別な注記がない限り、基本的に A. Fourier, "Encore la chronologie des œuvres de Chrétien de Troyes", pp. 69-88; Id., *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I., pp. 160-178 の記述に負っている。

征服王の娘と結婚していたから、彼は征服王の曾孫にあたる。同時代の英王ヘンリー2世は母マチルダを介してやはり征服王の曾孫だったから、アンリ伯とヘンリー2世は又従兄弟の関係にあった。

イングランド関係の人脈はこれに尽きるものではない。彼の父方の叔父には、マチルダ、ヘンリー母子と激しく王位を争ったスティーヴン・オブ・ブロワやイングランドのグラストンベリ修道院長とウィンチェスター司教を歴任したヘンリー（アンリ）がいた。⁵⁶

グラストンベリと言えば12世紀末に「アーサー王の遺骨」が敷地内から「発見」されたアーサー伝説所縁の地、そしてウィンチェスターは『クリジエス』が語るように同王の宮廷所在地だったことが思い出される。アーサー王説話がシャンパーニュ宮廷に伝来した重要なファクターとして、イングランド政界で重きを成したこの叔父の存在を想定するのは不当ではないだろう。

これに加え、伯妃マリーの母親アリエノール・ダキテーヌは当時、英王ヘンリー2世と再婚していたから、このカップルから生まれた子供たち（リチャード獅子心王、ジョン欠地王、ザクセン公妃マチルダなど）は、伯妃の異父兄弟であった。

他方、シャンパーニュ伯はドイツ皇帝家とも複数の接触回路を有していた。

まず、彼はフリードリヒ・バルバロッサの妃ベアトリクスとは遠縁ながら縁戚関係にあった。⁵⁷ また、伯の母親マチルダの家系であるケルンテン公家はバルバロッサと密接な関係を持ったドイツ君侯の家柄である。⁵⁸

彼はシャンパーニュ地方の小さな封土をバルバロッサから授封され、この封土に関して自発的にドイツ皇帝に封臣としての宣誓を行っていた。このことで彼は名目的に帝国諸侯としての地位を享受することができたのである。

彼はドイツ皇帝との間に培ったこうした密接な関係を利用して、独仏両王家間の仲介者として尽力することになった。彼は1163年と68年にバルバロッサに書簡を送り、1171年に実現した独仏両王の会見の場にも同席している。1178年9月、ブザンソンで開催された帝国集会にも彼の姿があった。他方、バルバロッサの強力なライヴァル、ザクセン大公ハインリヒとも、伯の妃マリーの異父妹マチルダが1168年に嫁いでいたこともあり、友好的な関係が保たれていた。

これに対して、ローマ教会関係の人脈に関しては、伯がバルバロッサ寄りであったこともあり、ときの教皇アレクサンドル3世とはさほど親密な関係は結ばれてはいな

⁵⁶ cf. 青山吉信『グラストンベリ修道院—歴史と伝説—』山川出版社、1992年、55-56頁。

⁵⁷ 伯の大叔父、シャンパーニュ伯ユーグ1世の妻エリザベス（ブルゴーニュとマコンの伯エチエンヌ1世の娘）は、皇后ベアトリクスの叔母（皇后の父、ブルゴーニュ伯ルノー3世の姉妹）だった。

⁵⁸ 同公家は、バルバロッサが擁立した対立教皇ヴィクトル4世とも縁戚関係にあった。

かったようだ。しかし、その一方で、フランス国内では、伯は多くの有力な高位聖職者と親交を深めていたことが確認できる。まずランス大司教かつ教皇特使のギョームは伯の実の弟だったし、ランス大司教アンリは国王ルイ7世の弟だから伯にとっては義兄弟ということになる。さらにボーヴェー司教フィリップは、前述したように、伯の友人、王弟ロベール・ド・ドリュエの息子であった。

こうした西欧一円に張り巡らせたネットワークと並んで、シャンパーニュ伯は、当時、ビザンツの帝位を占めたコムネノス朝の歴代皇帝と、3世代にわたって密接な関係を結んでいたことは特にここで注目に値するだろう。⁵⁹

寛大伯の祖父、プロワ伯エチエンヌは第1回十字軍に参加してコンスタンティノーブルに滞在した折、皇帝アレクシオス1世の歓待にいたく感激し、すっかりビザンツの魅力の虜になってしまったらしい。彼は行動を共にしていたノルマンディー公やフランドル伯らと共にアレクシオス1世に対して封建的な臣従礼をとり、皇帝が彼らを自らの「養子」に迎える儀式が執り行われた。さらにアレクシオス帝はエチエンヌ伯に対して、後者の息子をコンスタンティノーブルの宮廷に送るよう申し入れたという。

60

「ビザンツ趣味」⁶¹は次の世代にも受け継がれたらしく、エチエンヌの息子の前述したウィンチェスター司教ヘンリーのパトロネージの下で作成された詩篇には、明らかにビザンツ美術の影響が認められるという。⁶²

アンリ伯自身、1147年、若き日に第2回十字軍に参加してコンスタンティノーブルを訪れた際に皇帝マヌエル1世自身の手で騎士に叙任されていた。彼とマヌエル帝との関係が一過性のものではなかったことは、1180年にパレスティナからの帰途、小アジアでトルコ人の捕虜になったアンリ伯の身代金を皇帝が支払い、彼の自由を回復してやっていることから確認できる。⁶³

⁵⁹ cf. K.N.Ciggaar, *Western Travellers to Constantinople. The West and Byzantium, 962-1204: Cultural and Political Relations*, Leiden, 1996, pp. 183-188.

⁶⁰ J.A.Brundage, "An Errant Crusader: Stephen of Blois", *Traditio*, 16, 1960, pp.380-395, esp. p.384f; J. Shepard, "'Father' or 'Scorpion'? Style and Substance in Alexios's Diplomacy", in M. Mullett and D. Smythe, *Alexios I Komnenos*, I, Belfast, 1996, pp.68-132, esp. pp.80-82. スティーヴン・ランシマン (和田廣訳) 『十字軍の歴史』河出書房新社、1989年、158頁。アレクシオス帝が第1回十字軍に参加した西欧の王侯と結んだ法的関係全般に関しては、F.L.Ganshof, "Recherche sur le lien juridique qui unissait les chefs de la première Croisade à l'empereur byzantin", dans *Mélanges offert à Paul-Edmond Martin*, Genève, 1961, pp.44-63 を参照 (養子縁組については p.57f)。

⁶¹ シガールは、'gout byzantin' という用語を用いている。K.N.Ciggaar, *Western Travellers to Constantinople*, p.184.

⁶² また彼がウィンチェスター聖堂に寄贈した飾りメダル模様の豪華な絹の掛け布も、シガールの推測するところによれば、ビザンツからの到来物であった。 *ibid.*, pp.155-157.

⁶³ *ibid.*, p.165; F.Chalandon, *Jean II Comnène et Manuel I Comnène*, *Les Comnène*, II, Paris, 1912 (rep. New York 1972) p. 552.

同じ 1180 年初頭には伯の姪にあたるフランス王女アニェスとマヌエル 1 世の嫡男アレクシオス 2 世が結婚している。だが、まもなく若いカップルに悲劇が訪れた。

1182 年春、小アジアで反乱の兵を挙げたアンドロニコス・コムネノス（マヌエル 1 世の従兄弟）は、帝都に進軍、権力奪取に成功する。彼は当初、アレクシオス 2 世の権力を擁護するポーズを見せたが、自分の権力が十分に固められたと見るや、一転して翌 1183 年に当時 14 歳の少年皇帝を殺害し、残されたフランス王女と自ら結婚したのである。⁶⁴

こうしたスキャンダラスな政変劇の情報は時をおかず西欧の宮廷にも達していたらしく、英王ヘンリー 2 世の秘書官ウォルター・マップの著した『宮廷閑話』の中にも言及されている。⁶⁵

ただし、その際にマップは人物同定に関して 2 つのミスを犯している。ひとつはマヌエル帝の息子の名をアレクシオスではなく、マヌエルと誤記していること。ただし、後者がフランス王女と結婚していたことは正確に知っていた。そして 2 番目に、篡奪者アンドロニコスをマヌエルの兄弟だと誤解していたことである。⁶⁶

ウォルター・マップの思い描いた主要人物間の相関図を眺めていると、ここでも『クリジェス』の筋立てとよく似た構図が浮かび上がってくることに気付くだろう。

すなわち、ここでも話題に上っているのは、父からコンスタンティノープルの正統な帝位を受け継ぐことが予定されていた若者が、叔父のために権力の座から排除される物語なのである。しかも、若者と相思相愛のヒロイン（物語同様、西欧の王家出身）は叔父の妃になり、三角関係が構成される。

物語と史実が一致する点がもうひとつある。

物語では主人公たちの秘密の恋が叔父アリスに露見したとき、彼らはアーサー王宮廷に逃亡して王の保護と支援を獲得している。それとまったく同様に、アレクシオス 2 世と称する若者が 1185 年頃、仏王フィリップ 2 世オーギュストの宮廷に現れ、「義理の兄弟」として王の保護を求めたのである。もちろん、本物のアレクシオス 2 世は前述したようにアンドロニコスによって殺害されていたから、ここに現れた若者は偽者である。しかし、この黒っぽい髪の色をした小柄な偽皇帝はギリシア語、ラテン語、フランス語を流暢に操り、一時は宮廷の人気者となるほどで、フランドル伯フィリッ

⁶⁴ 井上浩一「アンドロニコス 1 世とコンスタンティノープル市民闘争」、『人文研究』（大阪市立大学）30 卷 4 号、1978 年、48-99 頁、特に 58-84 頁、同『ビザンツ皇妃列伝—憧れの都に咲いた花—』筑摩書房、1996 年、191-216 頁。Ch. M. Brand, *Byzantium Confronts the West 1180-1204*, Cambridge Mass., 1968, pp. 1-75; O. Jurewicz, *Andronikos I Komnenos*, Amsterdam, 1970, S. 84-96.

⁶⁵ Walter Map, *De nugis curialium*, ed., M. R. James, C. N. L. Brook & R. A. B. Mynors, Oxford, 1983, pp. 174-179; cf. M. Angold, *The Fourth Crusade. Event and Context*, Harlow, 2003, p. 61,

⁶⁶ ことによるとマップは、アンドロニコスを、マヌエルのすでに逝去していた同名の兄（ヨハネス 2 世の次男）と混同していたのかもしれない。

プとの会談もセットされたという。⁶⁷

ここに登場するフランドル伯とは、クレチアン・ド・トロワに『聖杯物語』の執筆を依頼したフランドル伯フィリップ・ダルザスその人に他ならない。このような視点から見れば、クレチアンがフランドル伯の周辺から、フランス王の宮廷に現れた王の親族のビザンツ皇子を称する若者の噂を聞きつけ、『クリジェス』の構想を膨らませたのだと想像することもあながち不当なことではあるまい。ヒロインが物語ではドイツ皇女になっているのも、フランス王家をはばかって設定を一部変更したのだと考えれば説明がつく。

ただし、この仮説は、一般に通説の地位を獲得している A. フーリエの説と比べて、『クリジェス』の成立年代を 10 年近く遅らせることになり、それがネックとなって広い賛同を得ることは難しいかもしれない。しかし、たとえそうだとしても、『クリジェス』の設定と酷似した出来事が 1180 年代前半のコンスタンティノープルで発生しており、北フランスやイングランドの王侯貴族たちが思いのほか身近にそうした情報に接していた、という事実を確認しておくことは今後の議論において極めて重要な意味を持つことになるだろう。

ビザンツ情報の西欧への伝来に関して、もうひとつの話題にもこの機会に触れておこう。それは、クレチアンが『クリジェス』執筆に際して物語の素材を得たことを明言している、ボーヴェーの聖ピエール聖堂附属図書館所蔵の書物の正体をめぐる議論である。

フラピエは、その書物を「恐らくラテン語の年代記か何かであろう」と推測して、そこには 13 世紀の挿話集成物語『マルケ・ド・ローム *Marques de Rome*』に類似した内容の物語が記されていたのだらうと想定している。⁶⁸

これに対して、プレイヤー版クレチアン・ド・トロワの編者フィリップ・ヴァルテルは、そうした書物自体が存在したことにはささか懐疑的な態度を示している。彼が語るところによれば、中世においては、耳で聞いた情報より書物から得られた情報をありがたがる傾向があったため、作家たちは口承上のモチーフから作品の素材を得たと告白するのを嫌って、それを古い書物から得た、と主張するのが常套手段にな

⁶⁷ Ch. M. Brand, *Byzantium Confronts the West*, p. 174 ; K. N. Ciggaar, *Western Travellers to Constantinople*, p. 167; W. Hecht, *Die byzantinische Aussenpolitik zur Zeit der letzten Komnenenkaiser (1180-1185)*, Neustadt, 1967, S. 70-71.

⁶⁸ 『マルケ・ド・ローム』は、クレチアンの物語同様、クリジェスという名のギリシア皇帝の甥と皇后との禁断の恋をめぐる短い物語である。しかし、テッセラの妙薬の挿話は含まれておらず、また、「偽りの死」を工作する以前に恋人たちの不義が成立しているなど、筋書きの一部に異同が見られるため、フラピエは、時代的に先行する『クリジェス』を種本にして『マルケ』が書かれた、とは考えず、2つの作品に共通する情報源が存在した、と想定しているのである。cf. ジャン・フラピエ (松村剛訳) 『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』 141-142 頁。

っていた、というのである。

『クリジェス』に関して言えば、12世紀後半に流行していた古代風ロマンスの色合いにケルト的物語を加味させたものにすぎず、そこに感じられる色調は同時代のビザンツ文明から得られるそれに近似していたとはいえ、より直接的には、古典作品を翻案した同時代の物語作品から得られたものだった、というのがヴァルテルの見解である。すなわち、彼に言わせれば、クレチアンが作品の中で言及しているボーヴェーの大聖堂附属図書館所蔵の書物というのは、作者が読者を煙に巻くためにでっちあげたフィクションに他ならなかった、ということになる。⁶⁹

たしかにヴァルテルの所説は、中世の作家たちが古典作品をスタンダードなものとして看做して尊重し、それらの翻訳、翻案に熱中していたという事実⁷⁰を踏まえており、それ自体、合理的で説得的な解釈と言えるだろう。また、同時代のコンスタンティノープル宮廷の内情を伝える政治的ゴシップやドイツ皇帝家との間で展開していた外交交渉の噂話ならば、既に述べたように、そうした情報は東方との間を往来していた十字軍関係者や巡礼を通じて西欧の王侯の宮廷に届いていたはずだから、ことさらに情報源としての書物が必要だったわけでもないはずである。

だがこうした所説にはセッテガストの議論が対立している。彼によれば、『クリジェス』の中には本筋以外にも様々なビザンツ情報がちりばめられており、それらは、クリジェスの父アレクサンドルが率いた僚友たちのように11世紀の歴史上の人物がモデルとして想定される事例や、ヒロイン、フェニスの「偽りの死」以降の挿話のように第2イコクラスム期（9世紀）の逸話が下敷きになっているケースが認められるというのである。⁷¹

もしもセッテガストのこうした議論が肯定的に受け入れられるとすれば、我々は、

⁶⁹ Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, p.1116f.

⁷⁰ 神沢栄三「物語の発生と展開」、福井芳男他編『フランス文学講座1—小説1』、15—19頁。

⁷¹ アレクサンドルの12人の僚友たちのうち、Cornix と Torin le Fort はいずれも、1047年の大反乱の首謀者レオン・トルニキオス、Nebunal de Micones と Charquedon devers Aufrique はいずれも11世紀半ばにシチリアでビザンツ軍と戦ったムスリムの将軍の名（前者はメッシナの守備長官 Abulaphar、後者は北アフリカの軍勢を率いていたカルケドニオス〔本名 Omar〕）、Acoridomés d' Athens は1059年にシラクサでビザンツ軍と戦って戦死した背教者アルカディウス、Acorde l' Estout は総主教コンスタンティノス・レイクデス、Ferolin de Salonique はアレクシオス1世の義兄ニケフォロス・メリッセノス、に同定されている。cf. F. Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S. 404-408. ただし、こうした解釈には異論もある。ヴァルテルによれば、これらのギリシア風の名前の大半は実際にはギリシアに由来するものではなく、先行する文学作品から着想を得たものであった。たとえば、Cornix はワースの『ブリュ物語』に登場するトロイア人 Corineus を想起させるし、Nebunal de Micones はアーサー王物語に言及される Nabon (ないし Mabon) と考えられる。Charquedon devers Aufrique は、calcé- done 「紅玉髓」の意味だという。またセッテガストが論及していない Pinabel は『ローランの歌』の登場人物（ガヌロンの親族）、Neruys は叙事詩に頻出する Hervis という名の頭文字を置き換えた形、といった具合である。cf. Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 1039. なお、第2聖像論争期の逸話については後述。

こうした相対的に古い時代のビザンツの情報を伝える書物の存在を想定しなければならなくなるのである。

この点に関してセツテガストが用意している解答は、12世紀後半のビザンツの文人ミカエル・グリュカスが著した年代記がラテン語に訳され、それをクレチアンが参照した、という推論である。なぜグリュカスかと言えば、前述したように「甘美な」「愛らしい」を意味する *γλυκύς* という形容詞に由来する彼の姓から「クリジェス」という主人公の名前が作られた、とセツテガストは考えているからだ。⁷² しかし、彼は、どのようにしてグリュカスの年代記が西欧に伝えられ、多くの人々が利用できるようにラテン語に翻訳されたのか、という肝心な点についてはまったく説明をしておらず、この点において彼の仮説は極めて不十分なままにとどまっている、と言わざるを得ない。

こうした問題点に関して、ひとつの有効な打開策を示す可能性があるのが K. シガールの展開している議論⁷³であろう。彼は『クリジェス』の中で語られているコンスタンティノーブルの宮殿内での女性たちの蜂起という挿話は、1042年、皇帝ミカエル5世(在位 1041-1042)を失脚させた民衆暴動中の一事件から着想を得ていたと想定し、クレチアンがそれを知ったのは、この事件を報じているプセルロスとゾナラス、2種の年代記のうち、現存する写本の多さから見て大量に流布していたことが推定されるゾナラスの方からだと判断する。⁷⁴

しかし、シガール自身が指摘しているように、ゾナラスのラテン語訳は今日、1冊も現存しておらず、このことが彼の議論の弱みになっていることは否めまい。そこで彼は、自説を補強するために14世紀に成立したゾナラスのアラゴン語訳を引き合いに出し、それがイタリア語かカタラン語、あるいはさらにラテン語からの重訳だったことを指摘して、そうしたラテン語訳が12世紀中に成立していた可能性を示唆しているのである。⁷⁵

12世紀にビザンツの歴史叙述が西欧に伝えられた可能性を強調するためにシガールはもうひとつの傍証を提示している。それは当時のアンティオキア総司教エメリ・ド・リモージュ(在位 1139-1196)がコンスタンティノーブルで皇帝マヌエル1世の

⁷² F. Settegast, "Byzantinisch-Geschichtliches im Cliges und Yvain", S. 415.

⁷³ K. N. Ciggaar, "Encore une fois Chrétien de Troyes et la < matière byzantine > : la révolution des femmes au palais de Constantinople", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 38, 1995. pp. 267-274.

⁷⁴ シガールによれば、今日、72の写本が現存しているという。

⁷⁵ なお、もしも12世紀にビザンツの歴史叙述が西欧に伝来したとしたら、それはセツテガストの主張するミカエル・グリュカスか、それともシガールの語るゾナラスの年代記だったのか、という問題についてはいずれにしても解決するのは困難である。ただ、グリュカスの記述は基本的にゾナラスのそれに依拠していたから、いずれが伝来したにしても内容的には大差がなかったと推察される。

顧問を務めるピサ出身の神学者フゴ・エテリアーノに宛てた書簡である。その書状の中で総司教はフゴに対してギリシア語の神学作品と年代記のラテン語訳を送ってくれるよう依頼しているのである。

アンティオキア公国は、アリエノール・ダキテーヌの叔父レーモン・ド・ボワティエが 1136 年に公国の相続人コンスタンス（先代ボエモン 2 世公の娘）と結婚して以来、フランスとの結び付きを強めていた。その一方でアンティオキア公レーモンは、1145 年にはコンスタンティノープルを訪問してマヌエル帝との親交を深めており、公の没後の 1162 年には彼の娘のマリーがマヌエルの再婚相手として輿入れしている。このようにアンティオキア宮廷は一方でコンスタンティノープル、他方でフランスと密接な関係を結んでいた。総司教エメリ自身、仏王ルイ 7 世や英王ヘンリー 2 世と接触を保っていたことが知られている。⁷⁶

こうした状況の下で、フランス王女とマヌエル 1 世の後継者アレクシオス 2 世との縁談が進められる中、フランス王家がビザンツの情報を得るためにアンティオキア公家の周辺と連絡を取り、ラテン語訳された歴史作品などがフランスにもたらされた可能性があったことは否定できないだろう。

ビザンツの歴史に北フランスの王侯貴族が強い関心を抱いていたことは、クレチアンの同時代人ゴーチエ・ダラスが 7 世紀のビザンツ皇帝ヘラクレイオスのペルシアとの戦いと真の十字架奪還の事業から想を得た『エラクル』といった作品を著していることから推察される。⁷⁷

以上の考察をまとめておこう。

クレチアン・ド・トロワが『クリジエス』を執筆していたと推定される 12 世紀最後の四半期、北フランスの王侯の宮廷にはしきりに行き来する外交使節や巡礼、十字軍参加者などから相当量のビザンツや東方世界に関する情報が寄せられており、またそれらに関する書物の量も日々、増大しつつあったと思われる。今回、言及した事例以外にも多くの縁組がコンスタンティノープルの皇帝家一門とラテン・キリスト教世界の王侯家門の間で交渉され、かなりの数の結婚の約定が結ばれたことが知られている。⁷⁸

⁷⁶ cf. D. Hamilton, *The Latin Church in the Crusader States*, London, 1980, pp. 38-50.

⁷⁷ cf. Gautier d' Arras, *Eracle*, éd., G. R. de Lage, Paris, 1976. ゴーチエはプロワ伯ティボー 5 世（シャンパーニュ伯アンリ 1 世の弟）に仕え、『エラクル』をエノー伯ボードゥワン 5 世とマリー・ド・シャンパーニュに献呈している。

⁷⁸ R. J. Macrides, "Dynastic Marriage and Political Kinship", in J. Shepard and S. Franklin ed., *Byzantine Diplomacy*, Aldershot, 1992, pp. 263-280. 拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999 年、31-33 頁を参照。

12世紀後半、アルプスの北で暮らす王侯貴族たちは、ある日、彼らの親族を名乗るビザンツの皇子が、不当に奪われた権利を取り戻すために支援を求めにやってくる、といった情景を身近に感じられる環境の中に生きていたのである。

V 心象世界の中のビザンツ像

クレチアン・ド・トロワの『クリジェス』を読み進めてゆくと、コンスタンティノーブルの宮廷にまつわる主要な登場人物はおおむね以下の3つの範疇に区分できることに気づくはずである。

第一は、アレクサンドルやクリジェスに代表される「良きギリシア人」というカテゴリーである。彼らは不実で小心者のアリスと対置される存在だった。ここで「良き」という形容辞が付されているのは、あくまでも西欧側の視点から好ましい、共感が持てる、という価値判断が言外の意味として含まれていることに注意しておきたい。

2番目は魔法使い、あるいは妖術師に類する人々である。これには皇妃フェニスの侍女テッセラとクリジェスの従者ジャンが含まれる。彼らはいずれも超自然的な力を行使して主人公を助ける役回りを演じている。

そして最後の3番目のカテゴリーに属するのが、いずれも西欧から花嫁としてコンスタンティノーブルの宮廷に入ったソルダモールとフェニスである。以下においてそれぞれのカテゴリーについてももう少し詳しく検討を加えておくことにしよう。

(1) 「良きギリシア人」あるいは学問と騎士道の西遷

前にも述べたように、十字軍の行軍中のトラブルなどが原因で、不実なビザンツ人に対する不満や非難の声が増しに高まりつつあったこの時期に、西欧でビザンツの皇子を主人公にした物語が著され、しかも主人公やその父親が全体として極めて好感の持てる人物として描き出されていることには多少の当惑を覚えないわけにはいかない。しかしそうした疑念は、テキストの冒頭に付された序文と、クリジェスの父アレクサンドルがとった行動を考え合わせれば難なく氷解するように思われる。序文において作者クレチアンは、次のように語っている。

「我らが有する書物によりて、我らは古代の人々の事々や^{シエ}過^{シエ}の時代を知ることになる。我ら が書物の告げるところによれば、最初にギリシアにおいて騎士道 (chevalerie) と学芸 (clergie) が名声を博していた。次いで騎士道はローマへ移り、学芸全般は今やフランスに到来している。それがこの地に留まるよう神が望まれますよう、この地に居を定めた栄光がもはや2度とフランスを離れることがないほどにそれを神が嘉してくださいますように！」(vv. 27-39)

ここでクレチアンが言わんとしていることは、かつてギリシアは騎士道と学芸の中心として栄華を誇ったが、今やその中心の座はフランスへと移行していた、ということである。⁷⁹ 言い換えれば、ギリシアは過去の栄光を伝える地として一定の敬意は払われるものの、今や主役の座はフランスに譲っており、今では騎士道と学芸の中心地としてのフランスの地位は同時代のギリシアを凌いでいた、ということになる。おそらく「12世紀ルネサンス」と総称されるこの時代の西欧における学術活動の興隆、活性化がこうした自信にあふれた言動を生み出したのであろう。

そして、こうした理念に誠に素直に従おうとしているのが、クリジェスの父のアレクサンドルなのである。彼はコンスタンティノーブルの皇帝の嫡男として何の支障もなく将来の帝位が約束されていたにもかかわらず、都を去って、アーサー王の宮廷で騎士としての修行を積むために旅立ってゆくのである。ウィンチェスターの王の宮廷に到着したとき、彼は王の前で跪き、次のような口上を述べた。

「陛下、あなた様の獲得された名声のゆえに、私はあなたに仕え、あなたに敬意を表すべくこの宮廷にまかりこしたのです。そして、私の奉仕に満足していただけるならば、決して余人の手によってではなく、あなた様自身の手で騎士としての武具をつけていただけるときまで、私がここに留まることをお許しください。と申しますのも、あなた様から騎士に叙任されたのでなければ、決して私は〔真の〕騎士と呼ばれることはないからです。」(vv. 345-343)

こうした発言から、アレクサンドルは何のためらいもなく西欧の優位性を認め、心から西欧の騎士社会への同化を望む人物として描き出されていることが分かるだろう。

こうした西欧礼賛の観点に立てば、一見、不可解に見えるクリジェスの行動も明確な解釈が得られることをドナルド・L・マドックスが明らかにしている。⁸⁰

たとえば、ここで問題となるのは、フェニスへの思いを残したまま、彼が父の遺訓を守ってイングランドへの武者修行に旅立つ、といった場面である。彼の不在中、誓

⁷⁹ クレチアンの記述を字義通りに解釈すれば、フランスに移行したのは「学芸」だけであり、「騎士道」は含まれていなかったようにも受け取れる。また、この後でアレクサンドルが武者修行に赴く先もイングランドのアーサー王宮廷だから厳密に言えばフランスではない、と言えるかもしれない。しかし、以下に述べるように、こうしたアレクサンドルの行動自体、騎士道の本場が西欧に移行したことを前提にしていること、また、当時のアングロ・ノルマン国家の実態を鑑みれば、物語中のアーサー王にフランス騎士道の担い手を見出しても差し支えないように思われること、などから、通説に従って、この箇所は上記のように解釈しておきたい。なお、この部分を字義通り解釈するよう主張する研究としては、M. A. Freeman, "Chrétien's *Cligès*: A Close Reading of the Prologue", *The Romanic Review*, 67, 1976, pp. 89-101 がある。

⁸⁰ D. M. Maddox, "Kinship Alliances in the *Cligès* of Chrétien de Troyes", *L' esprit createur*, 12, 1972, pp. 3-12

約に反して結婚した叔父アリスの権力はその間にさらに盤石なものになることは容易に予想されるから、彼の行動は運命に正面から立ち向かおうとしない、ひ弱な青年の現実逃避のような印象を受けがちである。そもそも叔父が誓約を反故にして結婚を決意したときにも、彼は異論を唱えることすらなく、あまつさえ花嫁を迎えるためのドイツへの長途の旅にも叔父に従って随行している始末である。

マドックスによれば、叔父の違約に対する主人公の優柔不断な態度は、彼がまだその時点では十分な責任を伴って行動しうる成人としての資格を獲得していなかったからであったという。彼が一人前の騎士として真の人格が完成されるためには、母方の親族の集うアーサー王宮廷でのイニシエーションを経て、後者から親族の一員として正式な承認を得る必要があった。オックスフォードでの馬上槍試合、その最後における叔父ガウェインとの一騎打ち、さらにはアーサー王宮廷での盛大な饗宴などを経てクリジェスは、母の親族たちの祝福と承認を獲得する。ここにおいて初めて、彼は、叔父アリスに対抗し、フェニスに求婚できるだけの資格を手にすることができたのである。

G. デュビーも指摘しているように、西欧ではこの当時、貴族の家系では一般に母の方が格上であることが多かったこともあり、男子は母の叔父の宮廷に伺候して行儀見習いを始め、騎士となるための修行を積む慣行があった。⁸¹ クリジェスの行動は、まさにこうした同時代の西欧の規範に服したものであり、そこには当然、母親の里の宮廷を父方のそれよりも上位に置く、という価値判断が前提にあったことは論を俟たない。そのように見れば、本来求められるべき騎士としての修練も積まず、生まれ故郷に留まったままで権力の座に居座ったアリスの姿は、極めて不当かつ不適切なものと解釈されるのである。⁸²

さて、ここで、再び話題をイングランドにおけるアレクサンドルの武者修行の時代に戻したい。

アーサー王の宮廷に到着した彼は、その見事な騎士ぶりで人々の感嘆を得るのだが、人々を驚かせたのは彼の武勇ばかりではなかった。彼はアーサー王と王妃、そして宮廷の諸侯一同の友情と敬意を獲得するために、父の皇帝から贈られた船2隻に満載された夥しい量の金銀やギリシアから連れてきた名馬を惜しげもなく人々に分け与えたのである。息子の出立に際して、父の老アレクサンドル帝はこう語った。

「 気前よさは全ての美德を照らす女主人かつ女王なのだ。… 気前よささえあれば賢者になるには充分だが、生まれや礼儀正しさ、知識、高潔さ、財産、力、騎士身

⁸¹ cf. ジョルジュ・デュビー (篠田勝英訳) 『中世の結婚—騎士・女性・司祭—』、新評論、1984年、359—360頁。

⁸² cf. D. M. Maddox, “Kinship Alliances in the *Cligès*”, p. 7.

分、武勲、権勢、美貌、その他のいかなるものをもってしてもそれは不可能だ。」
(vv. 193-209)

西欧人が大好きで、騎士道かぶれで、やたらに気前のよい金満家のビザンツ人。なにやらどこかで聞いたような話ではないか。そう、それは時のビザンツ皇帝マヌエル1世コムネノスについて一般に伝えられているイメージそのものである。

彼がビザンツに西欧騎士の戦術を導入することに熱心で、彼自身、そうした新しい技術の習得に励んでいたことはよく知られた事実である。1159年、アンティオキア城外で開催されたトーナメントにおける彼の活躍ぶり⁸³は、物語の中のオックスフォードの馬上槍試合におけるクリジェスの晴れ姿を髣髴とさせるものである。また、彼が、コンスタンティノープルを訪問した外国の王侯に気前よく大量の金品を分かち与えたことについては、それこそ枚挙にいとまがないほど多くの報告が寄せられている。

ただし、マヌエルには物語のアレクサンドルと決定的に異なる点がひとつあったことを見落としてはならない。それは、彼が物語のアリス同様、基本的に国内に腰を据え、帝都コンスタンティノープルから彼の帝国を支配する姿勢を一貫して示していたことである。

コンスタンティノープルが世界の中心であることを自明の事実と考えていたビザンツの支配的エリートにとっては、世界の果てにも等しいアルプスの彼方の西欧の地に修行の旅に出ることなど、想像を絶する狂気の沙汰に思われたに違いない。⁸⁴知られている限りでは、皇帝に即位する以前にマヌエルが帝都周辺から離れたのは、1143年に父ヨハネス2世最後の東方遠征に同行した1度きりだったように思われる。

むしろ、はるかな旅路もものともせず、海山を越えてやってきたのは西欧の騎士たちの方であった。聖地の十字軍国家の歴史を著したティルス大司教ギョームが語ると

⁸³ さしあたり、拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年、33-34頁、および L. Jones and H. Maguire, "A Description of the Jousts of Manuel I Komnenos", *Byzantine and Modern Greek Studies*, 26, 2002, pp. 104-148 を参照。

⁸⁴ 12世紀末のイングランドの歴史家ロジャー・オヴ・ホヴデンは、1185年の皇帝アンドロニコス1世の失脚とイサキオス2世の登位に至る政変劇を報じた際、反乱に立ち上がる前、イサキオスはパリで学生生活を送り、ラテン語と礼儀作法を学んでいた、と報じている。cf. Roger of Hoveden, *Chronica*, ed., W. Stubbes, 2 vols, London, 1868-1871 (rep. Wiesbaden, 1964), vol. II, pp. 204-208. シガールはこの挿話の信憑性について肯定的な態度を示しており、当時、フランス王家とコムネノス一門は縁戚関係にあったから、彼がパリに旅行するのはずっと容易になっていたこと、宮廷内のコネクションを得ようと望む貴族の若者にとって広く旅して回り、今やこれまでにない関係が緊密になった西欧に関する知識を深めようとするのは有益なことだった、と語っているが、当時のビザンツの支配層にはたしてそうした発想があったかどうかはかなり疑問のように感じられる。cf. K. N. Ciggar., *Western Travellers to Constantinople*, p. 166f. なお、イサキオス・アングロス（後の2世）に関して付言しておけば、彼は、帝都でアンドロニコス1世に対する蜂起を主導する以前には、小アジア西部の都市で彼の一族と共に同帝に対する反乱行動に参加していたことが確認できるのである。井上浩一「アンドロニコス1世とビザンツ貴族」、『史林』62巻4号、1979年、131-148頁、特に145-146頁を参照。

ころによれば、皇帝が西欧人（ギョームはここで「ラテン人」という呼称を用いている）を高く評価し、惜しみなく気前のよさを示したので「ラテンの種族の民は、世界中から高貴な者も、そうでない者も、彼を大いなる恩恵提供者と看做して、競うように彼の宮廷に集まった」という。⁸⁵ アーサー王の手によるアレクサンドルの騎士叙任の光景を裏返してみれば、それがマヌエル帝によって騎士に叙任された将来のシャンパーニュ伯アンリ1世の若かりし日の姿と重なり合うことに気付くだろう。

中世の文学作品の中でアーサー王の宮廷を描写する際には、巡礼などによって伝えられたコンスタンティノーブルの華やかな宮廷生活がその祖形のひとつを成したことがしばしば指摘されている。⁸⁶ そのように見てゆくと、我々の目の前には非常にパラドキシカルな光景が広がってゆくことになるだろう。

クレチアンは『クリジエス』において、ビザンツ帝都の華やかで豪華な雰囲気に含まれた宮廷を連想させるアーサー王宮廷を描写しながら、そこへ喜々として伺候するビザンツの皇子の姿を描き出すことで、ビザンツに対する西欧の優越性を強調する。ところがそれは明らかにマヌエル1世の宮廷に参集している西欧の騎士たちの陰面なのである。このような形でビザンツに対する自己の優位性を主張しなければならなかった当時の西欧の支配的エリートの姿は、本人が大真面目だけにいっそう滑稽に見えてしまう、といったら言い過ぎであろうか。

(2) 仙女と魔法使い

以下で論じるのは、超自然的な能力を駆使して主人の危機を救う2人の従属的な身分の男女である。そのうちの一人はフェニスの侍女テッセラ⁸⁷、もう一人は天才的な建築家で、宮廷を脱出した恋人たちに秘密の隠れ家を提供するクリジエスの従者のジャンである。本節では、この2人の個性的な人物の周辺を探求しつつ、これに関連するビザンツ側の情報を渉猟する作業に取り組みたい。

まず侍女テッセラから始めよう。

クレチアンの作品には、たとえば『獅子の騎士』においてヒロインのローディーヌを助けるリュネットのように、ヒロインを支える賢明な侍女がしばしば登場する。⁸⁸ その意味で、一見したところではテッセラは類型化された登場人物であり、西欧人が

⁸⁵ William of Tyre, *Historia rerum in partibus transmarinis gestarum*, ed., R. B. C. Huygens, Thurnhout, 1986, p. 1020.

⁸⁶ リチャード・バーバー（高宮利行訳）『アーサー王—その歴史と伝説—』、東京書籍、1983年、66頁、青山吉信『アーサー伝説—歴史とロマンスの交錯—』岩波書店、1985年、120頁を参照。

⁸⁷ あるいは彼女には *mestre* という肩書きが付されており、Ph. ヴァルテルはそれを *La gouvernante* と訳しているのので、「私教師」と呼ぶほうが妥当かもしれない。

⁸⁸ 菊池淑子『クレチアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』平凡社、1994年、特に32-35頁、38-40頁、44-54頁を参照。

思い描く「ビザンツ人」の典型と看做すことは困難だと考える向きもあるだろう。

だが、作者が彼女のことを「ビザンツ人」ではないにせよ、「ギリシア人」としては十分に意識していたことは彼自身の言葉からすぐに明らかになる。というのも、彼によれば、テッセラという彼女の名前はそもそもテッサリアに由来しており、彼女が魔術 (nigromance) に長じていたのは、古来、悪魔学 (la diablies) が教えられ、実行されていたテッサリアの生まれだったからだというのである (vv. 2984-2990)。

フィリップ・ヴァルテルによれば、nigromance という用語はギリシア語の necromanteia (「秘密を知るため死者の霊を呼ぶこと」=「招霊術」と manicie (「魔術」) という2つの語の合成語であり、他方、テッサリア地方が魔術や妖術の本場だという評判は、オヴィディウス、ホラティウス、ユヴェナリス、ルキアノスなど古代ローマの作家たちに遡り、紀元4世紀のキリスト教徒のラテン詩人プルデンティウスが語るところによれば、テッサリアの地の魔術はその創始者であるメルクリウス神自身によって伝授されたのだと言う。⁸⁹

オヴィディウスには「テッサリアの毒」という慣用表現も認められ、同地の魔術の正体が毒薬を用いた謀り事であったことを窺わせている。次々と驚くべき効能を發揮する霊薬をつくり出すテッセラの原型は、こうした文学的伝統の中に見出すことができるのである。

だが彼女の姿を古びた書物の頁の中に閉じ込めておくだけでは充分ではない。K. シガールに言わせれば「毒薬と媚薬。これこそビザンツに典型的な要素なのだ。」⁹⁰ ここでシガールが話題にしているのは、皇帝ミカエル5世 (在位 1041-1042) が義母の女帝ゾエの排除を目論み、彼女が彼の毒殺を図った、という噂を広めようとしたという逸話である。⁹¹この話を報じている同時代史家のミカエル・プセルロスが「毒をもる女」という意味で φαρμακίδα (主格は φαρμακίς) という語を用いている点は興味を引かれる。というのも、この言葉は「魔法使い」「魔女」という意味にも解釈できる用語だからである。

ゾエによるミカエル5世の毒殺計画に関しては憶測の域を出なかったとしても、彼女には、もっと確度の高い前科があった。彼女は若い愛人のミカエル (後のミカエル4世、在位 1034-1041、前述の同5世は彼の甥) と結婚するために、彼と結託して最

⁸⁹ Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 1153.

⁹⁰ “Les poisons et les philtres, voilà des éléments typiquement byzantins!”, cf. K.N. Ciggear, “Encore une fois Chrétien de Troyes et la < matière byzantine > : la révolution des femmes au palais de Constantinople”, *Cahiers de Civilisation Médiévale*, Xe-XIIIe siècles, 38, 1995, pp. 267-274, p. 270.

⁹¹ Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E. Renauld, 2éd., Paris, 1926-1928 (rep. 1967), 2vols, vol. I, p. 98.

初の夫ロマノス3世アルギュロス（在位 1028-1034）に毒をもって厄介払いに成功した、と伝えられていたのである。⁹²

そうでなくとも、私室に閉じこもり。冬でも夏でも多くの火鉢を並べて、召使たちを動員して香水や軟膏作りに熱中していた、というプセルロスが伝える晩年のゾエ女帝の姿は、見ようによってはかなり怪しげなものに見えたことは想像に難くない。⁹³

このように見てくれば、物語の中で様々な霊薬を調合するテッセラの背後に、古典作品の残影を認めるだけでなく、その100年ほど前にコンスタンティノーブルで暮らした薬と香水のマニアの女帝の面影を感じることもできるかもしれない。

これに関連して想起されるのは、中世ウェールズの伝承を集めた物語集『マビノギオン』に収録された「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」の中に、主人公に魔法の石を与え、彼の冒険を助ける「大クリスティノビル」（＝コンスタンティノーブル）の女帝が登場していることである。⁹⁴魔法と幻想の本場のようなケルト世界の中心でコンスタンティノーブルの女帝が神秘の力を発揮する魔法使いとして姿を現していることは注目に値することであろう。⁹⁵

次にクリジェスの従者ジャンに話題を転じよう。彼の名はギリシア語に改めるとヨハネスとなり、これはビザンツではありふれた、というより最もポピュラーな名前のひとつであった。⁹⁶

渡邊浩司氏は、神話学的研究の一環として、物語のジャンに福音史家の聖ヨハネやローマの双頭神ヤヌスの属性を読み取ろうとしている⁹⁷が、以下では考察の対象をビ

⁹² プセルロスによれば、彼女はロマノス3世を「最初は薬物でいい気分させ、その後でヘレボロスを混入した」という。*ibid.*, vol. I, p. 51. なお、ヘレボロスとは、キンポウゲ科の植物の総称で、根には下剤作用があり、古代には狂気の治療薬として用いられたということである。ちなみに、この記事は、シガールによって『クリジェス』の情報源と推定されているゾナラスの年代記の中にも簡略化された形で記載されている。Ioannes Zonaras, *Epitome Historiarum*, III, ed., Th. Büttner-Wobst, Bonn, 1897, p. 584.

⁹³ Michael Psellos, vol. I, p. 148; cf. J. Duffy, "Reactions of Two Byzantine Intellectuals to the Theory and Practice of Magic: Michael Psellos and Michael Italikos", in H. Maguire ed., *Byzantine Magic*, Washington D. C., 1995, pp. 83-97, esp. p. 88f.

⁹⁴ 中野節子 訳『マビノギオン—中世ウェールズ幻想物語集—』JULIA出版局、2000年、318-319頁、324-328頁。

⁹⁵ コンスタンティノーブルをケルト的異境世界と結び付け、同地の女帝を魔術的能力の持ち主と想定する設定は、他にも幾つかの中世文学の中に認められるようだ。こうした主題については現在、調査の途上にあり、詳しくは別稿を期したい。この問題に関しては、さしあたり、ハワード・ロリン・パッチ（黒瀬保・池上忠弘・小田卓爾・迫和子訳）『異界—中世ヨーロッパの夢と幻想—』三省堂、1983年、260頁、282-287頁を参照のこと。

⁹⁶ A. カジュダンと A. M. タルボットによれば、アトス山の修道院所蔵の10-12世紀の文書に登場する人名を数えてみると「ヨハネス」が断然トップの90例で、2位の「ニコラオス」（42例）の倍以上あった。A. Kazhdan and A. M. Talbot, "John", in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, New York - Oxford, 1991, p. 1042f.

⁹⁷ 渡邊浩司『クレチアン・ド・トロワ研究序説』241-242頁。

ザンツに関連する分野に限定して議論を進めてゆくことにしたい。

最初に先行研究がジャンのモデルとして提示している歴史上の人物を確認しておこう。

多くの研究者は、天才的な建築家としてのジャンの才能に注目し、ヨハネスという名の建築家をビザンツ史上に探し求めた。たとえば、スティエノン⁹⁸は、6世紀にミレトスのイシドロスの同名の甥と共に地震で崩壊した聖ソフィア聖堂大円蓋の修復やユーフラテス河畔の都市ゼノビアの建設に従事したコンスタンティノーブルのヨハネスの名を挙げている。

セッテガストは、物語のジャンに2人の歴史上のヨハネスを重ね合わせている。一人は、皇妃と若い恋人との逢瀬を支援する人物としての11世紀中葉の宮廷の実力者、宦官のヨハネス・オルファノトロポス、もう一人は、9世紀前半、第2次イコノクラスム期に総主教を務めた通称ヨハネス・グラマティコス（総主教としてはヨハネス7世、在位837-843）である。⁹⁹

第一の人物については多言を要すまい。彼は自分の兄弟であるミカエル（後のミカエル4世）と女帝ゾエとの仲をとりもち、彼らがゾエの夫である皇帝ロマノス3世アルギュロス¹⁰⁰を排除するのを手助けした人物である。

興味深いのは第二の人物の方である。¹⁰¹

外交使節としてバグダッドに派遣されたヨハネスは、カリフ宮殿の壮麗さを皇帝テオフィロス（在位829-842）に語り、それに触発された皇帝はカリフに劣らぬ離宮の建設をヨハネスに命じた。かくしてコンスタンティノーブルの対岸のアジア側に建てられたブリヤスの豪華な宮殿は、都の郊外に位置し、地上部分と並んで地下にも居住スペースがあったこと、美しい庭園で囲まれていたことなど、物語の中でジャンが建設した秘密の塔と多くの共通点を有していた、とセッテガストは考えている。¹⁰²

そしてセッテガストがブリヤスの離宮以上に、物語中のジャンの秘密の隠れ家との類似性を強調しているのが、ヨハネスが彼の兄弟アルサベルの所有する帝都郊外の所

⁹⁸ J. Stiennon, "Histoire de l'art et fiction poétique dans un épisode du *Cligès* de Chrétien de Troyes", *Mélanges Rita Lejeune*, t. I, Gembloux, 1969, pp. 695-708, p. 702 ; Id., *Byzantine Architecture*, London, 1979 (rep. 1986), p. 14. 邦訳: シリル・マンゴー(飯田喜四郎訳)『ビザンティン建築』、本の友社、1999年、15頁。

⁹⁹ F. Settegast, "Byzantinisch-Geschichtliches im *Cligès* und *Yvain*", S. 408-415.

¹⁰⁰ ロマノス3世失脚とミカエル4世登極に至る政変劇については、さしあたり、拙稿「ロマノス3世アルギュロスの蹉跌——11世紀前半のビザンツ皇帝権と政治体制——」、『史林』、74巻2号、1991年、106-139頁、特に131-133頁を参照。

¹⁰¹ この人物のプロフィールは、M. W. Herlong, *Kinship and Social Mobility in Byzantium, 717-959*, Ph.D. thesis, The Catholic University of America, 1986, pp. 114-116 を参照。

¹⁰² F. Settegast, "Byzantinisch-Geschichtliches im *Cligès* und *Yvain*", S. 408-409. なお、ブリヤスの離宮については、R. Janin, *Constantinople byzantine : Développement urbain et répertoire topographique*, 2éd., Paris, 1964, p. 146f を参照。

領に有していた秘密の工房の記事である。スキュリツェスによれば、ヨハネスは兄弟の豪華な邸宅や柱廊、浴場など様々なレクリエーション施設が並ぶ一角に、ある種の地下屋敷を建設し、その裏側に設けた秘密の扉から出入りして、そこに修道女やその他の美女たちを集め、陶器や内臓による占いや魔法、交霊術などの怪しげな行為に耽っていたという。¹⁰³ こうした記述には、熱心な反聖像論者だった総主教を貶めようとする後代の年代記作家の悪意を考慮に入れるべきであろうが、そうした予見を持たずにこの文章を読むと、そこに漂うおどろおどろしい雰囲気にとじろいでしまうほどである。

セツテガストは、物語のジャンとヨハネス・グラマティコス秘密作業場の類似点として以下の4つのポイントを挙げている。

第一に、いずれの建物も、コンスタンティノーブルの郊外だが、都のすぐ近くに位置していたこと。¹⁰⁴ 第二に、これらの建物には秘密を守るため、特別な工夫が凝らされていたこと。第三に、いずれの事例でも、そこでの生活の快適さを保障する一切の設備、とりわけ浴場施設が完備していたこと。そして四番目は、いずれの建物も、美しい女性を密かに住ませるのに相応しいものだったこと。

セツテガストによれば、農奴身分のジャンが、生活環境の快適さに関して妥協する気のない貴婦人にも満足できるような豪華な宮殿を独力で建設することがどうしてできたのか、物語自体のコンテキストの中で説明することは不可能であり、クレチアン、ないしは彼の情報源となった作家が、こうした挿話を充分、頭の中で消化しないままに再話したため、こうした矛盾を孕んだ筋立てになったのだという。¹⁰⁵

さらに彼は、自説を補強するために、第2イコノクラスム期の状況が物語に反映された事例として、死を偽装した皇后フェニスに加えられた鞭打ちや煮えたぎる鉛の掌への注入といった一連の拷問が、ラザロスという名のイコン画家修道士に加えられた仕打ちに類似していたこと、¹⁰⁶ また、アモリオンをアラブ軍に占領されたという報に接したテオフィロス帝が心労のあまり重病に陥り、死に至った、という状況が前述のアリスの死を思わせることを指摘している。

2番目の事例については、カーンがマヌエル1世の死について同じようなことを言っていたことは先にも言及した通りであり、史料を探せば似たような話はさらに出てくることも予想される。

¹⁰³ Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum*, ed., H. Thurn, Berlin, 1973, p. 86.

¹⁰⁴ R. Janin, *Constantinople byzantine*, p. 468f. によれば、ヨハネスの兄弟アルサベルの屋敷地はボスフォラス海峡のヨーロッパ側、今日のオルタキョイ地区にあったようである。

¹⁰⁵ F. Settegast, "Byzantinisch-Geschichtliches im Cliges und Yvain", S. 409-411.

¹⁰⁶ ラザロスの場合は、2度と絵が描けないように掌の内側を熱した鉄棒で刺し貫かれたという。cf. Ioannes Skylitzes, p. 60f.

なお、セッテガストは、優秀な建築家であるだけでなく画家、彫刻家としても才能を発揮している物語のジャンと、強硬な反イコン派だった総主教の間で折り合いをつけることに苦心しているが、A.カトラーによれば、後者はイコン画家としての前歴を有しており、¹⁰⁷ その点でも両者に接点を見出すことは可能であろう。

以上に見てきたように、セッテガストの議論はそれ自体興味深く、十分に検証されるだけの価値を有しているのは間違いない。しかし、筆者自身は、『クリジェス』成立にもっと近い時代にジャンのモデルを探すことはできないものかと考えている。当初、筆者が漠然と感じていたのは、コンスタンティノーブルの宮廷で隠然たる権勢を振るっていた宦官たちのイメージがジャンに投影されているのではないか、という思いである。というのも不自由身分に属して主人に忠節を尽くす一方で、何やら謎めいた雰囲気を持つジャンの姿には、皇帝の腹心として暗躍する数々の有力な宮廷宦官たちのイメージが容易に重なり合うかのように思われたからである。¹⁰⁸

だが、『クリジェス』のテキストを読み返してみると、こうした見解はそのままの形では受け入れ難いことが判明した。というのも、そこには繰り返してジャンに妻子がいたことが述べられていたからである (v. 5489, 5529)。

そこで改めて、宦官ではないものの不自由身分出身で、若い皇帝の強力な支持者であり、さらにヨハネスという名を帯びた人物を、12世紀のビザンツ史上に探してみると、一人の人物が浮上してくる。それは、ヨハネス2世治下、同帝の片腕として事実上の宰相役を務めたメガス・ドメスティコスメガス・ドメスティコスのヨハネス・アクスークである。¹⁰⁹ 彼はトルコ人戦争捕虜の出自であったが、幼少の頃からのヨハネス2世の親友として後者の下で国政を指導し、同帝没後にはマヌエル1世の権力掌握に協力して首都にいたマヌエルの兄イサキオスの身柄拘束に貢献した人物である。¹¹⁰

しかし、生粋の軍人として無骨なイメージが漂うヨハネス・アクスークと、秘密の

¹⁰⁷ A. Cutler, "John VII Gramatikos, in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p. 1052.

¹⁰⁸ ビザンツの宦官に関する最近の研究としては、K. M. Ringrose, *The perfect Servant. Eunuchs and the Social Construction of Gender in Byzantium*, Chicago, 2003; Sh. F. Tougher, "Byzantine Eunuchs: An Overview, with Special Reference to their Creation and Origin", in L. James ed., *Women, Men and Eunuchs. Gender in Byzantium*, London - New York, 1997. 邦語では、和田廣『ビザンツ社会における宦官制度の総合的研究』、平成10～12年度科学研究費(基盤研究C2)研究成果報告書、2002年、がある。

¹⁰⁹ この人物のプロフィールは、Ch. M. Brand, "The Turkish Element in Byzantium, Eleventh-Twelfth Centuries, *Dumbarton Oaks Papers*, 43, 1989, pp. 1-25, esp. pp. 4-6 を参照。

¹¹⁰ もしもこの場合にマヌエルが物語のクリジェスに対応する存在だとすれば、イサキオスはアリスの役回りを与えられることになる。その場合には彼が主人公の叔父ではなく兄であることが気にかかるが、ことによると、同じ時期に帝位に野心を示していたことが報じられている同名のイサキオス(ヨハネス2世の弟、マヌエルの叔父 cf. Ioannes Kinnamos, *Epitome rerum ab Ioanne et Alexio [Manuele] Comnenis gestarum*, Bonn, 1836, p. 53f.) と彼を作者が混同した可能性も捨てきれまい。

塔で怪しげな作業にいそしむジャンとではイメージの落差が大きすぎる、という反論は当然、ありうるであろう。こうした意見に対しては、ヨハネス・アクスークの身边にも、秘密の隠れ家、絵画に囲まれた部屋、妖術の修練、といった物語のモチーフと重なり合う記事が実際に発見できることがひとつの反証になるかもしれない。

ただし、ここで話題に上っているのは、ヨハネスその人ではなく、彼の息子のアレクシオス・アクスークである。史家ヨハネス・キンナモスが伝えるところによれば、彼は密かにセルジューク朝スルタン、キリジ・アルスランと誼を通じて、首都郊外の別邸の壁面をスルタンの軍事的功業を主題とする壁画で飾ったという。¹¹¹ さらに彼は、しきりに魔術に長けた男を招いては、皇帝に後継者が生まれぬよう策謀を巡らし、そうした目的のためにこの魔法使いから多くの薬を受け取った、とも報じられている。¹¹²

しかし、ここまで展開してきた推論はここで大きな障害に突き当たる。マヌエル帝を陥れるためアレクシオス・アクスークが招いた魔法使いの男は、キンナモスによれば、「ラテン系の出自」(ἀνδρᾶ Λατινοῦν γένος) だったというのである。魔法や妖術の使い手はビザンツ人の専売特許ではなかった、ということであろうが、西欧人もビザンツ人も、お互いに胡散臭い要素は相手に押し付けようとする風潮があったことがここからは読み取ることができるだろう。

ちなみに、マヌエル1世治下のビザンツ人の魔法使いに関しては、ニケタス・コニアテスがミカエル・シキディテスなる人物に関して次のような話を伝えている。¹¹³

彼は周りの人々の視界を真っ暗にさせたり、魔物の一団を呼び出してそれらを人にけしかけて見物人を面白がらせたりするなど、悪ふざけに類する魔術を得意としていた。

ある日、彼は仲間たちと共に皇帝宮殿の高見から、海面に陶器を積んだ小舟が通るのを眺めていた。彼が舟の漕ぎ手に術をかけると、後者はたちまち正気を失って立ち上がり、手に持った櫂で船荷の陶器を滅茶苦茶に打ち壊してしまう。正気に戻った後で何が起きたのか尋ねられた水夫は、真っ赤な巨大な蛇が船荷の上にもうずくまり、彼を飲み込もうと凝視しているのに気付いたので必死に櫂で叩いたのだが、陶器が粉々になったときには蛇は姿を消していたのだと返答したという。

またあるときには、浴場で入浴中の客たちがパニック状態になって奥の部屋から駆

¹¹¹ *ibid*, p. 266. キリジ・アルスラン＝クリジェスという先のカーンの説を踏襲すれば、マヌエル1世＝アリス、ジャン＝ヨハネス・アクスークの息子アレクシオス、という図式が描けるかもしれないが、やや苦しい感じも否めない。

¹¹² *ibid*, p. 267f. またしても、マヌエル＝アリスと想定すれば、それは、クリジェスの帝位継承を妨げないために生涯結婚しないことを約束したアリスに約定を守らせようとした行為として解釈することもできるかもしれない。

¹¹³ Niketas Choniates, p. 148f.

け出して来る、という事件が起きた。集まってきた人々に彼らが口々に語るところによれば、浴槽の中から真っ黒な男たちが躍り出てきて彼らの尻を蹴り上げ、彼らを部屋の外に追い出した、というのである。実は彼らは、この出来事の前に浴場を訪れていたシキディテスと口論を起こしており、こうした仕打ちは後者の意趣返しだったようである。

このような悪さを重ねたために、ついにはシキディテスは摘眼刑に処せられたと言われている。

こうしたとりとめのない風説めいた話を長々と紹介したのは理由がある。A. カジュダンによれば、コニアテスの語る妖術使いのシキディテスは、12世紀後半の文人ミカエル・グリュカスと同一人物だった可能性があるという。¹¹⁴ ミカエル・グリュカスとは、セッテガストによれば「クリジェス」の名の由来となり、ゾナラスに依拠した年代記を残している、あのグリュカスのことである。¹¹⁵ これは単なる偶然なのか、それともそこに偶然以上のものを認めるべきであろうか。それに対して断定的な答えを出すことは現時点では極めて困難と言わざるを得ない。

(3) 女たちの支配

西欧側の記述には、ビザンツ人を男らしい活力に欠ける女々しい存在として侮蔑する表現が散見される。男だか女だかわからない宦官が大手を振って歩き回っている宮廷も、廷臣たちの宝石をちりばめた長たらしい絹の装束も、彼らにとっては唾棄すべきものだった。たとえば、時は下るが1196年のクリスマスに、宝石で飾り立てた派手な衣装で登場したアレクシオス3世アングロス帝（在位1195-1203）に対して、ドイツ皇帝ハインリヒ6世の使節が「今や女のような衣装やブローチを脱ぎ、黄金の代わりに鉄を身にまとう時である」と言い放ったというエピソードは広く知られている。

¹¹⁶

ビザンツでは女々しくイジイジした男たちよりも、むしろ女たちの方が活力にあふれ、大きな力を発揮する社会だった、と西欧人が考えていたふしがある。

K. シガールは前述の論文¹¹⁷において、死を装った皇妃フェニスにサレルノの医師たちが拷問まがいの検査を行い、最後に彼女を火炙りにしようとした瞬間、何千という女性が広間に乱入して医師を窓から放り出して墜落死させ、フェニスを救出した、と

¹¹⁴ A. Kazhdan, "Holy and Unholy Miracle Workers", in H. Maguire ed., *Byzantine Magic*, Washington D.C., 1995, pp. 73-82, p. 81, n. 16.

¹¹⁵ cf. F. Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S. 415-416.

¹¹⁶ Niketas Choniates, p. 477.

¹¹⁷ K. N. Ciggaar, "Encore une fois Chrétien de Troyes et la < matière byzantine >", p. 268, 270

いう挿話に注目し、それをミカエル5世による女帝ゾエ追放の報に接した帝都の女たちの憤慨と蜂起の状況を伝えるプセルロスの記述¹¹⁸と対比させている。

シガールは、クレチアンの執筆した時代に至るまで、西欧ではこの種の女たちの革命は確認できないこと、そして、多少の誇張はあるにせよ、数千もの女たちが集結して蜂起できるような都市はコンスタンティノープルの他にありえなかったこと、を根拠に、これら2つの記事を結び付けているのである。

同様に、同じ作者の『獅子の騎士』の中で語られている、「最悪の冒険の城」に囚われて絹織物と金欄刺繍の作業に従事させられている300人の女性たちの姿¹¹⁹が、シガールの言うように、1147年にシチリア王ロジェール2世によってテーベやコリントスから誘拐され、パレルモ王宮付属の作業場で強制的に働かされていた絹織物職人たちの悲惨な状況を反映するものだったとしたら、¹²⁰ 実際には男女の職工が連行されたはずなのに、女たちの存在しか言及しないことで、手工業生産の分野でも女が主導権を握るビザンツ社会の状況を強調しようという作者の作為を感じ取ることができるのかもしれない。

いずれにせよ、『マビノビオン』に登場する魔法使いの女帝に象徴されるように、西欧人にとって、ビザンツ帝国は、彼らの伝統的なオリエント観念に従えば、女性的な力が支配する世界であった。オリエントは、アシュタルテ、イシス、ウェヌス、サロメ、クレオパトラといった一連の女神や女性の系譜に象徴されるように、豊饒、享樂的な物質生活、性的放縦さ、などに特徴付けられた世界であり、そこに理性と武勇に秀でた西方の男性が登場し、美しく性的魅力に溢れた東方の貴婦人を征服して、世界に秩序をもたらす、というのが古代以来、連綿として西欧で書き継がれてきた文学の主題だったのである。

そうした視角から眺めてみると、クレチアンの『クリジェス』は、一見、こうした規範から逸脱している作品のような印象を受ける。ここで話題に上っているのは親子2世代にわたって、いずれも東方人の男（厳密に言えばクリジェスはハーフだが）と西方出身の女という組み合わせなのである。

だが、我々は、こうした組み合わせに作者の周到な仕掛けが施されていてことを看取しなければならない。2組のカップルにおいて、主導権を握っているのは常に女の方であった。

¹¹⁸ Michael Psellos, vol. I, p. 102.

¹¹⁹ cf. 菊池淑子『クレチアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』、123—135頁。

¹²⁰ K. N. Ciggaar, “Chrétien de Troyes et la <matière byzantine> : les demoiselles de Château de Pesme Aventure”, *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 32, 1989. pp. 325-331.

ソルダモールとアレクサンドルは、相思相愛の関係になった後も、長い間、お互いに思いを打ち明けられないままであった。フラピエの表現を借りれば、「彼女には誇りと節度があるし、彼には度胸がなかったのである。」¹²¹ 先に行動を起こしたのはソルダモールの方だった。「渴望する相手は一言も口にしないから、待ちかねた彼女は思いきって恋人と呼んで接近する。」¹²²

フェニスとクリジェスでは力関係はさらに明確となる。アルベール・ポフィレの舌鋒は容赦がない。「クリジェスという人物には、かなり月並みなものしかない。圧倒的な美貌、お飾りの武勇、そして愛においてさえ、言葉遣いのある種のエレガンスと、それなくしては当時の物語の主人公とはなれない、あの忠実さがあるのみ。」そして彼はこう断言する。「要するに、この物語に意味を与えるのはクリジェスではない。」では、物語に重要な意味を与えているのは誰か。ポフィレは答える。「それはフェニスなのだ。彼女が主役を演じていると言っても過言ではあるまい。事実すべては彼女次第であり、クレチアンがこの人物を構想したやり方こそが、この問題全体の鍵なのである。」¹²³

フェニスは意志の人である。二人でアーサー王の宮廷へ駆け落ちしようというクリジェスの提案を彼女はきっぱりと退ける。彼女は真の愛を貫く一方で、決して自己の名誉が傷つかぬ手段を見つけなければならなかった。「フェニスは外からの強制と戦い、自らの人生の主導権を握ろうと考える。愛と意志の自立性の中に、幸福の条件を作り出そうというのである。この点で彼女の行動は、社会的・宗教的な掟の枠外に立てられた宮廷風倫理と結び付いたものだった。」¹²⁴

西欧出身の皇妃の尻に敷かれたビザンツ皇帝という構図は、相次いで西欧世界から妃を迎えたマヌエル1世の夫婦生活を茶化したものと理解できるかもしれない。

だが、こうした筋立てに作者クレチアンが込めたメッセージは、もっと深いものがあったようだ。先に紹介した「学問と騎士道の西遷」という主題を思い出してほしい。かつてそうした美德が栄えたギリシアの地は、今や過去の栄光を失い、それらの中心はフランスへと移っていた。ドイツの研究者 I. ザイデルはこう語る。「フェニスは高い身分に相応しく、自らの品行を「世間中」の模範にせしめる義務を負っていると考えており、そうした主張は、彼女が、クリジェスというたとえ幾つかの点では称賛すべきものを備えているとはいえ、道徳的には劣位にあることが疑問の余地のない文化圏

¹²¹ ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』137頁。

¹²² ジョルジュ・デュビー（新倉俊一・松村剛訳）『十二世紀の女性たち』120頁。

¹²³ アルベール・ポフィレ（新倉俊一訳）『中世の遺贈—フランス中世文学への招待—』筑摩書房、1994年、188-189頁。

¹²⁴ ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』145頁。

出身の若者に、最初に理解させなければならないことであった。」¹²⁵

文化の中心たる西欧の地からコンスタンティノーブルにやってきた彼女たちは、いわば文明の宣教者として、遅れたビザンツの君主とその臣民たちを教化し、彼らを正しい道に導いてやる使命を帯びていたのである。ザイデルが言うように、この物語においては、ビザンツ世界に対する西欧社会の倫理的な優越性が声高に宣揚されているのであり、そこから、東方世界に対して西欧が政治的に指導的な役割を果たすのは当然である、という主張が導き出されるまでには、ほんの一步の距離しかなかったであろう。

物語はここで終わってもよかったかもしれない。しかし、クレチアンは最後の最大のどんでん返しをエピローグに用意していた。該当箇所を渡邊浩司氏の散文訳で引用してみよう。

「それ以降、事実、妻が自分を裏切るのではないかと、妻を恐れない皇帝はいなかった。なぜなら、フェニスがどのようにアリスを欺いたか聞き知っていたからである。まずは魔法の水薬を飲ませ、次には他の奸計によって。そういう次第で、コンスタンティノーブルでは皇后は、どんなに気高く、どんなに高貴であろうとも、囚人のように閉じ込められたのである。皇帝は、フェニスのことを覚えている限り、決して皇后のことを信じられないのである。皇帝は皇后を常に部屋に閉じ込めておくが、それは日焼け防止のためというより、不信感のためである。子供の時に去勢した者でない限り、男は決して皇后に近づかなかった。そうすれば、愛の神が彼らの縁をつなぎ止めておくのに、過ちも恐れないのである。ここでクレチアンの作品は終わる。」(vv. 6749-6768)¹²⁶

渡邊氏によれば、このエピローグには2つの仕掛けが用意されていた。¹²⁷

ひとつは、ここまで語られてきたクリジェスの物語と、現在、作者のクレチアンが立つ場所との間には何代にも渡る皇帝たちの治世が介在したことを告げることで、読者や聴衆たちに一足飛びに多くの世代の経過を感得させていることである。それまで、物語の内容を聞きながら、漠然とそこに同時代の国際政治のアナロジーを感じ取っていた聴衆は、ここにおいて、物語がはるか昔の出来事であると聞かされ、同時代の国際情勢とは何の関係もない話であることを知るのである。こうした手法をクレチアンが用いたのは、物語のモデルとして取り沙汰されたであろう有力な王侯貴族たち（特にザクセン大公）との無益なトラブルを回避しようとする配慮が働いた結果であるこ

¹²⁵ I. Seidel, *Byzanz im Spiegel der literarischen Entwicklung-Frankreichs im 12. Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 1977, S. 99.

¹²⁶ 渡邊浩司『クレチアン・ド・トロワ研究序説』126頁。

¹²⁷ 同上、126-127頁。

とは容易に想像がつく。

第2の仕掛けは、ここまで、フェニスの能動的な生き方、社会的・宗教的な規範よりも自らの信奉する宮廷風恋愛思想に忠実に行動する彼女の生き方を熱っぽく語ってきた作者が、最後の最後で身を翻してそれに否定的な態度を示していることである。それまで彼女の生き方を作者は肯定しているのだと思い込んで読み進んできた読者は困惑したに違いない。だが、ここにもクレチアの周到な計算があったのである。

フェニスの自己中心的な考え方や行動、男を自己の意志に従わせる高圧的な態度などは、クレチアの物語の読者、聴衆のうち、男性たちには必ずしも受けがよくなかったことは十分に予想されることである。チャールズ・グリムは、フェニスの描き方に、宮廷風恋愛倫理を心から信奉していたわけではないクレチアのシニカルな視線を感じ取っている。

「彼女(=フェニス)の即物性や狡猾さ、そして安全に罪を犯し、あらゆる非難を免れたいという彼女の欲求はかなり嫌悪を誘うものであり、素晴らしい恋人というより、計算高い女の姿を示している。彼女は、完璧に自覚して熟考の上に姦通を犯すための周到な計画を立てることなど一切せずに、もっと自然にわが身を投げ打っていれば、もっと魅力的になっただろう。自分が完全に安全で免罪であることを保障する方策をクリジエスを見つけ出すまでは彼のものになる気はない、と彼女が彼に言う場面は、恋人の約束というよりも売り買いの取り引きをしているように見える。」¹²⁸

クレチアは、このような批判の声が上がることを事前に予想していたのだろう。彼は、彼が語る物語は遠い異国の、しかも遠い過去の話なのだと言位置付けることで、それと現実の世界との接点を遮断し、フェニスの生き方が現実の貴婦人たちの生き方の模範になるものではない、と釘を刺しているのである。

そのように考えてゆけば、ここから看取されるクレチアの立場は、彼と同じ時代にシャンパーニュ宮廷に仕えていたと思われ、有名な恋愛術指南の書を著しているアンドレアス・カペルラーヌス(アンドレ・ル・シャプラン)¹²⁹のそれと基本的に一致しているように思われる。宮廷風恋愛を称揚するものと一般には評されてきた後者の著作は、根本的に女性を蔑視するものであったことをG.デュビーは看破している。

「しかし女性蔑視は、宮廷の貴婦人たち取るに足りない特権をいくつか、恋する男に一時話す時間を許すか否かの権利や最も愛する男に花の冠をかぶせる権利を

¹²⁸ Ch. Grim, "Chrétien de Troyes' s Attitude towards Woman", *The Romanic Review*, 16, 1965, pp. 236-243, esp. p. 239.

¹²⁹ cf. アンドレアス・カペルラーヌス(瀬谷幸男訳)『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛術指南の書—』南雲堂、1993年。

与えてやろうという尊大さの中に、より露骨に現れている。身のこなし、坐り方、文章の言い回しといった作法の遵守以外に何も重要なことがない戯れの空間に女性たちの権力を押し込めること、それはその権力を抑制する、押し潰すことであり、男性の頭の中で女性恐怖を和らげることである。空しい事柄に関して彼女たちに委ねる無意味な権威は、男たちを安心させる。」¹³⁰

こうした理解に従えば、『クリジェス』の物語は、女性たちが能動的に事態を展開させ、物事の主導権を握る世界を、現実社会とははるかに時空を隔てた別の世界に封印した物語とも解釈することもできるだろう。貴婦人たちが自分たちの権利と権力を自覚し、思慮の乏しい男たちを思いのままに統御して、自らの意志に基づいて運命を切り開いてゆく世界は、文学的な虚構の世界だけに封じ込めておかなければならなかったのである。

VI 仮想体験物語の余波 —結びに代えて—

以上で当初、我々が予定していた課題の考察はほぼ終わったと言えるだろう。以下ではやや蛇足ながら、こうした空想と現実がないまぜとなった物語が、それに接した西欧、とりわけ北フランス周辺の王侯たちに及ぼした有形無形の影響について考察を加えることで結びに代えることにしたい。

通説によって『クリジェス』が成立したとされる年代から四半世紀後の1201年末頃に一人のビザンツ皇子が西欧の土を踏んだ。彼の名はアレクシオス・アンゲロス、ビザンツ皇帝イサキオス2世アンゲロス（在位1185-1194）の息子である。彼の境遇は、例によってどこかしらクレチアンの物語と似かよっていた。

彼の父イサキオスは、西欧側の伝承によれば、クリジェスの父アレクサンドルが騎士道の中心地であるアーサー王宮廷を目指したのと同様に、若き日に学芸の都パリで学生生活を送ったことがあった、と伝えられている。¹³¹ しかも彼は、物語のアレクサンドル同様、ラテン・キリスト教世界出身の花嫁を迎えているのである。¹³²

『クリジェス』の筋立てと似かよった挿話はまだ続く。物語の主人公が叔父アリスによって帝位継承予定者の座から排除されて、大叔父アーサー王の宮廷に赴き、支援を要請したのと全く同じように、叔父アレクシオス3世によって皇太子の座を追われ

¹³⁰ ジョルジュ・デュビー（新倉俊一・松村剛訳）『十二世紀の女性たち』430-431頁。

¹³¹ 本稿註84参照。

¹³² ただし、それは、フランス、ドイツ、イングランドのいずれからでもなく、ハンガリー王国からだったが。また、アレクシオス皇子の母親は、このハンガリー王女ではなく、彼の母親は、イサキオスが死別した最初の結婚相手だったことも付記しておく。cf. Niketas Choniates, p.419.

たアレクシオス皇子は、西欧の親族を頼ってビザンツを脱出していたのである。

彼の頼るべき相手は大叔父ではなく義兄、1197年5月に彼の姉エイレーネーと結婚していたシュヴァーベン侯フィリップ（フリードリヒ・バルバロッサの息子、ハインリヒ6世の弟）だった。国内政局に忙殺されていたフィリップは、新たな十字軍遠征の総大将に任じられていたモンフェラート侯ボニファチオと協議した上で、集結した十字軍の軍勢にこの皇子への支援を要請した。1203年春、皇子はアドリア海を南下する十字軍の艦隊に合流する。

この十字軍を率いる主要な指導者たちのなかには、かつてクレチアンが作品を発表した北フランスの高位貴族社会に所縁の深い人々の名前が並んでいる。¹³³

たとえば、フランドルとエノーの伯、そして後に初代ラテン皇帝の座に上ることになるボードゥワンの父は、ゴーチエ・ダラスの庇護者だったエノー伯ボードゥワン5世、母は、クレチアンが『聖杯物語』を献じたフランドル伯フィリップ・ダルザスの姉妹だった。

ブロワ伯ルイは、シャンパーニュ伯アンリ1世の甥であり、彼の母親はマリー・ド・シャンパーニュの妹でルイ7世とアリエノール・ダキテーヌの娘のアリックスである。

またサン・ポール伯ユグの妻ヨランド・デノーは、エノー伯ボードゥワン5世の姉妹でフランドル伯ボードゥワンの叔母にあたる、といった具合である。

不当に叔父に奪われた正統な権利を取り戻すために力を貸してほしい、と切々と訴えるビザンツの年若い皇子の声に耳を傾けながら、彼らは妙な既視感覚に襲われていたのではないだろうか。今や「騎士道の中心」の座を誇るフランスの騎士たちにとって、彼らの勇気と正義感を信じて助力を求める東方の高貴な若者に対して、救いの手を差し伸べるのに何をためらう必要があっただろうか。それは正義のための戦いであり、西欧の騎士道の倫理が東方の無節操なりアルポティークに対して道徳的に優位に立つことを証明すべき崇高な事業でもあったのである。¹³⁴ 悲惨な境遇に陥ったビザンツの皇子を助け、彼に正統な権利を取り戻してやるために自分たちの武器を揮うことは、神と正義を信奉する彼ら西欧騎士たちの当然の責務なのであり、そこに何らかの欲得ずくの打算が入り込む余地など表面的にはなかったのである。

もちろん、そうは言っても、アレクシオス皇子が協力の見返りに約束していた莫大

¹³³ J. Longnon, *Les compagnons de Villehardouin. Recherches sur les croisés de la quatrième croisade*, Genève, 1978, pp. 74, 137, 196.

¹³⁴ クレチアンの『クリジェス』に関して、L. ダントン-ダウナーは、「ギリシア」が騎士道や学芸の発祥の地と見なされる一方で、同時にその地は、そこに向かってアーサー王宮廷の騎士道が伝えられ、その文化的優位と権威を立証するための対象となるべき新天地とも見なされていた、と語っている。L. Dunton-Douner, "The Horror of Culture: East West Incest in Chrétien de Troyes' *Cligès*", *New Literary History*, 28, 1997, pp. 367-381, p. 373.

な報酬に彼らが全く心を動かさなかった、と言えば嘘になるだろう。物語のアレクサンドルのように、そして今も記憶に残るマヌエル1世帝のように、ビザンツ皇帝は惜しみなく金品財貨を分かち与えるものであり、彼らの高邁な事業が達成された暁に、自発的にアレクシオス皇子から差し出されるであろう魅力的な贈物を拒む理由は彼らにはなかった。

M. アンゴールドは、『クリジェス』の結末近くで、アリスが没し、クリジェスにコンスタンティノーブルの皇帝の座に就く道が拓かれたことを告げる使者が、東方への遠征のため大軍が集結中のアーサー王の陣中に到着したとき、一部の人々はこの知らせを歓迎したが、他の人々は遠征計画を続行させ、ギリシアに向かって出立することを望んだ、という記述 (vv. 6718-6722) を引きながら、そこではフィクションが史実に先行していた、と断じている。¹³⁵

虚構を追いかけるようにして、ヴェネツィア人の艦隊に運ばれた西欧騎士たちの軍勢が、すったもんだの末に、コンスタンティノーブル市街の広大な地域を焼失させた上で都を占領し、ラテン帝国と称するひ弱な国家を打ち立てるのは、この後、1204年4月のことである。

¹³⁵ M. Angold, *The Fourth Crusade. Event and Context*, p. 68.

ローマ生まれの救世主

——ゴージェ・ダラス『エラクル』を読む——

I はじめに

歴代のビザンツ皇帝の中でも、ヘラクレイオス（在位 610–641）¹ ほど西欧で好意的な世評を得た人物は他にない。20 世紀ビザンツ学の泰斗ゲオルグ・オストロゴルスキーが、この皇帝を、中期ビザンツ国家の国制の基礎を築いた改革者として高く評価したこと² はよく知られているが、それよりも数百年も前から、西欧の人々は同帝の事績に賛辞を呈してきたのである。

それは何よりも、ササン朝ペルシアの軍勢がエルサレムから持ち去った「真の十字架」を彼が奪回し、再び聖都に十字架を奉還する、という偉業を達

¹ カルタゴ総督を務めていたアルメニア系軍人で同名のヘラクレイオスの息子。610 年、北アフリカから艦隊を率いてコンスタンティノープルに攻め上り、皇帝フォーカスを打倒して即位。彼が即位した当時、帝国は、バルカンのアヴァール人と、ビザンツ領シリア・エジプトを席卷したササン朝ペルシアによって東西から挟撃され、未曾有の危機に直面していた。626 年にはアヴァール人とペルシア軍は連携して帝都を攻囲する。こうした状況の下でヘラクレイオスは自ら軍勢を率いてペルシア領の心臓部を衝くという起死回生の作戦を敢行し、それは見事に成功して一連の軍事行動はビザンツの勝利で幕を閉じた。しかし、彼の晩年に勃興したアラブ・イスラム勢力に対しては有効な施策を打ち出すことができず、苦心して奪回した東方領土はその後、永遠にビザンツから失われてしまう。軍略家として彼は非凡な能力を発揮したのは事実だが、帝国内の宗教論争を収拾させることができず、姪と結婚してスキャンダルを引き起こし、晩年は後継者問題で国内政治の混迷を招くなど、政治手腕に関しては疑問符がつく、というのが最近の識者の評価である。cf W.E.Kaegi, A.Kazhdan and A. Cutler, "Herakleios", in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, New York · Oxford, 1991, p.916f. 最新の同帝の評伝的研究としては、W. E. Kaegi, *Heraklius, Emperor of Byzantium*, Cambridge, 2003、彼の治世を対象とした論文集としては、G. J. Reinink & B. H. Stolte eds., *The Reign of Heraclius (610-641). Crisis and Confrontation*, Leuven, 2002、がある。井上浩一『ビザンツ皇妃列伝—憧れの都に咲いた花—』筑摩書房、1996 年、73–104 頁（ヘラクレイオスの姪にして妃のマルティナの評伝）も併せて参照のこと。

² G.Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staats*, 3Aufl., München, 1963, S.77–91（邦訳：ゲオルグ・オストロゴルスキー（和田廣訳）『ビザンツ帝国史』、恒文社、2001 年、131–146 頁）ただし、ヘラクレイオスをテマ制の創設者と考えるオストロゴルスキーの学説は、今日では広範な批判の対象になっている。テマ制成立をめぐる近年の研究動向に関しては、中谷功治「テマからテマ制へ——テマ制の成立時期をめぐる——」『待兼山論叢』21 号、1987 年、29–50 頁を参照のこと。

成したからに他ならない³。9世紀のラバヌス・マウルス以降、多くの教会人が説教集にこの事績を収め、9月14日の「十字架頌揚」の祭日は、「真の十字架」を掲げたヘラクレイオスのイェルサレム凱旋と結び付けられて広く祝われたのである⁴。後代の西欧人が、ヘラクレイオスのペルシア遠征と、「真の十字架」奪還に象徴される彼の勝利を、その後の十字軍運動の先駆けとして位置付けたことも彼への共感を高めることになった。十字軍運動の展開と聖地の十字軍国家の歴史を著したティルス大司教ギョームは、彼の年代記の冒頭に、614年のイェルサレム陥落とそれに続くヘラクレイオスの功業を簡潔に語り⁵、その年代記の仏訳や続編はしばしば『エラクル(=ヘラクレイオス)の物語』*L'Estoire de Eracles*の名で知られている⁶。彼を「最初の十字軍士」と位置付ける解釈は現代にまで継承されているのである⁷。

他方、ギョーム・ド・ティルが「ローマ皇帝ヘラクレイオスが帝国を治めて

³ 「真の十字架」奪回とイェルサレムへの奉還はヘラクレイオス治世の最も輝かしいエピソードとして、多彩なイメージで包まれることになった。それは十字架のシンボリズムと結び付いて初代キリスト教皇帝コンスタンティヌス大帝の勝利を喚起させ、ヘラクレイオス＝「新しいコンスタンティヌス」として新たなキリスト教帝国の到来を宣揚すると共に、聖櫃をイェルサレムに奉還したダヴィデ王の故事(『旧約聖書』サムエル記下6章)とのアナロジーからヘラクレイオスをダヴィデのイメージと重ね合わせる見方も流布した。さらに同帝のイェルサレム入城は「枝の主日」におけるキリストのその記憶とも結び付き、十字架によって死を制したキリストと、それによって夷狄を征服したヘラクレイオスの姿が重ね合わされることになった。cf. J. W. Drijvers, "Heraclius and the *Restitutio Crucis*: Notes on Symbolism and Ideology", in G. J. Reinink & B. H. Stolte eds., *The Reign of Heraclius (610-641)*, pp. 175-190. なお、この出来事を同時代の政治的文脈の中に位置づける試みとして、A. Frolov, "La vraie Croix et les expédition d'Héraclius en Perse", *Revue des Études Byzantines*, 11, 1953, pp.88-105 がある。

⁴ 邦語では、ヤコブス・デ・ウォラギネ(前田敬作・西井武訳)『黄金伝説』第3巻、人文書院、1986年、406-409頁。ヘラクレイオスの事績の西欧における受容については、L. Kretzenbacher, *Kreuzholzlegenden zwischen Byzanz und dem Abendlande. Byzantinisch-griechische Kreuzholzlegenden vor und um Basileios Herakleios und ihr Fortleben im lateinischen Westen bis zum Zweiten Vaticanum*, München, 1995, S.67-77を参照。

⁵ *Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R.B.C.Huygens, 2vols, Turnhout, vol.1, 1986, p.105f; William of Tyre, *A History of Deeds Done Beyond the Sea*, tr. by E.A.Babcock & A.C.Krey, New York, 1943 (rep.1976), p.60f.

⁶ cf. P.W.Edbury ed., *The Conquest of Jerusalem and the Third Crusade*, Aldershot, 1996, p.3f.

⁷ 最近の著作として、G.Regan, *First Crusader. Byzantium's Holy Wars*, New York, 2003, esp. pp.37-134を挙げておく。フランスの史家ルネ・グルッセも彼の十字軍史の冒頭に「十字軍以前の東方問題」という1章を設け、ヘラクレイオスの功業を「これは既に一つの十字軍であった」と評価している。ルネ・グルッセ(橋口倫介訳)『十字軍』、白水社、1954年(原著の初版発行は1944年)。

いた時代…」と書き起こしていること⁸に端的に認められているように、これらの西欧の著述家たちは、この皇帝の生い立ちはもとより、彼が皇位に昇った経緯すら全く関心を示さないのが通例である。彼らの関心は、失われた「真の十字架」の奪還という事績に集中しており、異教徒に対する「十字軍」遠征に乗り出す以前のヘラクレイオスに関して言及されることはほとんど皆無と云ってよい。

そうした中で例外的にこの皇帝の前半生に関心を寄せた作家がいた。本稿で取り上げるゴーティエ・ダラスがその人である。彼は、後述するごとく、この英雄の出生から少年時代、そして長じてコンスタンティノープルの帝位に昇った後の功業に至るまで、その知られざる生涯を詳細に描き出している。

ただし、そこで彼が用いているのは、我々が一般に伝記作家に期待するものとは全く異なる手法であった。通常、何らかの歴史的人物の伝記を著すためには、当該の人物に関して、できるだけ多くの資料を収集し、信頼に値する情報を精選して彼の人生を再構成することが求められるだろう。ところが彼はこうした作業はまったく行っていないのである。その代わりに彼は、その多くが東方起源と思われる多くの説話や伝承を集め、それらをパッチワークのように巧みに繋ぎあわせることで、ひとりの英傑の人生絵巻を紡ぎ出してみせた。その意味で彼の作品は、厳密に言えば、皇帝ヘラクレイオスという歴史上実在した人物の「伝記」ではなく、特にその前半部分に関しては、この皇帝に仮託された全くの虚構の物語、作家ゴーティエの純然たる「創作」と言うべき作品なのである。しかし、史実に照らしてこの作品の内容が荒唐無稽だからといって、それが歴史研究の視点から無価値かといえ、必ずしもそうではあるまい。詳しくは後に譲るが、この文学作品を、それが成立した時間と空間の中に位置づけてみると、最初は一人の作家の夢の産物にしか見えなかった作品の背後に広大な歴史的眺望が広がっているのを、我々は眼前にすることができるのである。だが今は結論を急ぐまい。以下では順を追って、最初に作者と作品について基本的な情報を確認し、ついで『エラクル』の筋立てと挿話の典拠を究明した上で、この作品と歴史との接点を探求する作業に取り組むことになるであろう。

⁸ “quod tempore quo Eraclius Augustus Romanum administrabat imperium, ...”, *Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R.B.C.Huygens, vol.1, p.105.

II 作者と作品

『エラクル』⁹の作者について我々に知られるところは、同時代の他の作家同様、多くはない。彼が「ゴーティエ・ダラス」の名で自らを呼んでいるのも、現存する彼のもうひとつの物語作品『イルとガルロン』の中で1度きりである¹⁰。ともあれ、そのことによって、彼が北フランス、アラスの町の出身であるか、あるいはその町の居住者であることが知られるのである。

彼を、アラスの城代の家系に属し、フランドル伯フィリップ・ダルザスの重臣だった Gualterus de Atrebatō (ないし Atrebatensis)¹¹ (ゴーティエ・ダラスのラテン語形) という人物と同定しようとした F. A. G. クーパーの学説¹²は、今日ではほとんど支持を得られてはいない。A. フーリエが言うように、ゴーティエという名前はありふれており、アラスの町出身 (あるいはその町に居住する) 同名の人物などそれこそ掃いて捨てるほどいたと思われること、そして何よりも、彼の作品のあちこちに認められるパトロンの気前よい振る舞いを期待する口ぶりに、どう見ても大身の貴族よりも、著作を貴人に献呈して見返りを求める職業的な文筆家の心性が認められるのがその理由である¹³。

『エラクル』の記述から、著者は聖書を初め、多くの宗教関係の著作に親しんでいたことが推定されている。おそらく彼もまた、同時代の偉大な作家クレチアン・ド・トロワと同様、教会人としての学業を積んでいたものと思われる

⁹ 本稿で利用した校訂版は、Gautier d'Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, Paris, 1976 である。他に、Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne d'après l'édition de G. Raynaud de Lage par A. Eskénazi. Introduction et dossier par C. Pierreville, Paris, 2002 を適宜、参照した。

¹⁰ Gautier d'Arras, *Ille et Galeron*, publié par Y. Lefèvre, Paris, 1988, p. 223, v. 6592. なお、『イルとガルロン』に関しては、以下の仏訳、英訳も併せて参照した。Gautier d'Arras, *Ille et Galeron*, Traduit en français moderne par J.-C. Delcols et M. Quereil, Paris, 1993; Gautier d'Arras, *Ille et Galeron*, Edited & translated by P. Eley, London, 1996.

¹¹ フランドル伯フィリップ・ダルザスの文書 111 通に登場するこの人物は、後述するクーパーの研究によれば、伯の宮廷で立身し、フランドルのセネシャル (家令) の娘を娶り、prévot (司法官) あるいは、minister et officialis Philippi といった称号を帯びて文書に姿を見せていた。彼は、伯の不在時には伯領の経営を委ねられたほどの有力者であり、他方、アラスの聖ヴァース修道院からだけでも 17 の所領を授封された大領主でもあった。

¹² F. A. G. Cowper, "More Data on Gautier d'Arras", *PMLA*, 44, 1949, pp. 302-316. W. C. Calin, "On the Chronology of Gautier d'Arras", *Modern Language Quarterly*, 20, 1959, pp. 181-196, esp. p. 187f もこれに同調している。

¹³ A. Fourrier, *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, Paris, 1960, pp. 180-183. cf. Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit par A. Eskénazi. Introduction et dossier par C. Pierreville, p. 8f; Gautier d'Arras, *Ille et Galeron*, Edited & translated by P. Eley, pp. vii-viii.

14. 他方、もうひとつの彼の作品、『イルとガルロン』からは、彼が同時代の世俗文学（武勲詩、マリー・ド・フランスの短詩、古代風ロマンなど）に通じていたことが窺える¹⁵。

『エラクル』の写本は、今日、3種のそれが残るのみ¹⁶ だが、13世紀の聖母の『奇蹟集』の序文¹⁷ に、ゴーティエがクレチアン・ド・トロワらと並んで「立派な吟唱詩人」(bons ménestrels) と評され、同じく13世紀にドイツで『エラクル』の翻案作品が成立していること¹⁸ などを勘案すれば、この作家が同時代の人々にそれなりに高い評価を受けていたことが推定されるのである¹⁹。

彼の作品の成立年代は、そこに言及されているパトロンたちの顔ぶれから、おおよその見当をつけることができる。『エラクル』は、ティボー・ド・ブロワ（ブロワ伯ティボー5世、在位1152-1191）とマリー・ド・シャンパーニュ（仏王ルイ7世とアリエノール・ダキテーヌの娘、シャンパーニュ伯アンリ1世の妃）の求めで執筆され、ボードゥワン・デノー（エノー伯ボードゥワン5世、在位1171-1195）のために仕上げられた。このことから、この作品は、マリーがシャンパーニュ伯に輿入れした1164年を遡るものではないことが分

14 『エラクル』の校訂者レイノー・ド・ラグは、ゴーティエが宗教的テキストに精通し、詩篇の言葉を自然なフランス語に改めていることに注目して、彼を、定期的な聖務を執り行っている聖職者と見なし、さらに、詩人が唯一、エノー伯ボードゥワンのみを2度にわたって「我が主君」(mon signor)と呼んでいることを根拠に、彼が伯の宮廷礼拝堂付司祭だったと推定している。Gautier d'Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, p. ix. しかし、この学説に対して、A. フーリエは、ゴーティエの活動の中心をブロワ・シャンパーニュ宮廷であると想定し、彼は「かなり貧窮した聖職者だったに違いなく、修道院から修道院、定期市から定期市、城から城へと遍歴する vagants の一人と見なすほどではないにせよ、彼が『エラクル』の序文の中で某大物の吝嗇ぶりとブロワ伯ティボーの気前よさを対比させる類の場面を素描していることを思えば、彼はトゥルヴェールやジョングルールの狭い世界に極めて近い存在だと感じられる」と論じている。A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 181

15 たとえば、主人公イルの父親の名エリデュックは、マリーの短詩の登場人物に由来していた。マリー・ド・フランス（月村辰雄訳）『十二の恋の物語』、岩波文庫、1988年、XII「エリデュック」、221-269頁参照。

16 Bibliothèque Nationale, fonds français, 1444 (通称A写本。13世紀末。同一写本内に23のテキストを収め、『エラクル』は14番目 (f. 124a-154a)。写字生はしばしば軽率なミス。ピカルディー方言の影響); Bibliothèque Nationale, fonds français, 24430 (通称B写本、またはTournai写本。13世紀末。トゥールネに関係する多くのテキストを収録。A本より原本から遠ざかっているが、誤字は少ない); Bibl. Naz., L.I, 13 (通称トリノ写本、トリノ国立図書館所蔵。1904年の火災時に水を被り、判読が困難) 以上の知見は、Gautier d'Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, p. v-viii による。

17 Ms. Arsenal 3518. f 96b. (筆者未見) A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 181 による。

18 cf. W. Frey Herseg, *Der Eraclius des Otte*, Esen, 1990.

19 ゴーティエに対する中世人の評価については C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, Paris, 2001, p. 16f を参照。

かる。一方、ゴーティエのもうひとつの作品『イルとガルロン』はドイツ皇妃ベアトリクス・ド・ブルゴーニュ（皇帝フリードリヒ1世バルバロッサの妃）の依頼で着手され、ブロワ伯ティボーのために仕上げられている。それゆえ、作者が『イル』に着手したのは、ベアトリクスが皇妃として戴冠された1167年8月1日以降ということになる。

一般に中世の詩人は特定の大諸侯の保護下に入り、後者に専従的に奉仕する存在と考えられていた。ところがゴーティエの作品には複数の庇護者が登場し、しかもブロワ伯は『エラクル』の着手と『イル』の完成に関与するなど錯綜した様相を呈している。そのため、作家がどのような順番で奉公先を変更していったのか、多くの学者たちが頭を悩ませる結果となった。

これに対してA. フーリエはそうした通念が混乱の原因であるとして、発想の転換を唱えている。彼は、詩人は常に大貴族の宮廷に逗留していたわけではなく、むしろ、ごくたまに、祭典や多少とも盛大な集会在催されるような機会に彼らの許を訪問したのではないかと考えているのである。そのような集會を想定すれば、詩人がブロワ伯ティボーと彼の義姉マリーから同時に作品執筆を依頼される一方で、伯の妃でマリーの妹でもあるアリクスへの言及がないのも合点がいく、というのがフーリエの見解である。また、詩人は大貴族のパトロンから生計費を得ることで、彼の家門に帰属する場合においても、パトロンの合意の下で、あるいはその依頼に基づいて、後者の親族や友人のために作品を執筆するのは充分ありえることであつた、とフーリエは語っている²⁰。このような考えに従えば、ゴーティエの活動は、主としてブロワ・シャンパーニュ家の宮廷、とりわけ彼の2作品のいずれにも言及され、その気前よさが賛美されているブロワ伯ティボーのその周辺で展開されていた、と見て大過ないだろう。

残りの2人のパトロン、ドイツ皇妃ベアトリクスとエノー伯ボードゥワン²¹も、シャンパーニュ伯家との間に様々な接点を有していた。

ベアトリクスは、旧ブルグンド王国の流れを引き、リヨン、ヴィエンヌ、ブザンソンなどを版図に収めるブルゴーニュ伯家の相続人である。彼女の父、ブルゴーニュ伯ルノー3世（在位1127-1148）の姉妹エリザベトは、シャンパーニュ伯ユグ1世（アンリとティボー兄弟の大叔父）に嫁いでいたから、彼女とシャンパーニュ伯家は縁戚関係にあった。両家の結び付きは、後にベアトリクスとバルバロッサの息子でブルゴーニュ伯領の相続人に指定されたオト

²⁰ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p.188f.

²¹ この2人の家系と人物像については、*ibid.* pp.181-183 参照。

ン（オットー）とティボー伯の娘マルグリットが 1192 年に結婚したことでさらに強化される。

一方、エノー伯ボードゥワン 5 世は、1169 年にフランドル伯フィリップ・ダルザスの姉妹マルグリットと結婚して以来、シャンパーニュ伯家に接近することになった人物である。ボードゥワンとマルグリットの間には 1170 年と翌年、相次いで子供が生まれると、フランドル伯フィリップは、シャンパーニュ伯アンリの子供たち 2 人との二重結婚を斡旋した。1179 年 5 月にはボードゥワン自身がトロワのシャンパーニュ伯の宮廷を訪れ、婚約の再確認が行われている。

さて、それではゴージェが彼の 2 つの作品を執筆するにあたり、これら 4 人のパトロンたちと、どのような局面で関係を結んでいったのであろうか。この点に関して、フーリエの研究を参照しながら考察してみよう。

『イル』の写本には、『エラクル』への言及が認められるので、『エラクル』が『イル』に先行して執筆が開始されたのは間違いない。また、作品の序文と結びで献呈先の人物が異なること、作者のゴージェが『エラクル』の半ば（v. 2909-2914）で計画を最後まで遂行するのに不安感を表明していること、2 つの物語の筋立てに類似性があること、などを勘案すると、両作品の執筆期間は互いに重複、継起していた可能性が高いと考えられる。そうした前提において、作者とパトロンたちの出会いの場として想定できる出来事を歴史の中で探しながら、フーリエは以下のような仮説を提示する²²。

1174 年の復活祭にイングランド王ヘンリー 2 世は妃のアリエノールを幽閉する。王妃の幽閉は 1189 年まで続いた。『エラクル』には夫である皇帝によって皇妃が塔に監禁される挿話が収められているが、少なからぬ研究者が、作者はこの事件からその着想を得た可能性がある、と考えている。いずれにせよ、このショッキングな出来事は西欧各地の宮廷で話題に上ったであろうことは想像に難くない。

1176 年 8 月から翌年 4 月にかけてプロヴァンのシャンパーニュ伯の宮殿で、一門の主要人物を集めた大規模な集会が開催された。そこでは、伯のアンリ 1 世と伯妃マリーに加え、伯の兄弟であるブロワ伯ティボーと大司教「白い手」のギョームが一堂に会した。フーリエは、伯妃マリーとブロワ伯ティボーによってゴージェに『エラクル』執筆が求められたのはこのときではないか、と推定している²³。

翌 1177 年 9 月 21 日、教皇特使の仲介でイヴリーにおいて仏王ルイ 7 世と英

²² cf. *ibid.* pp.198-204.

²³ *ibid.* p.198f.

王ヘンリー2世が会見、両者の和解と十字軍遠征の準備に着手することが取り決められた。英王の長男ヘンリーとブロワ伯ティボー（兩人とも仏王の娘婿であり、またブロワ伯は王のセネシャルでもあった）とルイ王の弟ロベール・ド・ドルーとピエール・ド・クルトネーの立会いの下で進められたこの会見は、十字軍の出陣に向かう熱気に包まれていたことだろう。すでに同年5月にはフランドル伯フィリップが軍勢を率いて聖地に向かっていた。こうした雰囲気、異教徒への聖戦を称揚する『エラクル』の執筆を促すことになったのである。しかし、結局、英仏両王の十字軍はこのときには実現することはなかった。それと歩調を合わせたように『エラクル』の執筆も、一時中断したらしい。

というのも、イヴリーの会見のおよそ2ヶ月前の7月24日、ドイツ皇帝フリードリヒ・バルバロッサがヴェネツィアにおいて教皇アレクサンデル3世と和平を締結して、長年にわたるイタリア問題にひとまず決着を付けると、ゴージェエには新たな作品執筆の依頼が舞い込むことになったからである²⁴。

翌1178年7月半ば、ドイツ皇帝夫妻は滞在先の北イタリアを出発し、以後2ヶ月にわたりゆっくりと南から北へ皇妃の故郷ブルゴーニュ伯（旧ブルグンド王国）領を巡行した。7月30日、アルルの聖トロフィーム聖堂で、バルバロッサは古式に倣って「ブルグンド王」としての戴冠式を行う。その後、一行は、アヴィニョン、オランジュ、モンテリマール、ヴァレンスと北上、8月15日の聖母被昇天祭に北の王都ヴィエンヌにおいて今度は皇妃ベアトリクスがブルゴーニュの冠を授けられた。それは、夫であるフリードリヒから彼女へのブルゴーニュ伯領の自治特権、すなわち、彼女が1184年11月に死去するまで行使し、その後は2人の四男オットーが引き継ぐことになっていた特権の付与を確認する行為であったと考えられる。

その後、一行はリヨン（8月19-20日）を経て北上を続け、ドール（9月

²⁴ 新しい作品とは、言うまでもなく『イルとガルロン』のことである。物語の後半でブルターニュ出身の騎士イルがギリシア皇帝の攻撃に苦しむローマを救い、ローマ皇女ガノルと結ばれるという筋立てをもつこの作品は、12世紀後半における主にイタリアを舞台としたビザンツ皇帝マヌエル1世とドイツ皇帝フリードリヒ・バルバロッサの対立を下敷きに見なす見解が有力である。cf. C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, p.13. フーリエは、この作品の中で教皇とローマ・ドイツ皇帝が友情で結ばれていることに注目し、それを、この作品が1177年のヴェネツィアの和約以降に成立したことの証拠と見なしている。A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p.198. また、ローマ皇女ガノルの姿に、皇妃ベアトリクスが投影されているであろうことについては、C. Pierreville, "D'Athanaïs à Ganor, les métamorphoses de l'impératrice dans les romans de Gautier d'Arras", dans *Reines et princesses au Moyen Âge. Ve colloque internationale organisé par le CRISMA, les 24-27 novembre 1999 à Montpellier*, Montpellier, 2003, pp.659-669, p.666 を参照。

6日)を通過して同13日にはベアトリクス之父の本拠ブザンソンに到着、9月中、同地に滞在して盛大な諸侯会議を開催した。ブザンソン大司教、メッスとジュネーヴの両司教、マグデブルクの城代など多くのドイツ諸侯が参集したこの会議には、皇妃の遠近の親類縁者たち、とりわけブロワ・シャンパーニュ家に連なる人々も姿を見せていた。シャンパーニュ伯アンリ1世、彼の弟でランス大司教のギョーム、彼らの甥のブルゴーニュ公ユーグ3世などがそれである。ブロワ伯ティボーはこれには参加していなかったらしいが、フーリエは、ゴージェがランス大司教、あるいはなかならずアンリ1世の随行者に加わって、この機会にドイツ皇妃の知遇を得て、彼のパトロンたちの合意の上に彼女のために作品、すなわち『イルとガルロン』を著すことを引き受けたのであろう、と想像する²⁵。

翌年の1179年5月13日、前述したようにエノー伯ボードゥワン5世が彼の2人の子供をシャンパーニュ伯家の2人の子女と婚約させる協定を確認するためにトロワの后者の宮廷を訪問した。ゴージェがエノー伯から『エラクル』を完成させるよう求められたのはこの機会においてであった、とフーリエは想定している。この時期、シャンパーニュ宮廷では、再び十字軍の機運が盛り上がっていたのである。この会合の後、シャンパーニュ伯アンリ1世は、王弟ピエール・ド・クルトネーおよびボーヴェー司教フィリップ(王弟ロベール・ド・ドルーの息子)と共に十字軍に出陣する。

その後、アンリ伯は聖地からの帰途、小アジアでトルコ人の捕虜となった。彼はビザンツ皇帝マヌエル1世の身代金支払いによって自由を回復し、1181年3月10日に帰国を果たしたものの、すでに健康を害していたために3月16日から17日にかけての夜半に逝去した。伯が聖地から持ち帰った「真の十字架」の聖遺物を安置するため、それまで聖母に捧げられていた宮殿付属礼拝堂が「聖十字架」礼拝堂と改名されたこと²⁶は、ヘラクレイオス帝の「真の十字架」奪還の挿話との関連性から記憶にとどめておいてもよいだろう。

伯の死からおおよそ2ヵ月後の5月14日、プロヴァンの町にブロワ・シャンパーニュ家の一門が参集した。ここには、王太后アリクス(故アンリ伯の姉妹、仏王フィリップ・オーギュストの母)、伯妃マリー、ブロワ伯ティボー5世、その兄弟のランス大司教ギョーム、同じくサンセール伯エティエンヌ、さらに彼らの甥にあたるブルゴーニュ公ユーグ3世やバル・ル・デュック伯アンリ1

²⁵ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, pp.199-202.

²⁶ C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, p.14f. この件に関しては後にもう一度、触れることになる。

世が顔を揃えていた。さらにフランドル伯フィリップ・ダルザスとエノー伯ボードゥワン5世もこれに加わり、以前に確認されていたシャンパーニュ家とエノー家との間の二重結婚の約定が、仏王フィリップに嫁いだイザベル・デノーに代えて妹のヨランドを立てるという修正を施した上で再度、確認された²⁷。プロワ・シャンパーニュ家とフランドル・エノー連合の連携が再確認されたこの時期以降であれば、たとえゴーティエがエノー伯ボードゥワンに奉公先を変えていても、元の主人のプロワ伯ティボーに作品を献呈するにも何の支障もなかっただろう、というのがフリーエの見立てである²⁸。

1184年5月20日の聖霊降臨祭、皇帝フリードリヒ・バルバロッサはマインツで盛大な帝国会議を開き、ドイツ各地とブルゴーニュ伯領から7万の騎士がこれに参集したと伝えられている。このとき、エノー伯ボードゥワンは皇帝の太刀持ちを務めるという榮譽に浴した。皇后ベアトリクスにとって、これが彼女の臨席した生涯最後の盛大な集会となった。彼女はこの年の11月15日、およそ40歳で世を去るのである。フリーエが推測しているように、当時、ゴーティエはエノー伯の配下に属していたとしたら、この1184年の帝国会議は、彼がかつて皇妃に執筆を求められていた『イルとガルロン』を捧げる絶好の機会になったはずである²⁹。

以上の考察を作品の執筆時期とパトロンたちの関係を軸に整理すると次のようになる³⁰。

1176年から77年（プロヴァンのシャンパーニュ家一門会議）にかけてゴーティエは、プロワ伯ティボー5世とシャンパーニュ伯妃マリーの勧めで『エラクル』の前半部を執筆する。次いで1178年8月、ブザンソンにおいて、ゴーティエは、すでに着手していた『イルとガルロン』を書き進めるよう皇妃ベアトリクスに求められた。その後、作家はエノー伯ボードゥワン5世に促されて、1179年から1181年頃までに一時中断していた『エラクル』を仕上げ、さらに1181年の皇妃ベアトリクスの死までには『イルとガルロン』も完成させた。フ

²⁷ 今回の一門会議は、新王フィリップ2世が母の実家のシャンパーニュ家の影響力から脱する姿勢を示し、フランドル伯フィリップ・ダルザスを重用し、伯の姪イザベル・デノーと結婚したことに対して、シャンパーニュ派が対抗策を協議するために開催したものと思われる。これに対してフランドル伯とエノー伯は自ら会議の場に乗り込み、二重結婚の約定を再確認することで関係修復と両陣営の和解を図ったのである。cf. J. Bradbury, *Philip Augustus. King of France 1180-1223*, London, 1998, pp.40-43, 46-48.

²⁸ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 203.

²⁹ *ibid.* p.203 f.

³⁰ *ibid.* p.204. C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, pp.13-15. も作品の年代画定に関してほぼ同意見である。

ーリエは、1179年頃にゴーティエがエノー伯へ奉公先を改めていたとしても、かつての主人の恩顧を忘れず、『イル』の1写本をブロワ伯に送ったのだろう、と考えている。

このように見ると、ブロワ・シャンパーニュ家に連なる2人のパトロンの発案に基づく『エラクル』は、同家の意向を反映し、一方、イタリアの支配をめぐって、すでに同地を支配するドイツ・ローマ皇帝権とそれを軍事的に脅かすギリシア皇帝権との対決が主要なプロットを成す『イルとガルロン』は、ドイツ皇妃ベアトリクスに意に沿ったものだったことが窺えるかもしれない。この点に関しては、後にもう一度、振り返る必要があるだろう。

III 物語の概容

本格的な考察に入る前の予備作業として、ここで『エラクル』の筋立てをごく簡単に要約しておきたい³¹。先にも述べたように、この作品は皇帝ヘラクレイオスの伝記の体裁をとるが、皇帝即位以前の彼の前半生の部分は、古今の説話を繋ぎ合わせた作者ゴーティエの全面的な創作に他ならない。この作品の構成に関しては、主人公の皇帝即位を境に前半と後半の2部構成と見る見方と、前半部をさらに2分して3部構成とする説とが並存しているが、以下では議論を整理するのにより容易な後者の流儀に従って、この物語の筋を追うことにしよう³²。

(1) 主人公の誕生と試練

物語の前半は、ティベル川の畔のローマの町で展開する。

元老院議員ミリアドス Miliados とカッシーヌ Cassine は敬虔の念厚く、高

³¹ 『エラクル』の物語の概略は、Gautier d'Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, pp.xiii-xvii ; Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, pp.12-24 から得られる。

³² 最近のキングの論文は、主人公が神から与えられた宝石、馬、女性の真の価値を見極める能力がデュメジルの論じるインド・ヨーロッパ語族特有の3機能論に符合している、というヴォルフツェッテルの議論（後述、註32参照）を受けて、『エラクル』の3部構成自体がこの3機能論に対応するものであると主張している。すなわち、彼の所論によれば、主人公の誕生と神による特殊な能力の付与が語られる第1部は聖者伝の体裁をとっている。「聖性」を象徴し、皇妃と若い恋人との不倫愛が主題となる宮廷風恋愛仕立ての第2部は「豊饒性」、そして主人公による異教徒に対する「十字軍」遠征と「真の十字架」奪回が主要なテーマとなる武勲詩風の第3部は言うまでもなく「武勇」を体現していた、というのである。cf. D. S. King, "The Voice from Within: Intra-textual *Auctoritas* in Gautier d'Arras's *Eracle*", *Neu-philologische Mitteilungen*, 104, 2003, pp. 237-248, p.246.

潔で仲睦まじい夫婦だったが、結婚して7年を経てもまだ子宝に恵まれていなかった。子を願う夫婦の祈りに神は応え、カッシーヌの許に天使を送って懐胎に必要な手筈を告げさせた。それは、床に豪華な敷物を広げ、その上を絹織物で覆った上で、最も美しく見事なマントに包まって夫婦の契りを結ぶというものであった。指示に従った夫婦にやがて男の子が生まれる。両親はこの子を当初、Dieudonné と命名した。その名は「神の贈物」を意味し、この子が生まれながらにして神に選ばれた存在であることを強く示唆するものであった³³。

赤ん坊が洗礼を受けた2日後、神は再び天使を派遣して、嬰兒の揺籠に手紙を届けさせた。その手紙は、生まれた子供に宛てられており、表書きに彼が十分にそれを読める年限に達するまで開封しないようにという厳命が付されていた。6歳までに十分な学業を積んだエラクルは、保管されていた手紙を開き、神が彼に宝石、馬、女性の真価を見抜く能力を授けたことを知る³⁴。

エラクルが10歳のとき、父ミリアドスが世を去った。母親のカッシーヌは夫の魂の安息を得るために全財産を処分して修道院を建立、残りの財貨は貧しい人々に分配された。さらに彼女は究極の犠牲を払う行為として、本人の合意を得た上で最愛の息子を市場で奴隷として売り払うことを決意する。

市場でエラクルは前述の3つの能力があることを申し立てて、皇帝のセネシャルを説得し、1000ベザント³⁵という高値で自らを買い取らせることに成功

³³ その名は、1165年に生まれたフィリップ・オーギュストの幼名としても知られている。作者には、物語の主人公と、シャンパーニュ家出身の母から生まれた王家の後継者の姿を重ね、後者の輝かしい未来を称えようとする気持があったのかもしれない。また、この作品の第2部でビザンツ皇帝テオドシウス2世がモデルとなる説話が採用されていることを思えば、ディウドネという名がラテン語のテオドシウスをフランス語に訳した形であることにも、何やら作者の意図的な暗示めいたものを感じさせる。

³⁴ 先にも述べたように、ヴォルフツェッテルは、エラクルが神から授けられた3つの機能は、G. デュメジルの論じるインド・ヨーロッパ語族特有の3機能論に符合していると論じている。すなわち、①「中世における宝石のシンボリズムを考えれば、宝石は徳性上の美德のシンボルであると同時に教会の信仰と君主権力のアトリビュートでもあった」から「聖性」を示し、②女性の真価を識別する能力は「身体とセクシャリティーに関する第3の機能を示している」ので「豊饒性」を、そして③「馬は騎士の象徴的なアトリビュートである」からそれは、「容易に第2の機能、貴族の戦闘的機能と関連付けられる」ので「武勇」を示していたと考えられるのである。そして、ヴォルフツェッテルによれば、「こうした3つの才能を有することは、こうした視点から見れば、3つの機能を自由にする、換言すれば、社会の全体的な知恵を獲得すること」を意味していた。F. Wolfzettel, "La recherche de l'universal. Pour une nouvelle lecture des romans de Gautier d'Arras", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 33, 1990, pp.113-131, p. 123f.

³⁵ すなわち、ビザンツ金貨1千枚である。ビザンツ金貨は72分の1リトラ（ローマ・ポンド）と規定されており、1リトラは319～324グラム程度と言われているので、仮に1

する。母親は受け取った代価を残らず貧者に分配した後、自分が建立した修道院に隠遁した。

宮廷に戻ったセネシャルは、子供の口車に乗せられて大金を失ったと人々に揶揄され、物笑いの種にされた。それを耳にした皇帝はセネシャルを呼び、直ちにその少年が有していると称する能力を証明して見せるように命じる。

最初に問われたのは「宝石」の真価を見極める能力である。皇帝は布告を発し、次の火曜に市を開くこと、ローマとその周辺に住み、宝石を所有する者は所持する宝石を残らず出展すべきこと、を命じた。市の当日には夥しい数の宝石が店頭に並び、中には「トゥールーズの全ての黄金」(v.797)に匹敵すると値踏みされた高価な宝石も含まれていた。皇帝の命を受けたエラクルは一軒一軒、露店を巡って並べられた宝石を吟味したが、最後に、何の取り柄もなさそうなみすぼらしい石を彼は選び出した。しかも、彼は、売り主の6ドゥニエという言い値を無視して40マルク³⁶という法外な代価を支払ってそれを買取ったのである。

その知らせを受けた皇帝は驚き、呆れ、慨嘆する。

「何ゆえにお前は余の金でこんな価値もない石を買入れたのだ。そして何故にお前はそれに40マルクも支払うというとんでもない取り引きをしたのだ。どうやらお前は、お前の身柄と引き換えに1000ベザントも支払ったお前の主人のセネシャルと同じ不幸を余にも味あわせたかったようだな。何たる悲しみ、まったく何たる不幸なことだ！」(vv.899-906)

これに対してエラクルは、この石にはその持ち主を水、火、武器の打撃から守る不思議な力が秘められているのだと皇帝に言上した。皇帝は早速、身をもってその発言を証明してみせるようにエラクルに迫った。

件の石を首に下げたエラクルは石臼に縛り付けられ、綱を付けてティベル川に沈められた。彼の体は深く沈み、長い時間が流れて誰もが彼が溺死したものと覚悟した。ところが皇帝の命を受けて人々が綱を引き上げると彼が元気な姿で水面に浮かび上がったのである。

続く火の試練においても、彼は燃え盛る炎の中に進み、しばらくそこに留ま

リトラ=320グラムとすれば、1000ベザントは黄金4400グラム強に相当する。

³⁶ 中世西欧の貨幣価値を厳密に算定するのは困難である。仮にフィリップ・オーギュスト時代のパリ・ドゥニエ銀貨の重量は1.2237グラム、そのうち銀の含有量は0.5009グラムという数字を適用すれば、6ドゥニエは銀約3グラムに相当する。一方、1マルクを約245グラムと想定すると、40マルクは銀9800グラムとなる。それゆえ、エラクルは商人の言い値の3200倍もの代価を支払ったことになる。

ったが、かすかな火傷ひとつ負うことはなかった。人々にはわかには彼が妖術使いではないかと疑い始める。エラクルは嫌疑を晴らすために、皇帝自身がこの宝石を帯びて火中に入って見るように提案した。皇帝が石を受け取り、一瞬のためらいの後、思い切って炎の中に飛び込むと、彼の体を炎が包んだかに見えた。しかし、燃え盛る炎は彼の身に何の危害も加えることはなかったのである。

さらにエラクルは、この石の3つめの能力を証明するため皇帝配下の豪傑の挑戦に応じる。この宝石を身に着けただけで寸鉄も帯びない小さなエラクルが、武装した巨人のような騎士と対峙する様は、明らかに作者が旧約聖書のダヴィデとゴリアテの対決をイメージしていたことを窺わせる³⁷。彼は、常人ならば一撃で致命傷を負うような剣の打撃を繰り返しながら、かすり傷ひとつ負うことはなかった。かくして彼は、見事にその宝石が彼の語ったとおりの力を有していたことを証明したのである。

エラクルの能力を目の当たりにして皇帝は大いに心を動かされたが、まだ完全にそれを信じたわけではなかった。彼は、エラクルの持つ3つの才能のうち第2のそれ、すなわち、馬の真価を見抜く能力を試す計略を思いついた。彼は自分が所有するその価値200銀マルクとも言われた、大きさにおいても、美しさにおいても群を抜いた名馬を密かに定期市に出す手筈を整えた。最良の名馬を求めるよう命じられたエラクルがそれを選べば、本当に彼が馬を選ぶ眼識を備えていることが証明される、と皇帝は考えたのである。

市の中をエラクルは注意深く歩き回り、集まった数千頭の馬を検分した。皇帝の馬の前にも立ち止まったが、皇帝やセネシャルの期待に反して、それは彼の意を満たすものではなかった。代わりに彼が選び出したのは、見るからに貧相な仔馬だった。しかも、例によって彼は、2マルク半という言い値に対して40マルクという思いもよらぬ高額を無理やり売り手に受け取らせたのである。

皇帝は期待を裏切られて失望する。エラクルは、買い入れた仔馬を1年間、大事に育てれば、名馬3頭が交代で走っても敵わないほどの駿馬になる、と保証した。納得できない皇帝は今すぐそれを証明してみせるように要求した。やむなくエラクルは自ら仔馬の手綱を握り、皇帝、セネシャル、コネタブル（主馬頭）がそれぞれ所有するローマきつての3頭の名馬との勝負を受けて立つこ

³⁷ cf. Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A. Eskénazi, p.16. この箇所は、ヘラクレイオス帝にダヴィデのイメージを重ねる傾向があったのを作者のゴージェイエが十分に認識していたことを窺わせている。cf. J. W. Drijvers, "Heraclius and the *Restitutio Crucis* : Notes on Symbolism and Ideology", p. 184f.

とになった。激しいレースの果てにエラクルの仔馬は勝利するが、エラクルが警告したように、十分な体力をつける前に過酷なレースに臨んだため、力尽きて絶命してしまう。

この出来事を機にエラクルに寄せる皇帝の信頼の念は不動のものになった。彼は、エラクルが持つ第3の能力、すなわち女性の真の資質を見抜く能力、を駆使して将来の皇妃となるべき自分の花嫁として、非の打ち所のない美しい女性を選んでくれるよう後者に依頼した。例によって布告が発せられ、帝国中から生まれも高貴な見目麗しい令嬢たちが首都ローマに集められた。豪華な衣装に身を包み、互いに妍を競い合う令嬢たちが居並ぶ中を、エラクルは会釈を交わしながら歩き回り、ときどき立ち止まっては彼女たちと短く言葉を交わして彼女たちの容姿ばかりでなく内面の品性や心栄えを見極めようと努めた。最初に彼が目留めた際立って美しい令嬢は、自分が選ばれたと確信するや、権力を握った暁にすぐにエラクルを始末することを思い描き、それを逆に彼に見破られてしまう。夥しい数の美しい娘たちの中を歩きながら、エラクルの眼鏡に適う者はひとりもいなかった。ある者は軽佻浮薄、またある者は粗暴、別の者は虚栄心が強く、また別の者はおしゃべり好き…。さらに別の娘は傲慢で、慎み深そうに見えたまた別の娘は追従者の言いなり、という始末。結局、彼は集まった令嬢の中から誰一人選ぶことなく集会の解散を告げなければならなかった。

疲れ果てて帰途に就いたエラクルは、ローマの下町で、擦り切れたチュニックをまとった貧しい娘と出会った。彼女は元老院身分の両親を失い、今は叔母の許で暮らす境遇であった。彼は一目で彼女こそ全ての美德を備えた理想の女性であることを見抜く。エラクルは彼女の叔母に、彼女が皇妃としての輝かしい未来があることを告げた後、直ちに皇帝の許に上って探し求めていた女性が見つかったことを報告した。喜んだ皇帝は3日後に婚礼を挙げることを決めた。エラクルは花嫁衣裳の用意や高貴な賓客たちの招待など、準備万端を取り仕切った。式の当日、聖ペテロ聖堂で皇帝と新皇妃の盛大な結婚式が執り行われ、ローマの町は華やかな祝祭に沸き立った。皇帝の絶大な信任を獲得したエラクルは、その後、その高貴な出自や神の加護を受けた数奇な来歴が知られるところとなり、皇帝自身によって騎士に叙任されて、宮廷において並ぶものなき権勢を誇ることになったのである。

(2) 皇妃アタナイスの恋愛譚

物語の第2部では、エラクルは後景に退き、主役の座は皇妃に委ねられることになる。

第2部の冒頭で我々は初めて皇帝がライス Lais、新皇妃がアタナイス Athanaïs という名であることを知る。皇帝夫婦は結婚後7年³⁸にわたって仲睦まじく暮らしていた。皇妃は敬虔で寛大、貧者に多くの慈善を施し、正義を愛して弱者を守り、全ての臣民の敬愛を集めていた。

ところがあるとき、敵の攻撃を受けた国境地帯の都市を防衛するために、皇帝は急遽、出陣することが決まる。美しい妻をひとり都に残しておくことに強い不安を覚えた彼は、彼女を信じてその自由を奪わぬように、というエラクルの諫言を退けて、自分の不在中、皇妃を塔に監禁しておく、という決定を下す。彼女には監視役として12人の騎士とその奥方が付けられ、常に彼女の行動はこれら24人の監視下に置かれることになった。彼女は特別な事情がない限り、外出も外部の人間との接触も一切が禁じられたのである。

夫の不当な仕打ちに皇妃は悲嘆にくれ、夫を恨む気持ちが彼女の胸を満たした。そんなある日、彼女はおりからローマの町で開かれていた大規模な祭礼に臨席することになった。皇妃以下すべての身分の奥方令嬢がこの祭礼を観覧するのは古来からの慣行であり、皇妃の監視役たちもそれを拒むことはできなかったのである。

祭りの場では様々なアトラクションが見物客の目を捉え、若者たちは日頃鍛えた技を披露した。長太鼓、ハープ、リュート、バグパイプ、葦笛と演奏される楽器も多種多様だった。そうしたなか、アタナイスは元老院議員の息子パリデス Paridés が見事にハープを奏でる様子を目にして、たちまちこの美しい若者への恋情に襲われた。パリデスも思いは同じ。皇妃の姿を一目見た途端、彼は一瞬にして彼女に心を奪われたのである。

叶わぬ恋に憂いを深めたパリデスは心身を衰弱させて重病に陥った。彼を見舞った近所の老婆が、彼から事情を聞きだして恋の仲介役を引き受けることになる。彼女は毎年、聖ヨハネの日（6月24日）の前に1籠のサクランボを皇妃に届けるのを慣わしにしており、その用向きで皇妃を訪ねることになっていた

³⁸ ヴォルフツェッテルによれば、7という完全数は完璧な状態と符合しており、また、この幸福が非歴史的な性格を持つことを表していた。cf. F.Wolfzettel, "La découverte de la Femme dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 8, 1990, pp.35-54, p.41. なぜ7が完全数かと言えば、「4と3という対立しかつ補い合う特性をそれ自身の中に結合しており、それ自身完結し閉じられた環という完璧さを表すのに用いられる」からである。ジャック・リバール（原野昇訳）『中世の象徴と文学』青山社、2000年、34-38頁を参照。引用箇所は35頁。

のである。

翌日、易々と皇妃への面会を果たした老婆は、監視人の目を盗んでパリデスの思いを彼女に伝えた。皇妃も彼を愛していることを告白し、彼への手紙を隠したパイを老婆に託す。その手紙には2人の逢瀬を実現するためにパリデスが事前に整えておかなければならない準備の手筈が詳細に指示されていた。先の外出から8日目に当たる祭礼の最終日、皇妃は再度、行列を組んで町に出ることが予定されていた。パリデスはその日までに老婆の家の前の小さな池に水を満たし、夜半、人に知られぬように老婆の家の床下を掘って隠れ場所を作るように指示された。当日は朝からパリデスはその隠れ場所に身を潜め、老婆は籠に盛大に火を焚いて³⁹ 一行を待つことが取り決められた。

皇妃の一行が老婆の家の前を通りかかったとき、故意に気の荒い馬を選んでいた皇妃は馬から振り落とされたように装って池の中に身を投げ出した。護衛の者たちに助け出された彼女は、暖をとるために老婆の家に運び込まれる。お付きの者たちが代わりの衣装を取りに行っている間に家の中で皇妃は老婆と共に残され、アタナイスは、隠れ場所から現れた恋人と再会することができた。彼女の計略は完璧な成功を収めたかに見えたが、彼女は自分たちが犯した罪は神の目を免れられず、エラクルがきっと彼女の行状を察知して皇帝にそれを告げることを覚悟する。

事態は彼女が予知したとおりに進んだ。戦陣でいち早く彼女の変化を知ったエラクルは、皇帝にそれを知らせ、後者はすぐに遠征を中止してローマへの帰還を決めた。都に着くなり、妻の不貞をなじり、相手の男の名前を明かすように迫る皇帝に対し、アタナイスはパリデスの名を告白するが、罪は彼女一人が負うべきであり、真の愛に殉じて死ぬのは強く望むところと言いつつ放った。2人の激しいやりとりにエラクルが割って入り、皇帝に対して、そもそも今回の過ちの第1の原因は、罪もない皇妃を塔に監禁するという皇帝の誤った判断があり、もしも自分の忠告に従って、彼がそうした悪しき計画を放棄していたら今回の不幸も避けられたであろうことを指摘する。そして今は皇妃との婚姻の絆を解いて彼女に自由を返すように彼は勧告した。その発言に皇帝は抗弁することができず、彼はアタナイスとの離婚に応じ、恋人たちの結婚を許すこと、嫁資としてアタナイスの父親の資産を与えることを約束した。かくして物語の第

³⁹ 炎暑の夏のローマにおいて屋内で盛大に火を焚くのはリアリティーに欠ける、として従来、この設定は槍玉に挙げられてきた。しかし、フォーリエの考察に従えば、作者ゴージェにイタリア旅行の経験はなかったようであり(A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p.201)、こうした仔細な瑕疵に目くじらを立てるのはさして意味のあることではないだろう。あくまでも作者がイメージしていたのは、彼の故郷の北フランスの夏なのである。

2 部は、カタストロフは回避したものの、当事者たちに苦い思いを残したまま幕を閉じることになる。

(3) 聖十字架頌揚の物語

物語の第3部では、エラクルが主役の座に復帰し、すでに西欧で広く知られていた皇帝エラクル（ヘラクレイオス）の功業が叙事詩的に物語られる。

作者ゴーティエは、主人公を東方の舞台に登場させるに先立って、コンスタンティヌス大帝の母ヘレナによる「真の十字架」発見とペルシア王コスドロエ Cosdroé⁴⁰ によるその奪取を物語る。ヘレナによる「真の十字架」発見に関しては、それがユダ Judas という名のユダヤ人の助力で実現し、後者はこれを機にキリスト教に改宗してキュリアス Cyriace という洗礼名を得て後に殉教者となったこと、ペルシア王コスドロエに関しては、彼は持ち帰った十字架を自分の玉座の上部に据え、あたかも自らを神のごとく人々に崇めさせたこと、が語られているのを後の議論との関連から記憶に留めておこう。

悪逆なペルシア王はコンスタンティノーブルの皇帝フーカルス Foucars⁴¹ を奸計を用いて暗殺させる。ペルシア王の暴虐に直面し、自らの指導者を奪われたコンスタンティノーブルの有力市民たちは、後継の皇帝候補として、ローマのエラクルとアフリカ在住のもう一人の人物を選び、彼らのうちで先に到着した者に帝位を与えると宣言した。この呼びかけに応え、真っ先に到着したのはエラクルであった。コンスタンティノーブルの市民は彼を玉座に昇らせ、ここに皇帝エラクルの治世が始まる。

コスドロエ王は、エラクルを討つべく、自らの息子が率いる大軍を差し向けた。その軍は、その後、さらに西に進んでノルマンディー、フランス、フランドル地方を征服することが見込まれていた (vv.5310-5312)⁴²。キリスト教世

⁴⁰ その歴史上のモデルは、ササン朝ペルシアの王ホスロー2世（在位 590-628）である。彼は、ビザンツ皇帝マウリキオス（在位 582-602）の軍事援助でペルシア王位を確保したため、当初はビザンツの同盟者の地位にあったが、マウリキオスの失脚に乗じ、ビザンツ領に侵攻、エジプト・シリアを占拠、イェルサレムから「真の十字架」を奪い、配下の軍勢はバルカンのアヴァール人と連携して帝都コンスタンティノーブルに迫った。cf. W. E. Kaegi, "Chosroes II", in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p.432.

⁴¹ モデルはビザンツ皇帝フォーカス（在位 602-610）。彼は反乱軍の首領としてマウリキオス帝を打倒し、権力を掌握したが、その後、北アフリカから進軍してきたヘラクレイオスの軍勢によって今度は彼自身が帝位を追われることになった。

⁴² ノルマンディーとフランスが併記されているところから見て、ここでの「フランス」が、カペー王家の本拠が置かれていた、いわゆるイル・ド・フランスの意味で用いられていた

界全体が存亡の危機に瀕していたのである。

天使に敵の大軍の来襲を告げられたエラクルは軍勢を召集し、全軍の先頭に立って出陣する。2つの軍はドナウ川を挟んで向かい合った⁴³。軍議の場でエラクルは、数的に優勢な敵に会戦を挑むよりも、自分が敵の大將に一騎打ちを申し入れ、それによって2つの軍の命運を決するべきであると提案し、諸將の合意を得る。エラクルからの使者の申し入れにコスドロエの息子は応じ、両軍の見守るなか、両人は武装を整え、ドナウ川に架かる橋上に歩み出た。エラクルは屈強な軍馬にまたがり、かつてコンスタンティヌス大帝が携えていた名剣を帯びていた⁴⁴。

橋の中央で両人は激しくぶつかり合い、互いの意地と名誉と信仰を賭けた戦いが繰り広げられた。エラクルは神に祈りつつ戦い、最後に敵を切り伏せて勝利を制する。戦いの決着を受けて異教徒の軍勢 10 万が洗礼を受け、これを拒んで逃亡を図った 2 万の兵は新しいキリスト教徒の軍勢によって殲滅させられた。直ちにエラクルの軍勢はペルシアへ進軍を開始し、キリスト教への改宗を拒むコスドロエは処刑され、「真の十字架」は本来の持ち主の手に復したのである。

異教徒との戦いを制し、「真の十字架」を取り戻したエラクルの軍勢は意気揚々とイェルサレムに凱旋する。黄金 100 オンス⁴⁵ 以上の価値を持つ栗毛のスペイン馬にまたがったエラクルは絹の衣装に身を包み、白テンの毛皮で裏打ちしたマントを羽織って、右手に十字架を掲げていた (vv.6124-6139)。ところが、一行が、かつてキリストがイェルサレムに入城したときに用いたのと同じ「黄金門」から町に入ろうとしたとき、突然、異変が起きた。城壁の壁が左右から伸びて門を覆い、彼らの通行を阻んだのである。天使が現れ、エラクルの

ことが分かる。要するに、ここで作者の念頭にあるのは、彼の生活圏である北フランス一帯であり、おそらく彼にとってそこが西欧世界の中心部を意味していたのであろう。

⁴³ F.Wolfzettel, "La recherche de l'universal. Pour une nouvelle lecture des romans de Gautier d'Arras", p.120 は、ドナウ川を挟んでビザンツ軍と異教徒の軍勢が対峙する、という状況は、物語の同時代のペチェネグ人の侵攻を想起させるものだと語っている。あるいは、別の見方として、ササン朝ペルシアと同時期にバルカンにおいて帝国に深刻な脅威を及ぼしていたアヴァール人の勢力を、同じ異教徒の軍勢として作者がペルシア軍と混同していた、と解釈する余地もありそうである。

⁴⁴ ヘラクレイオスを、最初のキリスト教皇帝コンスタンティヌスの偉業を再現する「新しいコンスタンティヌス」として描き出そうとする指向性の名残をここに感じ取ることができそうである。cf. J. W. Drijvers, "Heraclius and the *Restitutio Crucis*: Notes on Symbolism and Ideology", pp. 181-184.

⁴⁵ パリの旧リーブリの 16 分の 1 と考えて、1 オンス = 30.59g。それゆえ 100 オンスで黄金約 3.06kg になる。

傲慢を責める。勝利の栄光は汝にそれを授けた神に帰するのであり、神の子が自らを貶めてロバに乗ってくぐった門をそのような華やかな装いで通ろうとするのは傲慢も甚だしい、というのである。エラクルは深く恥じて豪華な衣装を脱ぎ捨て、それらを貧者に与え、自らは毛織の粗衣をまとして神の赦しを祈った。そのとき再び奇蹟が起きる。塞がった壁が左右に退き、門が旧に復したのである。歓喜の念を胸にエラクルはイエルサレムに入城を果たし、「真の十字架」を主の墳墓に再び据えたのであった。

作者ゴーティエは、この出来事が9月14日の十字架頌揚の祭日の起源を成したこと、コンスタンティノーブルに戻ったエラクルがその後、善政を敷き、死後、彼の墓の上に彼の騎馬像が建立されたこと、右手を異教徒の地の方角にまるで威嚇するかのように差し伸べたその像は、今もコンスタンティノーブルを訪れる者は目にすることができること、を語って物語を結んでいる⁴⁶。

IV 情報源の探求

以上、一見して分かるように、『エラクル』には種々雑多な説話や伝承的な要素が集積されており、それらが作者の手で巧みに組み立てられて皇帝エラクル（ヘラクレイオス）の架空の一代記の体裁を整えられているのである。以下では、主に博覧強記のフリーエの研究⁴⁷に拠りつつ、作者ゴーティエがいかなる情報源からこれらの話題を取材したのか究明する作業に取り組みたい。

一連の情報の中では、物語の第3部に当たるエラクルの「真の十字架」奪回の説話の取材源を見出すのは比較的、容易なことだろう。聖十字架発見（5月3日）と同頌揚（9月14日）の祭日の来歴を説明する講話は、カソリック教会の典礼用朗唱集の中に収録されており、その種の作品は、9世紀のラバヌス・マウルスを嚆矢とし、12世紀のオートンのホノリウスの信仰手引書を経て、13世紀のヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』に至るまで、連綿と西欧社会の中で書き継がれてきたからである。作者ゴーティエに残されていた作業は、ラテン語で書かれたそれらの講話を俗語に書き改めることだけであった。その際にゴーティエは、テオファネスの年代記を9世紀にラテン語に訳したアナス

⁴⁶ テキストではこの後に、作者によるシャンパーニュ伯妃マリーとエノー伯ボードゥワンへの謝辞、エノー伯へこの物語を献呈する旨を記したエピローグが付されている（vv. 6515・6570）。

⁴⁷ cf. A. Fourrier, *Le courant réaliste*, pp. 210-257.

タシウス・ビブリオテカリウス⁴⁸の歴史叙述を、ヘラクレイオスの生涯を描くための補足情報を得るために参照したらしい。ただし、そこから得られた情報の一部を、ゴーティエは、自己の物語の筋書きに適合するように改変していることも看過してはならない。フーリエ⁴⁹と共に、改変箇所を確認しておけば、それは以下の3つのポイントである。①史実ではフォーカス帝はヘラクレイオスによって打倒されるのであるが、物語ではコスドロエ王の手で暗殺される点になっている。作者が、主人公の手を先帝の血で汚すことを嫌ってこうした改変を施したことは間違いない。②ヘラクレイオスは史実では北アフリカのカルタゴから帝都を目指して出陣しているのに対して、物語では彼の出発地がローマになっていること。これは、後に述べる議論とも関連するが、実際にはコンスタンティノープルを舞台としていたテオドシウス2世と皇妃エウドキアを巡る説話をコンスタンティノープル以外の場所に移す必要に迫られ、ボスフォラスの畔の帝都を除けば、皇帝の宮廷所在地としては、ローマ以外に適当な場所が見出せなかったことが最大の理由であろう。これに加えて、作者ゴーティエの生きた12世紀当時、北アフリカはイスラム勢力の支配下にあったから、そうした異教徒の領国を彼の生誕の地とするのは作者にとって気乗りがしなかったことも一因かもしれない。いずれにしても、主人公の聖性を強調する上で、ローマ教会のお膝元の出自とした方が数段、彼の威光を増大させる効果を有したことは明白である。③コンスタンティノープル市民が皇帝の二重選挙を行い、先に帝都に到着した方に帝位を授けると決定している点。これは、フォーカス帝打倒の兵を北アフリカで挙げるにあたり、ヘラクレイオスは海路、その僚友のニケタスはエジプト経由の陸路でコンスタンティノープルを目指し、先に権力奪取に成功した方が皇帝位を得ることが両人の間で約定された、という史実⁵⁰を改変したものであり、作者が行為の主体を帝都市民に改めている点が注目される。この点は、作者の選挙王制への共感を窺わせる箇所として注目される。この問題に関しては後にもう一度、議論されることになるだろう。

⁴⁸ 9世紀ローマ教皇座における最大のビザンツ通の高位聖職者。ローマにおいて「スラヴ人の使徒」キュリロスとメトディオスを庇護し、870年のコンスタンティノープル公会議に西方教会を代表して参加した。また、神学書を中心に多くのギリシア語文献をラテン語に訳出していることでも知られている。cf. M.McCormick, "Anastasius Bibliothecarius", in A.Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p.88f.

⁴⁹ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 240f.

⁵⁰ Theophanes, *Chronographia*, ed., C. de Boors, 2vols, Leipzig, 1883-1885 (rep.Hildesheim, 1963), vol. I, p.297; C.Mango and R.Scott ed., *The Chronicle of Theophanes Confessor. Byzantine and Near Eastern History AD 284-813*, Oxford, 1997, p.426.

さて、物語の第3部に関して以上の点を確認した上で、以下では物語の前半部分に関して順を追って、やや詳細に検討を進めてゆくことにしたい。

(1) 主人公の誕生と神からの贈与

長年、子供のできなかつた夫婦の願いを神が聞き届け、選ばれた子が生まれる、というモチーフは、新約聖書の洗礼者ヨハネの出生を思い出させる（ルカⅠ,5-66）。けれども、『エラクル』に見られるような懐妊に至るための儀式だった手続きは洗礼者ヨハネの出生譚には認められない。それゆえこの部分については、作者のゴーティエは別の情報源から着想を得たことになる。フリーエは、それをビザンツの典礼に由来すると考えている⁵¹。

ここでもう一度、主人公の懐妊の過程を確認しておこう（vv.115-218）。

カシーヌは床に豪華な絨毯を敷き、その上に絹の掛け布を置いて横たわる。この布は、翌日、聖霊のミサ中の教会に奉納することが定められていた。次いで夫のミリアドスは最も美しいマントに身を包んで妻と結ばれ、彼女は選ばれし者を懐妊したのである。

フリーエは、以下のようなビザンツ教会の典礼上の慣行が、こうした一連の所作のヒントになったと想定している。まず、聖ソフィア聖堂で執り行われた典礼⁵²において、皇帝は至聖所に入ると、祭壇布で覆われた祭壇上で香を捧げ、そこに奉納物、特に絹の薄布を安置し、広げられたその布の上で聖祭が祝われる。この場合、絹の掛け布は、敷物（祭壇布）が神聖な空間に触れないようにするための遮断機能を果していると考えられる。他方、ローマ教会の奉納式に相当する儀礼の場では、司式者は、聖杯と聖体皿をゆつたりとした薄布で覆うのが通例であった。このように見れば、絨毯を覆った絹の掛け布の上で、さらに大きなマントに包まれてなされたエラクルの懐妊は、ビザンツ教会の祭壇上で執り行われたキリストの身体の神秘的な再生の営みと平行関係にあることが分かる。こうした演出は、生まれる子供が神から遣わされ、将来、救世主たる運命を定められていたことを印象付ける意味をもったに違いない。

子供が生まれると神から手紙が届けられた。フリーエによれば、天上から手紙がもたらされるというモチーフは「中世の精神には身近な思想」であった⁵³。たとえば、第1回十字軍の際に隠者ピエールはこの種の手紙を人々に示し

⁵¹ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 240f

⁵² 聖ソフィアで皇帝が行った儀式の概容は、G.Dagron, *Emperor and Priest. The Imperial Office in Byzantium*, Cambridge, 2003, pp.84-95 を参照。

⁵³ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 234.

たという。それゆえゴーティエ・ダラスがこの箇所を執筆するにあたっては、特定の典拠を求める必要はなかったと思われる。

では、その手紙の中で神がエラクルに授けることを約束した3つの才能（宝石、馬、女性の真価を見抜く能力）に関してはどうか。フーリエは、民間説話にこれと共通する構成の類話があること⁵⁴を指摘し、それらが東方から伝来した説話に由来すると考えている⁵⁵。そうした物語は、奴隷に身を落とした主人公が主人の持つ宝石、馬、それに主人の妻や婚約者、あるいは主人自身の本質、しばしばそれらに隠された欠陥、を見抜き、主人の信頼を得る、というのが基本的なパターンである。そこにおいて特別な才能を備えた主人公は、主人のもつ宝石の中に蛆虫がいること、彼の軍馬には生来の欠陥があること、彼の妻（婚約者）は低い家柄の出自であること、さらには主人自身が彼の母親と卑しい身分の男（パン屋、料理人、下僕など）との間に生まれた不義の子だったことを告げるのである。

そうした類話の中で、『エラクル』の物語と最も類似したものとしてフーリエが挙げているのがチュニス写本版『千一夜物語』（1731）の第891夜に収録された「王とその息子の話」である⁵⁶。以下、フーリエの要約に従って、その話の筋書きを再録しておこう⁵⁷。

ある国の王が非常に高齢に達してから一人の男子に恵まれた。美しさと聡明さにおいて彼を凌ぐ者はなかった。王子が青年期に達すると、老王は王位を息子に譲り、自分は俗世を捨てて隠者となり、神に身を捧げることを決意する。ところが父王の計画を耳にした息子は自分も父と行動を共にすることを強く主張する。かくして父子2人の隠者生活が始まった。

ところが、しばらくすると慣れぬ耐乏生活に2人の俄か隠者はすっかり困窮してしまっ

⁵⁴ たとえば、13世紀末にイタリアで成立した説話集『ノヴェリーノ』第3話(*The Novellino or One Hundred Ancient Tales. An Edition and Translation based on the 1525 Gualteruzzi editio princeps*, Edited and translated by J. P. Consoli, New York & London, 1997, pp.18-21. 舞台は「ギリシアのフィリップ（フィリポス2世？）王の宮廷」とされている）やビザンツ末期の寓話文学『プトコレオン』(cf.H.・G. Beck, *Geschichte der Byzantinischen Volksliteratur*, München, 1971, S.148-150)に同種の物語が収められている。

⁵⁵ *ibid.* pp.216-219.

⁵⁶ 邦訳の3種の『千一夜物語』、すなわち、筑摩世界文学全集版（パートン版、佐藤正彰訳、1964-1970年）、岩波文庫版（マルドリユス版、豊島与志雄他訳、1988年）、平凡社東洋文庫版（カルカット版、前嶋信次・池田修訳、1966-1999年）のいずれの該当箇所にも、この説話は収録されていない。

⁵⁷ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p.217f.

子に提案する。息子が、若い自分の方が買い手に事欠かないだろうから自分の方が奴隷になろう、と言い張ったのに対して、父は、もしもそうなれば、買い主は息子に重労働を課すだろうが、老人の自分ならばそうなるまい、と語って当初の言い分どおり、老人が市場で売られることになった。

予想されたように老人にはなかなか買い手が見つからなかったが、宝石と馬と人についての知識があることを売り文句に、結局、ある君侯の料理人に100ドラクマで買い取られた⁵⁸。老人は奉公先の君侯の宮廷でその能力を発揮し、君侯の持つ2つの真珠のうち、どちらが良質か（一方の中には虫が入っていた）、2頭の馬のうち、どちらが優れているか、を見抜き、さらには君侯自身が実はパン屋の息子であることをも見通した。人がそれをどこから知ることか尋ねると、老人の返答は「私はそれを星座と月のしるしの中に見るのです」というものだった。君侯はこの賢者の才知を称え、彼を贈物で満たしたという。

フーリエが指摘しているように、この説話は、①導入部において宗教的着想が示されていること（老王の俗世離脱、隠者となって神に身を捧げるという決意）、②息子が自分を奴隷として売るよう親に迫っていること、③奴隷は君主自身でなく、その家来の一人に購入されていること、④主人公の才能の開示は、少なくとも宝石と馬に関しては、欠陥の暴露ではなく、間接的にその質を示す、という形をとっていること、の諸点において『エラクル』と共通する特徴を示していた⁵⁹。作者ゴーティエが、直接、この説話から彼の物語の題材を得たと断定することはできないが、2つの物語の明白な類縁性を勘案すれば、彼がこれに類する説話から着想を得ていたことは否定の余地はないだろう。

ただし、今回の説話では主人公が老人であることもあってか、『エラクル』のように主人公が自らの身命を賭けて自分の持つ能力を証明してみせる場面が欠けている。そうした場面については、別の情報源を想定する必要がある。

（2） 3度の試練

『エラクル』において、主人公は、神から授けられた才能を証明するために、宝石、馬、女性の真価を見極めてみせるよう皇帝に命じられる。皇帝はそのためにより宝石と馬の大規模な市を開き、全国から美女を集めた。前2者に関しては、その当時から活況を示しつつあったシャンパーニュの大市の情景から作者は

⁵⁸ フーリエは、ここでドラクマという貨幣単位が用いられていることを、この説話がギリシア起源であることの証拠と見なしている。 *ibid.* p.218, n.157.

⁵⁹ *ibid.* p.218.

着想を得ていた、いう説⁶⁰がある一方で、それらのいずれの場面にも、ビザンツの華やかな都市文明、爛熟した東方的情趣を作品にまとうせようとする作者の意向を読み取ろうとする見解も提示されている。たとえば、宝石市の場面は、コンスタンティノーブル都心のコンスタンティヌス広場において両替商が金貨や宝石を山積みしている情景⁶¹が、そして競馬競走の場面は、有名な帝都のヒッポドロームにおける盛大なレースの模様⁶²が、容易に連想されるというのである。皇帝の花嫁を選ぶ一種の美人コンクールに関しては、ビザンツにおいて後述するテオドシウス2世の皇妃選び以来、10世紀に至るまで断続的にその種のイベントがなされたことが知られている⁶³。集まった美女たちの中をエラクルが歩き回り、会話を交わしてゆく場面など、年代記から知られるテオフィロス帝（在位 829-842）の花嫁選び中のエピソード⁶⁴を彷彿とさせるものがあると言えるだろう⁶⁵。

そうした中で、主人公が、自分の見出した宝石の効験を立証するために自ら水、火、武器の試練に立ち向かう挿話は、異彩を放っており、単純にビザンツの風物や歴史的事象に結び付けることはできそうにない。ところが、これに関しても、モデルとすべき逸話が存在したことをフリーエがつきとめている⁶⁶。それは、キリスト教迫害時代に殉教した聖コスマスと聖ダミアノスの説話であ

⁶⁰ cf. F.A.G.Cowper, "Gautier d'Arras and Provins", *Romanic Review*, 22, 1937, pp.291-300, esp. p.295f.

⁶¹ cf. Robert de Clari, *La conquête de Constantinople*, éd., P.Lauer, Paris, 1924, p.89; Robert of Clari, *The Conquest of Constantinople*, tr. by E.H.McNeal, New York, 1936 (rep. Toronto, 1996), p.110.

⁶² 12世紀当時のヒッポドロームにおける競馬や祭典については、さしあたり、拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年、115-128頁を参照。また、これに先行する馬市の場面は、ビザンツ史の視点から見れば、有名なテサロニケの聖デメトリオスの定期市の情景を想起させる。cf. Pseudo-Luciano, *Timarione*, ed., R.Romano, Napoli, 1974, pp.53-55; *Timarion*, tr. by B. Baldwin, Detroit, 1984, p.44f.

⁶³ cf. W.Treadgold, "The Bride-Shows of the Byzantine Emperors", *Byzantion*, 49, 1979, pp.395-413; Id., "The Historicity of Imperial Bride-Show", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 54, 2004, pp.39-52; 井上浩一「ビザンツ専制国家体制の確立と皇妃コンクール」、水林彪・金子修一・渡辺節夫編『王権のコスモロジー』、弘文堂、1998年、308-338頁

⁶⁴ 井上浩一氏の前掲論文（註63）315-316頁に、テオフィロスとこの集会に参加した娘の一人カッシアとの対話が再録されている。

⁶⁵ これ以外にも、皇妃アタナイスが参観する祭礼の様子は、騎士道ロマンスによくあるような馬上槍試合ではなく、一連のスポーツ、音楽、舞踊の実演会であり、完全にビザンツの伝統に合致するものであったことをフリーエは指摘している。cf. A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 242.

⁶⁶ *ibid.* p. 245.

った。以下にこの話のあらましを記しておこう⁶⁷。

ディオクレティアヌス帝の治下、キリキア地方アイガイの町に暮らすコスマスとダミアノスの兄弟は敬虔なキリスト教徒であり、また優秀な医者として無償で医療を施し⁶⁸、多くの人々を癒していた。その噂を聞きつけた総督は、彼らを呼び出し、彼らがキリスト教の信者であり、皇帝への供儀を拒むのを見て、彼らを他の3人の兄弟と共に処刑することを決意する。最初に5人の兄弟は互いに鎖で縛られて海に沈められた。ところが天使が彼らを助けたので彼らは一人も溺れることなく無事であった。次に総督は彼らを燃え盛る炎の中に投じたが、彼らの誰一人として傷付いた者はいなかった。続いて総督は彼らを石打ちの刑に処すよう命じたが、石は途中で方向を転じて投げた者たちの方に降り注いだ。さらに彼らに矢を射掛けたところ、同じように矢は射手たちを散々に傷付けたのである。万策尽きた総督は、翌朝、これら5人の兄弟を斬首刑に処したという。

総督が繰り出す数々の攻め手をことごとく退けた聖者たちが、最後にあっけなく斬首されてしまうのは現代人の目にはいささか奇異に映るかもしれないが、そもそもこの逸話の主人公は殉教聖者なのだから、殉教しなければ話が完結しないわけで、話の結末としては他の選択肢はありえなかったのである。

ともあれ、この聖コスマスと聖ダミアノスの説話と『エラクル』の水、火、武器の難から持ち主を守る宝石の説話の筋立てが、著しく似通っているのは明白であろう。ただ、前者に登場する石打ちと矢の挿話が後者では省略され、前者の斬首の場面を連想させる剣による試練を後者の主人公が克服している、という点が小さな差異を成しているだけである。それでは、なぜ作者のゴーティエは、この殉教説話のモチーフを彼の物語の主人公をめぐる挿話に取り入れたのであろうか。こうした疑問は、次に語る皇妃アタナイスの説話との関連を語るなかで解き明かされることになるろう。

(3) 皇妃アタナイスの説話

皇帝ライスと皇妃アタナイス、それに元老院議員の息子パリデスの三角関係の物語が、6世紀後半の年代記作家ヨハネス・マララスの伝えるビザンツ皇帝テオドシウス2世（在位 408—450）と皇妃エウドキア、そして皇帝の親友パ

⁶⁷ 邦語では、ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』第3巻、478—484頁においてこの説話を読むことができる。

⁶⁸ そのために彼らは、アナルギュロイ（アルギュロス「銀」「貨幣」に否定の接頭辞 a が付いた形の複数形、「代価なしで（診療する人）」の意）という異名で呼ばれたという。

ウリヌスをめぐるそれ⁶⁹を原型にしていたことは衆目の一致しているところである。そのことは何よりも、『エラグル』の皇妃の名アタナイスが、皇妃エウドキアの結婚前の名前と同じであることから裏付けられるであろう。以下にマラルスの記述に従って、この挿話の概容を示しておこう。

皇帝テオドシウス2世は青年期に達するに及んで結婚を望み、彼の姉で摂政を務めていたブルケリアは四方に使者を送って美しく高貴な娘たちを探し求めさせた。たまたま同じ頃、アテネの哲学者レオンティオスの娘アタナイスが、兄弟たちによって父の遺産相続から排除されたことに憤慨し、訴訟を起こすために都の叔母を頼ってコンスタンティノープルに上がっていた。彼女は摂政ブルケリアに面談を求め、後者に自己の言い分を申し立てる機会を得た。アタナイスの美貌と見事な話し振りにブルケリアは魅了され、彼女が弟の花嫁に相応しい女性であることを確信する。二人の2度目の面談の際には、テオドシウスも親友のパウリヌスと共にカーテンの背後で身近に彼女の容貌に接した。若き皇帝はすっかり彼女を気に入り、妃に迎えることを決めた。アタナイスは結婚を機にキリスト教に改宗し（彼女はそれまで異教徒だったのである）、エウドキアと名を改めた。その後、彼女は敬虔で学識豊かな皇妃として名を馳せることになった。

ある年のクリスマス、皇帝は元老院の一行を引き連れて帝都内の教会に参詣した。このとき、病気のパウリヌスは同行を免除されていた。通りで一人の貧者が進み出て、フリュギア産の巨大な林檎を皇帝に献上した。この珍しい贈物に皇帝は喜び、多くの謝礼を貧者に与えた上で、林檎を直ちに皇妃の許に届けさせた。それを受け取った皇妃は、これを病のパウリヌスへ見舞いの品として送り、その品の由来を知らぬパウリヌスは、それを皇帝の許に届けさせ、かくして巨大な林檎は一巡して皇帝の許に戻ることになる。皇妃とパウリヌスの仲に疑念を抱いた皇帝がエウドキアに林檎の所在を尋ねると、彼女はすでに食べてしまったと白を切ったが、皇帝が当の林檎を出して見せるに及んで嘘をついたことを認めざるを得なかった。皇帝はエウドキアに対して離別を宣言する。パウリヌスには死罪に処すことが宣告された。エウドキアはイェルサレムに隠遁し、そこで没することになるが、最後までパウリヌスとの関係については潔白であると言いつけていたという。

⁶⁹ Ioannes Malalas, *Chronographia*, ed. H. Thurn, Berlin, 2000, pp. 272-278; *The Chronicle of John Malalas*, translated by E. Jeffreys, M. Jeffereys and R. Scott, Melbourne, 1986, pp. 191-195. この逸話の概容は、井上浩一『ビザンツ皇妃列伝－憧れの都に咲いた花－』、17-20頁から得られる。

以上が、マララスの伝えるテオドシウス2世と皇妃エウドキア、それに廷臣パウリヌスの物語である。皇帝宮廷に縁故を持たぬ身寄りもない娘がその美貌と才知で皇帝の後見人の信頼を獲得し、皇帝の花嫁に迎えられる、という前半のストーリーが両者に共通しているのは一目瞭然であろう。ところが、後半部の大きな林檎をめぐる物語は、『エラクル』の中では姿を消し、その代わりに皇妃とパリデスの姦通事件がそれにとって代わることになる。なぜ物語はこのような変化を遂げることになったのだろうか。この問題を考えるにあたっては、両者を繋ぐ位置を占めた中間的な形態の説話の存在を考慮に入れることが必要になる。ここで問題となるのは、コンスタンティノーブルの様々な名所旧跡の来歴を集めて10世紀頃に成立したとされる『パトリア』と総称された説話集の中に、ある教会の建立譚として収められている物語である⁷⁰。

皇帝テオドシウス2世の治下、彼の友人パウリヌスは金角湾の奥、ブラケルナエ地区の近くにひとつの教会を建設していた。あるとき、聖ソフィアに参詣中の皇帝は大きなフリュギア産の林檎を献上され、それを皇妃の許に送り届けさせた。たまたま皇妃の許を訪ねていたパウリヌスは林檎を見て賛嘆の声をあげる。以前から彼に好意を抱いていた皇妃はその林檎を彼に贈物として手渡した。例によって事情を知らぬパウリヌスはそれを皇帝に献上する。2人の仲を疑った皇帝は妃を呼び出し、林檎の所在を尋ねた。皇妃はそれをパウリヌスに与えたことをあっさりと認め、皇帝は不機嫌な面持ちで彼女を追い返した。

気持ちのおさまらない皇帝は、パウリヌスが宮殿に出頭した折に密かに彼を襲わせ暗殺する計画を練る。宮殿の暗がりではパウリヌスは刺客の襲撃を受けるが、耳を切られただけで辛うじて危難を脱した。彼が命拾いをしたのは、彼が教会を建立して奉獻しようとしていた聖人が、彼にその仕事を仕上げる時間を与えることを望んだためであるという。計画の失敗を知った皇帝は何食わぬ顔で友に接していたが、その後、考えを改め、彼に教会を完成させるのに十分な時間的猶予を与えた後に公衆の面前で彼を斬首させた。失意の皇妃は聖地に隠遁することになった。パウリヌスが精魂を尽くして建立したこの教会堂こそが、コンスタンティノーブルの城壁の北に位置する聖コスマスと聖ダミアノスに捧げられた教会だったのであり、それは、彼の名にちなんでパウリナという異名を帯びたという⁷¹。

⁷⁰ Th. Preger ed., *Scriptores originum Constantinopolitanarum*, Leipzig, 1901-1907 (rep.1975), I, pp. 261-263; A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 244.

⁷¹ C. マンゴによれば、この教会の創建者はテオドシウス2世の親友のパウリヌスではなく、5世紀後半の篡奪者レオンティオスの母親パウリナに帰すべきであるという。しかし、

ここにおいて我々は、聖コスマスと聖ダミアノスの説話とテオドシウス2世夫妻の姦通疑惑事件の接点に到達することになる。聖コスマスと聖ダミアノスの聖堂（しばしば、これを縮めて「コスミディオ」の名で知られていた）は、11世紀中葉に皇帝ミカエル4世（在位1034-1041）によって大規模な増改築が施されていた⁷²から、12世紀当時にもその威容を留めていたと思われる。第1回十字軍の際、ゴドフロア・ド・ブイヨンの軍勢は、当時、修道院になっていたこの教会の近くに設営したと伝えられている⁷³ので、その存在は十字軍に参加した諸侯を通じて西欧世界にも知られていたに違いない。想像をたくましくすれば、ゴージェ・ダラスが十字軍帰りのフランスの騎士から、途中に立ち寄ったコンスタンティノーブルの土産話として、殉教者兄弟の説話とパウリヌスと皇帝夫妻をめぐる逸話の双方を、同時に耳にしている様子を思い描くこともできるだろう。

『パトリア』版の説話は、マララスが伝えるそれと比べて、以下の3点にわたって大きく変容を遂げていることが分かる。すなわち、①エウドキアがパウリヌスに愛を感じていたことが明示されていること、②パウリヌスがエウドキアの許を訪ね、2人の間に直接、会話が交わされていること、③彼女は林檎をパウリヌスに与えたことを率直に皇帝に伝えていること、である。とりわけ、マララスでは冤罪として強く示唆されているパウリヌスと皇妃との姦通を、皇妃が胸の中でそれを望んでいたかのようにここでは描かれていることに注目したい。これは、フーリエが指摘しているように、民衆の想像力が元の話に絶えず作用を及ぼした結果と考えられる⁷⁴。まさしく、そうした人々の思考の延長線上に、皇妃と若い恋人との密通が実現する『エラクル』の筋書きが成立したと考えることができるのである。

ここでは、現実には誰がそれを創建したかは問題ではない。『パトリア』に語られているごとく、後代の人々はこの教会を篡奪者の母ではなくテオドシウス2世の友、パウリヌスの記憶と結び付けて語り継いできたことこそが銘記されるべき事実なのである。cf. C. Mango, "On the Cult of Saints Cosmas and Damian at Constantinople", in *Θυρία στη μνήμη της Λασκαρίνας Μπούρα*, Athens, 1994, pp.189-193; cf. E. McGeer, J. Nesbitt & N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art*, vol.5, Washington, D.C., 2005, p. 82.

⁷² Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E. Renauld, 2 vols, Paris, 1928 (1967), p.83f; R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin, I: Le siège de Constantinople et le patriarcat œcuménique, 3: Les églises et les monastères*, 2 éd., Paris, 1969, pp.286-289.

⁷³ Anne Comnène, *Alexiade*, éd., B. Leib et P. Gautier, 4 vols, Paris, 1937-1976, vol.2, p. 220.

⁷⁴ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 245.

ここで改めて、『エラクル』において、テオドシウス2世夫妻をめぐる原話から大きく改変されている箇所を確認しておこう。

まず第一に、物語の設定となる時間と空間が大きく変えられていた。物語の舞台はコンスタンティノープルではなくローマであり、皇帝夫妻はエラクル（ヘラクレイオス）の同時代人だから7世紀に生きたことになる。さすがに作者のゴーティエも、テオドシウス2世とヘラクレイオスが同時代人でないことは承知していたのだろう。舞台をティベルの畔の都に移すと同時に、皇帝の名をライス、皇妃の恋人の名をパリデスと改め、原話の痕跡を隠すのに腐心している。皇帝の名の由来について、フリーエは、「韻を踏むために求められたものであり、おそらく『テーベ物語 Roman de Thèbes』⁷⁵に登場するライウス Laius から着想を得たのだろう」と語る⁷⁶。これに対してパリデスの名は、ラテン語のパリス Paris の属格形パリディス Paridis に由来する、というのがフリーエの見立てである⁷⁷。なぜパリスかと言えば、言うまでもなく災厄をもたらす林檎の連想から、有名な「パリスの審判」の故事が想起されているからである。復讐の女神が投じたヘスペルデスの黄金の林檎をめぐる3女神の争いに裁定を下すことを託されたトロイアの王子パリスは、絶世の美女を授けるというヴェヌス（アフロディテ）の申し入れを受けて彼女を勝者と認め、黄金の林檎を彼女に与えた⁷⁸。その結果、ヴェヌスの助力で彼はスパルタの王妃ヘレネを連れ去り、それがトロイアの滅亡をもたらす大戦争の発端となったのは広く知られている通りである。女神たちの争いの審判役を委ねられたとき、パリスがフリュギアで羊飼いをしていたことにフリーエは注目する。教会に参詣途上のテオドシウス2世に捧げられた巨大な林檎はフリュギア産だったことを想起しなければならない⁷⁹。また、これはこれまで誰も指摘してこなかったことだが、トロイアのヘレネが名前の類似性からコンスタンティヌス大帝の母ヘレナへの連想を誘い、イェルサレムにおける「真の十字架」発見で名を残す後者から、聖地に長く滞在し、同地の多くの教会や史跡に名を刻んでいたもう一

⁷⁵ スタティウス『テバイス』の翻案作品。1150年頃成立。12世紀中葉に登場する一連の古代模倣の物語のひとつ。ベディエ・アザール共編（辰野隆・鈴木信太郎監修、杉捷夫他訳）『中世文学I』（フランス文学史 第1巻）、創元社、1942年、99-100頁を参照。

⁷⁶ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 227.

⁷⁷ *ibid.* p. 223f.

⁷⁸ この故事がビザンツでもよく知られていたことは、前述したテオフィロス帝のお妃選びのコンテストの際に、皇帝が黄金の林檎を持ち、それを意中の女性に手渡すことで選考の結果を明らかにした、という挿話からも確認できる。前掲の井上浩一「ビザンツ専制国家体制の確立と皇妃コンクール」315-316頁を参照。

⁷⁹ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 223.

人のビザンツ皇妃エウドキア⁸⁰へと連想の輪が繋がっていった、と空想することもできるかもしれない。

さて、『パトリア』では胸に秘めた思いに留まった皇妃の恋心は、『エラクル』では現実の密通事件に発展する。これは重大な飛躍であり、そのために作者は大きく物語の枠組みを改変しなければならなかった。まず、密通が実現するためには、皇帝が都にいるのは不都合だったから、彼は長期の遠征に出かけることになり、都から追い払われた。次に作者は、季節をクリスマスから聖ヨハネの祭日（6月24日）の頃へと移動させた。恋人の出会いの場となる公的な祝祭は、冬よりも夏の方が相応しかったからである。それに伴って、本来の説話では中心的な役割を果たした林檎は季節外れの果物として姿を消す。このことは作者にとって、原話の痕跡を消すのに好都合だったことだろう。林檎に代わって、この季節に相応しいサクランボが小道具に登場した⁸¹。

パリデスとの逢瀬を実現するためにアタナイスが考案した術策は、作者のオリジナルではなく、一般に「汚辱の洗水盤 *le bénitier d'ordure*」と呼ばれる、中世の笑話文学に頻出する主題であることをフォーリエが指摘している⁸²。そこにおいて、貴婦人はわざと泥水の中に飛び込み、衣服を乾かすとか、着替えを取りに行かせるという名目で部屋の中に閉じこもり、そこに前から隠れていた恋人との密会を楽しむのである。『エラクル』の現代仏語訳の序文で C.ピエールヴィルが指摘しているように、道徳的墮落を象徴する泥水の中に皇妃が転落しているのは、彼女の徳性の失墜を意味するものと理解しなければなるまい⁸³。

結局、事件が露見した後、皇帝はエラクルの助言を容れて、皇妃と離別した上で彼女がパウリヌスと結婚することを許す。愛し合う者同士が厳しい試練の果てに正式に結ばれる、という結末は、一見したところではハッピーエンドのように見えるが、この幕切れを包む空気は重苦しい。皇帝ライス是最愛の妃を失った。N. J. レーシーが指摘するように、そこにエラクルの天賦の才を信じ

⁸⁰ *ibid.*p. 237. に聖地におけるエウドキア所縁の史跡が列挙されている。同地で彼女は「新しいヘレナ」と呼ばれていたという。

⁸¹ サクランボは林檎よりは小粒だが、それと同様に赤く球状の果物として中世の伝承では性的な象徴性を帯びたという。cf. F.Petrinas, *Sailing to Byzantium: The Byzantine Exotic in Medieval French Literature*, Ph.D.thesis, The City University of New York, 2004, p.174. なお、ビザンツ民衆文学における林檎のシンボリズムに関しては、A.R.Littlewood, "The Erotic Symbolism of the Apple in Late Byzantine and Meta-Byzantine Demotic Literature", *Byzantine and Modern Greek Studies*, 17, 1993, pp.83-103 を参照。

⁸² A.Fourrier, *Le courant réaliste*, pp. 229-232.

⁸³ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p.19

ることができず、そのために段階的に次第に重い懲罰を課される皇帝の姿を認めることもできるだろう⁸⁴。一方、理想の皇妃として登場したアタナイスは、今では姦通を犯した当事者として、昔日の輝かしさを2度と取り戻せぬ立場に身を落としてしまった。あるいはまた、こうも言えるだろう。アタナイスたちが激昂した皇帝の手で悲劇的な最期を遂げたならば、彼らは愛に殉じた恋人たちとして崇高な理念を体現し、人々の心に彼らの記憶を刻ませることができたかもしれない。だが、作者はそれを許さなかった。前述のピエルヴィルは、アタナイスとパリデスを結婚させることで作者のゴーティエは「彼らがトリスタンとイゾーやランスロとグィネーヴルのような神秘的なヒーローになるのを妨げ、彼らを社会的秩序の中に再統合させた」のであると語る⁸⁵。ここに作者の宮廷風恋愛に対する否定的な態度を読み取ることは容易であろう。ありふれた結婚生活に入った彼らは以後、世俗の暮らしに身を沈め、2度と物語の中で語られることはない。

このように見てゆけば、『エラクル』の第2部で本来の主人公が長く後景に退き、アタナイスとパリデスの姦通譚が長々と語られていることも得心が行く。ここでもピエルヴィルが語っているように、アタナイスとパリデスは主人公の地上的な似姿なのである⁸⁶。アタナイスがエラクルと驚くほど似た境遇にあったことは注目し得る。エラクル同様に彼女も元老院身分の父を失い、孤児として貧しい暮らしを送っていた。エラクルと出会ったとき、彼女はのみすぼらしい身なりのために「10歳にしか見えなかった」(v.2582-2583)という。これは、エラクルがセネシャルに買われて宮廷に入ったのが10歳のときだったことと明らかに符合している。

他方、パリデスの父親も元老院議員である。テオドシウス2世の説話では、皇帝の花嫁選びに一役買った彼の親友が皇妃の不倫の相手になっているから、そうした役回りをそのまま引き継げばアタナイスの相手役はエラクルが務めることになるはずだった。しかし、天命を実現するために生れ落ちた彼が「地

⁸⁴ すなわち、皇帝は①宝石に関しては、エラクルを信じなかったことで目立った実害は被らなかったが、②馬の場面では、それによってエラクルの選んだ仔馬を殺してしまい、そして最後に③女性に関して、最愛の妻を失うという最大の罰を受けるのである。N.J.Lacy, "The Form of Gautier d'Arras, *Eracle*," *Modern Philology*, 83, 1986, pp.227-232.

⁸⁵ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p. 32.

⁸⁶ 以下の記述は、C. Pierreville, "Le couple et le double dans les romans de Gautier d'Arras", dans M.-M.Castellini éd., *Arras au Moyen Âge. Histoire et littérature*, Arras, 1994, pp.97-109による。

上の愛」に熱中することはもとより不可能である。ピエルヴィルは、パリデスがエラクルの宮廷風の分身であることを示す仕掛けを作者が凝らしていることを指摘している。たとえば、通常はエラクルにのみ付される「いとも賢明な plus sage」という形容辞がパリデスにも適用されていること (v.3465)、そして彼がアタナイスに会いに行ったときにまとっていた「金糸で刺繍された絹の衣装」(v.3482) が、イエルサレムに入城するときのエラクルの衣装 (v.6136) に類似していたこと、がそれである。これら華美な装いは「傲慢の印」であり、エラクルが神の定めた道を歩むためには放棄しなければならない地上の富を象徴していた⁸⁷。かくして、「地上の愛」に殉じたアタナイスとパリデスが退場した後、彼らの対極に立って「天上の愛」に身を捧げるエラクルの栄光の物語が始まるのである。

V 文学と歴史の接点

最後に、この作品の中に認められる幾つかの重要なポイントに関して、筆者の気付いた範囲で、同時代の歴史的状況の中に位置付ける作業に取り組んでおきたい。

(1) 東方の敵

言うまでもなく、皇帝エラクルの敵は、コスドロエに率いられた東方の異教徒の帝国である。ところが、コスドロエ王が「真の十字架」を掲げた不可思議な神殿（あるいは宮殿）の記述が、12世紀半ばに成立した『シャルルマーニュ巡礼記』に登場するコンスタンティノーブルの皇帝宮殿の描写に影響を及ぼしているという近年の研究⁸⁸を勘案すれば、コスドロエに仮託された異教の帝王の姿の背後にビザンツ皇帝の影を感じ取ることも可能かもしれない。

このような見方は、ゴーティエ・ダラスのもうひとつの作品『イルとガルロン』と併読することで補強されるだろう。そこには、ローマ皇女ガノルに結婚を迫り、それが拒まれると大軍を差し向けてイタリアに侵攻する「ギリシアの皇帝」が登場しているのである (v.5399-5416)。西欧に大軍を送り、人々を恐

⁸⁷ C. Pierreville, "De l'apparence à l'essence: la description dans le roman d'*Eracle de Gautier d'Arras*", *Bien dire et bien apprendre*, 11, 1993, pp.317-330.

⁸⁸ L.Polak, "Charlemagne and the Marvels of Constantinople", in P.Noble, L.Polak and C.Isoz ed., *The Medieval Alexander Legend and Romance Epic. Essays in Honor of David J.A.Ross*, Millwood, N.Y., 1982, pp.159-171, esp. p.165f.

怖の念で満たす点において『イルとガルロン』の「ギリシアの皇帝」が『エラクル』におけるコスドロエと同じ役回りを演じていることが分かるはずである。

ゴーティエが語るところによれば、ガノルが「ギリシアの皇帝」を嫌っていたのは、彼の最初の妻である彼女の従姉妹が彼によって虐待死を遂げていたからであるという (v.5399-5406)。一般に、この「ギリシアの皇帝」のモデルとしては、12世紀中葉のビザンツ皇帝マヌエル1世コムネノス(在位 1143-1180)が想定されている⁸⁹。その根拠は、彼の最初の妻がドイツ皇帝の親族であり、彼女と死別していたこと⁹⁰、そしてイタリアの支配権を求めて積極的な軍事・外交攻勢を仕掛けたこと⁹¹、が知られているからである。そのように見れば、作者のビザンツ的東方に向けられた視線は、ビザンツと比較的良好な関係を保っていたシャンパーニュ宮廷よりも、イタリア支配をめぐるビザンツと厳しく対立していたフリードリヒ・バルバロッサ治下のドイツ皇帝宮廷の雰囲気を反映しているようにも感じられる。

(2) 選挙王制への共感

『エラクル』と『イルとガルロン』のいずれの作品においても、主人公は己の才覚と能力によって栄達を重ね、最後には人々の懇請を受けて皇帝の座に登っている。その際、これまたいずれの作品においても、主人公の宮廷入りの道を開き、彼の最大の理解者となっているのが、皇帝のセネシャルであることは注目に値する点であろう。というのも、ゴーティエ・ダラスのライヴァルであるクレチアン・ド・トロワが描くアーサー王のセネシャル、クーに典型的に見出される⁹²ように、セネシャルは文学作品の中で、しばしば無礼で口さがなく、嫌味な人物として描き出される傾向があったからである。ところがゴーティエ

⁸⁹ C. Pierreville, "L'image du roi et de l'empereur dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 18, 2000, pp.125-137, p.127; Id., "D'Athanas à Ganor, les métamorphoses de l'impératrice dans les romans de Gautier d'Arras", dans *Reines et princesses au Moyen Âge. Ve colloque internationale organisé par le CRISMA, les 24-27 novembre 1999 à Montpellier*, Montpellier, 2003, pp.659-669, p.666.

⁹⁰ マヌエル1世の最初の妻ベルタ・フォン・ズルツバッハは、ドイツ皇帝コンラート3世の義理の姉妹(コンラートの妻の姉妹)であり、コンラートの養女の資格でビザンツに輿入れした。ちなみに彼女は1160年頃に没している。cf. C.M.Brand, "Bertha of Sulzbach", in A.Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p.284.

⁹¹ cf. P.Magdalino, *The Empire of Manuel I Komnenos, 1143-1180*, Cambridge, 1993, pp.83-95; 渡辺金一「十二世紀の西ヨーロッパとビザンツ」、『岩波講座世界歴史』第10巻、岩波書店、1970年、130-149頁。

⁹² たとえば、菊池淑子『クレチアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』平凡社、1994年、15-27頁、60-63頁等を参照。

の『イルとガルロン』では、主人公は、戦死したセネシャルの後任の座に収まるだけでなく、前述したごとく、最後には皇帝の娘と結婚して、帝権すら掌握するに至っているのである。これは、一般に、作者ゴーティエが彼のパトロンであるブロワ伯ティボーにオマージュを捧げている部分と理解されている。というのも、ブロワ伯はフランス王ルイ7世のセネシャルを務め、王の娘婿でもあったからである。ゴーティエはセネシャルを極力、魅力的な人物として描き出すことで、パトロンの歓心を得ることに努めていたに違いない⁹³。ただし、ゴーティエがこの作品を通じて、王の娘婿であるブロワ伯に、王座の後継者となる、という魅力的な夢を吹き込んだ、などと考えるのは行き過ぎだろう。当時の王位継承の規定によれば、カペー家の男系親族に属さぬ人物がフランス王位に就く可能性はほぼ完全に閉ざされていたからである。

だが、フランス王だけが王ではない。『エラクル』にせよ、『イルとガルロン』にせよ、主人公は生国を離れて異国の君主の座に収まっているのだから、そのように見れば、作者が彼のパトロンに提示したイメージは急にリアリティーを帯びてくるようにも感じられる。ブロワ伯ティボーにしても、彼の身近な人物や同輩たちが異国で王位に就いた事例を充分に見聞していたのは明らかである。たとえば、彼の父方の叔父エティエンヌ（スティーヴン・オヴ・ブロワ）は12世紀の前半にイングランド王の地位に就いているし⁹⁴、1131年にはアンジュー伯フルクがイェルサレム王の座に登っている⁹⁵。また、1171年頃にはブロワ伯自身の弟エティエンヌが将来のイェルサレム王就任含みで同王の娘との縁談の交渉を行っていた⁹⁶。

一方、これらの作品を、今度はブロワ伯がフランス国内で占めた有力諸侯という視角から眺めてみると、また少し異なる色調を帯びることになる。

先にも語ったように、これらの物語の主人公は世襲原理に基づくことなく、人々の懇請を受けて皇帝の座に登っている。その場合、「人々」の主体を成す

⁹³ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p.25 ; M.-M.Castellini, "La cour et le pouvoir dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 8, 1990, pp.18-34, p.20, n.7.

⁹⁴ 城戸毅「イングランド封建国家」、青山吉信編『世界歴史体系 イギリス史1—先史—中世—』、山川出版社、1991年、205—250頁、特に225—229頁。

⁹⁵ *Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R.B.C.Huygens, vol. 2, pp.631-634; William of Tyre, *A History of Deeds Done Beyond the Sea*, tr. by E.A.Babcock & A.C.Krey, vol. 2, pp.47-51.

⁹⁶ この計画は基本的に合意され、エティエンヌ自身が聖地入りしたにもかかわらず結局、破談に終わった。*Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R.B.C.Huygens, vol. 2, p.947; William of Tyre, *A History of Deeds Done Beyond the Sea*, tr. by E.A.Babcock & A.C.Krey, vol. 2, p.384.

のは、実際にはその国の諸侯、有力貴族層なのである。『エラクル』において主人公を皇帝に選出したのはコンスタンティノーブルの名望家たち li preudome (v.5226)であった。ただし、これは皇帝不在中の出来事であるから、非常時の例外的現象と言うこともできるだろう。ところが、『イルとガルロン』では、諸侯の集団的意志は君主のそれに優先される、という思想がいつそう露骨に表明されている。高齢の皇帝に代わって戦場で指揮を執っていたセネシャルが戦死したとき、諸侯は皇帝の意向を確認することなくイルにその後釜に座るよう要請し、「ドイツ皇帝は、この諸侯会議があなたに約束したことを拒否できるような立場には決してないのです」と断言しているのである (vv.2472-2474)。さらに、老皇帝が没し、危機的状況が昂進する中で諸侯たちは皇帝権をイルに差し出し、自分たちの主君になるよう要請した (vv.6080-6082)⁹⁷。

このような形で君主の座に登った主人公は、当然のことながら独裁君主として振舞うことはできなかった。彼はその地位を諸侯たちの総意に負っており、彼らの意思を最大限、尊重する姿勢を示すことになる。そうした態度は、エラクルが軍議の席上において、「諸卿よ。余はこの作戦中、汝らに諮ることなく決定を下すことを望んではおらぬ。それは、余がいかなる責めにもさらされぬ為であり、いかなる賛辞も、いかなる栄光も、汝らと分かち合わぬことがないようにするためである」(vv.5440-5444)と発言していることに如実に示されている。

このように、単純な血統原理からではなく、個人の優れた能力と徳性に基いて君主が選出され、君主と諸侯たちは互いに敬意を払って協調して統治にあたる、というゴーティエの作品に描き出された国家像は、フランスよりも同時代のドイツの宮廷像に接近しているように思われる。それは、彼のパトロンの一人であるドイツ皇妃ベアトリクスに意に沿うものであることは間違いあるまい⁹⁸。あるいは、さらに想像をたくましくすれば、この時期のカペー王権は、周囲をイル・ド・フランス出身の中小貴族出自の近侍者集団で固め、次第に大諸侯を宮廷から遠ざける傾向を強めたと言われている⁹⁹が、ゴーティエの描く

⁹⁷ cf. M.-M.Castellani, "La cour et le pouvoir dans les romans de Gautier d'Arras", pp.26-28.

⁹⁸ 彼女の夫フリードリヒ・バルバロッサは、前王コンラート3世の甥にあたる。コンラートは自分の息子が幼少であったため、甥のフリードリヒを後継者に指名し、後者は1152年のフランクフルト選挙集会において諸侯の「満場一致」の支持を得て、ドイツ王に選出された。バルバロッサの国王選出をめぐる政治情勢については、山本伸二「フリードリヒ1世・バルバロッサの国王選出(1152年)」、『西洋史学』163号、1991年、1-17頁に詳しい。

⁹⁹ 渡辺節夫「カペー王権と中央統治機構の発展」、渡辺節夫編『ヨーロッパ中世の権力編

世界は、そうした現実に対するブロワ・シャンパーニュ家に代表されるフランス大諸侯の不満と苛立ちを投影している、と解釈することも可能であろう。とりわけ、フィリップ・オーギュストの即位直後、王は母の実家のブロワ・シャンパーニュ家の影響力排除の動きを示し、両者の間に一時、緊張関係が生じたこと¹⁰⁰を勘案すれば、ゴージェが語る理想の君主像から読み取れる政治的メッセージはさらに明確になるように思われる。これらの文学作品はパトロンの意を迎えることが暗黙の前提条件となっている以上、後者の価値観が結果として、それらの中に浸透していたことは容易に推察されるのである。

(3) プロヴァンという場

『エラクル』という作品を執筆するにあたって、作者のゴージェが、シャンパーニュ伯領内でトロワと並ぶ重要な宮廷都市プロヴァンの様々な名所旧跡から多大なインスピレーションを受けていたことは、これまでも何人もの研究者が指摘してきた通りである¹⁰¹。たとえば、『エラクル』の第3部で「真の十字架」発見に手を貸した元ユダヤ人聖者キュリアコスは、伯宮殿の側に聳える聖堂にその名を留めている。この聖堂は、12世紀半ばにシャンパーニュ伯アンリ1世「寛大伯」によって再建され、伯から多額の寄進を受けていたことが知られている¹⁰²。また、今日も町の中心部でその威容を示しているセザールの塔は、クーパーの論文によればすでに1137年にはその存在が確認されるという¹⁰³が、しばしば監獄として利用されたこの塔から、物語の中でアタナイスが幽閉された塔を連想するのは容易であろう。これに加えて、プロヴァンの掘削が容易な石灰岩質の土質も、作者が恋人たちの逢瀬の場を考案するのに貢献したようだ。中世には家の地下が掘られて、すでに多くの貯蔵施設が存在したという¹⁰⁴。ピエルヴィルが語るところによれば、パリデスがわずか1週間で地下の隠れ家を掘り出すことができたのも、その柔らかな土質に負うところが

成と展開』、東京大学出版会、2003年、147-183頁、特に164-174頁。

¹⁰⁰ 本稿 註25を参照。この時期のフランス国内の政治情勢と主要な政治党派については、併せて J. W. Baldwin, *The Government of Philip Augustus: Foundations of French Royal Power in the Middle Ages*, Berkley · Los Angeles, 1986, pp.6-17も参照のこと。

¹⁰¹ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, pp. 253-256 ; Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, pp.26-28 , F.A.G.Cowper, "Gautier d'Arras and Provins", *Romanic Review*, 22, 1937, pp.291-300.

¹⁰² cf. *Saint-Quiriace de Provins*, Lyon, 2003, p.2f.

¹⁰³ F.A.G.Cowper, "Gautier d'Arras and Provins" , p.294.

¹⁰⁴ 今日では、中世の施療院 (l'hôtel-Dieu) の遺構地下の迷路状の構造物がプロヴァン観光の呼び物のひとつになっており、ガイド・ツアーが行われている。

大きかった、というのである¹⁰⁵。

シャンパーニュ伯の領内で1年を通じて継続的に開催された有名な大市も、『エラクル』の中に明確な刻印を残している。一連の大市のうち、プロヴァンでは、9月のサン・タユール、11月の聖マルタン、そして5月の大市、と年に3度のそれを開催していたのだが、これらのうち、9月のサン・タユールの市は十字架頌揚の祭日（9月14日）に開幕し、5月の大市は聖キリアス（＝キュリアコス）の祭日（5月1日）と聖十字架発見のそれ（5月3日）に対応していた。聖十字架崇敬の信仰はプロヴァンの町にしっかりと定着していたのである。そして『エラクル』の第3部は、これらの祭日の正当性を改めて確認するものと言えるだろう。

また、12世紀後半に「真の十字架」を称揚することは、十字軍精神を宣揚すると共に、ブロワ伯ティボーの兄シャンパーニュ伯アンリ1世の遺徳を偲ぶ行為にもなりえた。というのも、アンリ伯は第2回十字軍に参加した後、1179年、2度目の聖地遠征に旅立ち、2年後、虜囚生活を経て苦勞の果てに帰国した折に「真の十字架」の聖遺物を故郷にもたらしたからである。伯がこの貴重な聖遺物を安置した宮殿付属の礼拝堂は、これを機に「聖十字架」礼拝堂と名を改められた。帰国時において、すでに心身の消耗の著しかった彼がまもなく世を去ったことは先に記した通りである。ピエルヴィルは語る。「主人公による「真の十字架」奪回を物語り、その任務が達成された後の彼の死を称揚することは、間接的にアンリの勲功を称えることにもなった。こうした視角において『エラクル』はアンリの弟であるティボー、アンリの妻マリー、その盟友であるボードゥワン5世—この作品の被献呈者—の求めで執筆されたアンリ「寛大」伯への賛辞文として読むこともできるのである」¹⁰⁶。

『エラクル』の末尾において詩人は、コンスタンティノーブルに立つひとつの彫像について詳述している（vv.6479-6514）。それは、作者が説明するところによれば、エラクルの死を悼む市民たちによって都心に立てられた彼のモニュメントであった¹⁰⁷。像は東を向いて右手をその方向に伸ばし、あたかもペル

¹⁰⁵ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p.27.

¹⁰⁶ *ibid.* p. 28.

¹⁰⁷ コンスタンティノーブルの都心、聖ソフィア聖堂と皇帝宮殿の間に位置するアウグステイオン広場の円柱上に据えられていたブロンズ製の皇帝騎馬像については、一般にユスティニアヌス帝に同定する説が有力である。この他、コンスタンティヌス大帝やテオドシウス2世と見なす説もあったらしい。第4回十字軍に参加したロベール・ド・クラールは、地元のギリシア人からこの像をヘラクレイオスのそれとする説を聞きつけており、おそらく作者ゴーティエの言説も同種の情報源に基づくものと思われる。cf. Robert de Clari,

シア人に対してローマ人の領土に近づかぬよう威嚇しているかのように見えたという。コンスタンティノープルの都に立つこの皇帝騎馬像は、シャンパーニュ伯アンリを偲ぶ人々の心象世界の中では、聖地から「真の十字架」を持ち帰り、十字軍遠征に生命の炎を燃やし尽くして世を去った伯の姿と重なり合ったのである。

VI 繰り返される歴史—結びに代えて—

すでに語るべき言葉も尽きた。以下は若干の蛇足である。

1187年7月4日、ティベリアスの西方、ハッティーンの丘陵地帯において聖地のキリスト教徒部隊とサラディンの率いるムスリムの軍勢が衝突、戦いはキリスト教徒軍の無残な敗北で終わった。キリスト教徒の陣営は、イエルサレム王ギー・ド・リュニジャン以下、聖地の主だった王侯貴族の大半が捕虜となったことに加え、士気を鼓舞すべく、台車に載せられ、聖職者たちに守られて戦場に運ばれていた「真の十字架」の聖遺物も敵の手に奪われるという衝撃的な災禍に見舞われたのである。サラディンは防衛者を失ったキリスト教徒支配下の都市や城塞を次々と攻略し、王都イエルサレムに対しては9月21日に攻囲が始まり、6日後には聖都は彼の軍門に下った¹⁰⁸。

この事件が、西欧の人々に、往古のホスロー王による「真の十字架」奪取と聖地劫掠の物語を思い出させたことは想像に難くない¹⁰⁹。今こそ「新たなエラクル」が立つべきときであった。西欧の王侯はこぞって十字軍の旗の下に結集する。世に言う第3回十字軍である。聖十字架に厚い崇敬の念を寄せるプロワ・シャンパーニュ家の諸侯たちは、遠征の準備に手間取る英仏両王を尻目に、いちはやく軍を整え出陣した。一門の新たな惣領であるシャンパーニュ伯アンリ2世（寛大伯の嫡男）を筆頭に、その叔父であるプロワ伯ティボー5世とサンセール伯エティエンヌがこれらの軍勢の先頭に立っていた。彼らの軍勢は1190年7月末にアッコに到着する¹¹⁰。

La conquête de Constantinople, éd., P. Lauer, p. 86; Robert of Clari, *The Conquest of Constantinople*, tr. by E. H. McNeal, p. 107. なお、この皇帝騎馬像に関して詳しくは、J. P. A. van der Vin, *Travellers to Greece and Constantinople. Ancient Monuments and Old Traditions in Medieval Travellers' Tales*, 2 vols, Leiden, 1980, pp. 271-278 を参照。

¹⁰⁸ cf. M. W. Baldwin, "The Decline and Fall of Jerusalem, 1174-1189", in K. M. Setton ed., *A History of the Crusades*, vol. 1, 2ed., Madison, 1969, pp. 590-621, esp. pp. 615-617.

¹⁰⁹ cf. M. Angold, *The Fourth Crusade. Event and Context*, Harlow, 2003, p. 67.

¹¹⁰ cf., S. Painter, "The Third Crusade: Richard Lionhearted and Philip Augustus", in

聖地に旅立ったブロワ・シャンパーニュ家の諸侯たちを見送った人々は、もはや2度と彼らの姿を目に映すことはなかった。すでに1190年10月の時点で、サンセール伯エティエンヌは彼の甥のパール伯らと共に物故者としてカンタベリー大司教付き従軍司祭の書簡の中で報じられている¹¹¹。ブロワ伯ティボーも聖地に着いて3月も経たぬ間にこの世を去った¹¹²。最後に残されたシャンパーニュ伯アンリ2世は、フランス王フィリップ・オーギュストが帰国した後、フランス諸侯軍をまとめつつ、叔父にあたるイングランド王リチャード1世と連携し、聖地のキリスト教国家再建に全力を尽くした。1192年4月、彼はイェルサレム王位継承者のイザベルと結婚して王国統治の最高責任を引き受け、その後も情勢を安定化させるためにその手腕を揮ったが、1197年9月10日、アッコンの城の塔から謎の墜落死を遂げて唐突にその人生を閉じてしまう。第3回十字軍に参加したブロワ・シャンパーニュ家の3人の諸侯は、いずれも志し半ばにして異郷の地に果てた。

ムスリム軍に奪われた「真の十字架」に関しては、和平協議の場で再三、その返還が議論されたが、結局、キリスト教徒側に戻されることはなかったようである¹¹³。「新たなエラクル」の歴史は未完に終わった。しかし、ブロワ・シャンパーニュ家一門の聖地に寄せる思いは、さらに次の世代へと受け継がれてゆく¹¹⁴。「エラクル」の物語は、何世代にもわたって、一門の伝統の中で生き続けるのである。

K.M. Setton ed., *A History of the Crusades*, vol.2, 2ed., Madison, 1969, pp.45-85, esp. p.53.

¹¹¹ P.W.Edbury, *The Conquest of Jerusalem and the Third Crusade. Sources in Translation*, Aldershot, 1996, p.171.

¹¹² H.J.Nicolson, *Chronicle of the Third Crusade. A Translation of the Itinerarium Peregrinorum et Gesta Regis Ricardi*, Aldershot, 1997, p.98.

¹¹³ cf. A. J. Andrea ed., *Encyclopedia of the Crusades*, Westport, Conn, 2003, p.83.

¹¹⁴ シャンパーニュ伯の位を継承したアンリ2世の弟ティボー3世は、1199年11月に十字を帯び、新たに編制される十字軍の総大将に推された。ところが彼は病に冒され、1201年5月に没してしまう。しかし、ブロワ司教やブリエンヌ伯ゴーティエらに率いられたシャンパーニュの軍勢は、亡き伯の従兄弟のブロワ伯ルイ(ブロワ伯ティボー5世の息子)のそれと共に海を渡り、新たな十字軍遠征に乗り出してゆく。第4回十字軍である。cf. J.Longnon, *Les compagnons de Villehardouin. Recherches sur les croisés de la quatrième croisade*, Genève, 1978, pp.11-111. 1239年にはティボー3世の息子で後継者のティボー4世が新たな十字軍の先頭に立った。cf. S.Painter, "The Crusade of Theobald of Champagne and Richard of Cornwall, 1239-1241", in K.M. Setton ed., *A History of the Crusades*, vol.2, 2ed., Madison, 1969, pp.463-485.

『クリジェス』文献目録

I 一次史料

- 1 Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Édition publiée sous la direction de D.Poirion avec la collaboration d'A.Berthelot, P.F.Dembowski, S.Lefèvre, K.D.Utti et Ph. Walter, Bibliothèque de la Pléiade, 1994
- 2 *Les romans de Chrétien de Troyes, II : Cligès*, éd. A.Micha, Paris, 1954
- 3 Chrétien de Troyes, *Cligès*, ed. S. Gregory and Cl. Luttrell, Cambridge, 1993
- 4 Chrétien de Troyes, *Cligès*, Translated by B.Raffel, New Heaven, 1997
- 5 Gautier d'Arras, *Eracle*, éd., G. R. de Lage, Paris, 1976
- 6 Walter Map, *De nugis curialium*, ed., M. R. James, C. N. L. Brook & R. A. B. Mynors, Oxford, 1983.
- 7 Roger of Hoveden, *Chronica*, ed., W.Stubbes, 2vols, London, 1868-1871 (rep. Wiesbaden, 1964)
- 8 William of Tyre, *Historia rerum in partibus transmarinis gestarum*, ed., R. B. C. Huygens, Thurnhout, 1986.
- 9 Anna Komnene, *Alexias*, ed., D. R. Reinsch & A. Kambylis, Berlin, 2001.
- 9' Anne Comnène, *Alexiade*, éd., B. Leib et P. Gautier, 4vols, Paris, 1937-1976.
- 10 Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E.Renauld, 2éd., Paris, 1967, 2vols.
- 11 Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum*, ed., H.Thurn, Berlin, 1973.
- 12 Ioannes Zonaras, *Epitome Historiarum*, III, ed., Th.Büttner-Wobst, Bonn, 1897
- 13 Ioannes Kinnamos, *Epitome rerum ab Ioanne et Alexio [Manuele] Comnenis gestarum*, Bonn, 1836.
- 14 Niketas Choniates, *Historia*, ed. J-L. van Dieten, Berlin, 1975
- 15 新倉俊一他『フランス中世文学集2—愛と剣と—』白水社1991年
- 16 菊池淑子『クレティアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』平凡社、1994年
- 17 中野節子 訳『マビノギオン—中世ウェールズ幻想物語集—』JULA出版局、2000年
- 18 アンドレアス・カペルラーヌス(瀬谷幸男訳)『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛術指南の書—』南雲堂、1993年

II 研究文献

- 1 M. Angold, *The Fourth Crusade. Event and Context*, Harlow, 2003.
- 2 Ch.M.Brand, *Byzantium Confronts the West 1180-1204*, Cambridge Mass., 1968
- 3 Id., "The Turkish Element in Byzantium, Eleventh-Twelfth Centuries", *Dumbarton Oaks Studies*, 43, 1989, pp.1-25.
- 4 J.-C.Cheyne, *Pouvoirs et contestations à Byzance (963-1210)*, Paris, 1990.
- 5 K.N.Ciggaar, "Chrétien de Troyes et la <matière byzantine> : les demoiselles de Château de Pesme Aventure", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 32, 1989, pp.325-331.
- 6 Id., "Encore une fois Chrétien de Troyes et la < matière byzantine : la révolution des femmes au palais de Constantinople", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 38, 1995, pp.267-274.
- 7 Id., *Western Travellers to Constantinople. The West and Byzantium, 962- 1204: Cultural and Political Relations*, Leiden, 1996.
- 8 W.M.Daly, "Christian Fraternity, the Crusaders, and the Security of Constantinople, 1097-1204: The Precarious Survival of an Ideal", *Mediaeval Studies*, 22, 1960, pp.43-91.
- 9 L.Dunton-Douner, "The Horror of Culture: East West Incest in Chrétien de Troyes's *Cligès*", *New Literary History*, 28, 1997, pp.367-381
- 10 A.Fourrier, "Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes", *Bulletin bibliographique de la Société internationale arthurienne*, 2, 1950, pp.69-88
- 11 Id., *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t.I, Paris, 1960
- 12 M.A.Freeman, "Chrétien's *Cligès* : A Close Reading of the Prologue", *The Romanic Review*, 67, 1976, pp.89-101
- 13 F.L.Ganshof, "Recherche sur le lien juridique qui unissait les chefs de la première Croisade à l'empereur byzantin", dans *Mélanges offert à Paul-Edmond Martin*, Geneve, 1961, pp.44-63
- 14 Ch.Grim, "Chrétien de Troyes's Attitude towards Woman", *The Romanic Review*, 16, 1965, pp.236-243
- 15 M.Halperin, "Duke of Saxony and the Date *ad quem* of *Cligès*", *The Romanic Review*, 16, 1965, pp.239-241
- 16 W.Hecht, *Die byzantinische Aussenpolitik zur Zeit der letzten Komnenenkaiser (1180-1185)*, Neustadt, 1967

- 17 G. Heywarth, "Love and Honor in *Cligès*", *Romania*, 120, 2002, pp.99-117
- 18 E.v.Ivanka, "Fragen eines Byzantinisten an Germanisten und Romanisten (*Wolfdietrich* und *Cligès*)", *Germanisch-Romanische Monatsschrift*, N.S. 22, 1972, S.433-435
- 19 R. Janin, *Constantinople byzantine : Développement urbain et répertoire topographique*, 2éd., Paris, 1964
- 20 L. Jones and H. Maguire, "A Description of the Jousts of Manuel I Komnenos", *Byzantine and Modern Greek Studies*, 26, 2002, pp.104-148
- 21 O. Jurewicz, *Andronikos I Komnenos*, Amsterdam, 1970
- 22 H. et R. Kahne, "L'énigme du nom de *Cligès*", *Romania*, 82, 1962, pp.113-121
- 23 A. Kazhdan, "Holy and Unholy Miracle Workers", in H. Maguire ed., *Byzantine Magic*, Washington D.C., 1995, pp.73-82
- 24 Sh. Kinoshita, "The Poetics of Translatio : French-Byzantine Relations in Chrétien de Troyes's *Cligès*", *Exemplaria*, 8, 1996, pp.315-354.
- 25 J. Longnon, *Les compagnons de Villehardouin. Recherches sur les croisés de la quatrième croisade*, Genève, 1978
- 26 R. J. Macrides, "Dynastic Marriage and Political Kinship", in J. Shepard and S. Franklin ed., *Byzantine Diplomacy*, Aldershot, 1992, pp.263-280
- 27 D. M. Maddox, "Kinship Alliances in the *Cligès* of Chrétien de Troyes", *L'esprit createur*, 12, 1972, pp.3-12
- 28 Id., "Critical Trends and Recent Work on the *Cligès* of Chrétien de Troyes", *Neuphilologische Mitteilungen*, 74, 1973, pp.730-745
- 29 Id., "Pseudo-Historical Discourse in Fiction: *Cligès*", in N.J. Lacy and J.C. Nash ed., *Essays in Early French Literature: Presented to Barbara M. Craig*, York S.C., 1982, pp.9-24.
- 30 J. Misrahi, "More Light on the Chronology of Chrétien de Troyes?", *Bulletin bibliographique de la Société internationale arthurienne*, 11, 1959, pp.89-120
- 31 I. Seidel, *Byzanz im Spiegel der literarischen Entwicklung Frankreichs im 12. Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 1977
- 32 F. Settegast, "Byzantinisch-Geschichtliches im Cliges und Yvain", *Zeitschrift für romanische Philologie*, 32, 1908, S.400-422
- 33 J. Shepard, "Father' or 'Scorpion'? Style and Substance in Alexios's Diplomacy", in M. Mullett and D. Smythe, *Alexios I Komnenos*, I, Belfast, 1996, pp.68-132
- 34 B. Skoulatos, *Les personages byzantins de l'Alexiade. Analyse prosopographique et synthèse*, Louvain, 1980

- 35 J. Stiennon, “Histoire de l’art et fiction poétique dans un épisode du *Cligès* de Chrétien de Troyes”, *Mélanges Rita Lejeune*, t.I, Gembloux, 1969, pp. 695-708
- 36 リチャード・バーバー (高宮利行訳) 『アーサー王—その歴史と伝説—』、東京書籍、1983年
- 37 ジャン・フラピエ (松村剛訳) 『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』朝日出版社、1988年
- 38 スティーヴン・ランシマン (和田廣訳) 『十字軍の歴史』河出書房新社、1989年
- 39 アルベール・ポフィレ (新倉俊一訳) 『中世の遺贈—フランス中世文学への招待—』筑摩書房、1994年
- 40 ジョルジュ・デュビー (新倉俊一・松村剛訳) 『十二世紀の女性たち』白水社、2003年
- 41 カール・ヨルダン (瀬原義生訳) 『ザクセン大公ハインリヒ獅子公—中世北ドイツの覇者—』ミネルヴァ書房、2004年
- 42 福井芳男他 『フランス文学講座 1—小説 1』大修館書店、1976年
- 43 神沢栄三 「Chrétien de Troyes におけるトリスタン神話—*Cligès* について—」、『名古屋大学文学部研究論集』73号、1978年、163—185頁
- 44 加藤恭子 「Chrétien de Troyes 作 *Cligès* における諸問題 (上) (下)」『上智大学仏語・仏文学論集』18号、1983年、1—17頁；19号、1984年、55—72頁
- 45 青山吉信 『アーサー伝説—歴史とロマンスの交錯—』岩波書店、1985年
- 46 渡邊浩司 『クレチアン・ド・トロワ研究序説—修辞学的研究から神話学的研究へ—』中央大学出版部、2002年
- 47 井上浩一 「アンドロニコス 1 世とコンスタンティノープル市民闘争」、『人文研究』(大阪市立大学) 30 卷 4 号、1978 年、48—99 頁
- 48 同 『ビザンツ皇妃列伝—憧れの都に咲いた花—』筑摩書房、1996年
- 49 根津由喜夫 「12 世紀ビザンツ宮廷の政治文化—ラテン文化とヘレニズム趣味—」、藤縄謙三編 『ギリシア文化の遺産』南窓社、1993年、165—190頁
- 50 同 『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年
- 51 同 「十字軍時代のビザンツ帝国」、歴史学研究会編 『多元的世界の成立』<地中海世界史 2> 青木書店、2003年、97—134頁、2003年、1—34頁

『エラクル』 文献目録

I 校訂版・翻訳

- 1 Gautier d'Arras, *Eracle*, publié par G.Raynaud de Lage, Paris, 1976
- 2 Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne d'après l'édition de G. Raynaud de Lage par A.Eskénazi, Paris, 2002.
- 3 Gautier d'Arras, *Ille et Galeron*, publié par Y.Lefèvre, Paris, 1988.
- 4 Gautier d'Arras, *Ille et Galeron*, Traduit en français moderne par J.-C.Delcols et M.Quereil, Paris, 1993.
- 5 Gautier d'Arras, *Ille et Galeron*, Edited & translated by P.Eley, London, 1996.

II 研究文献

- 1 L. Arzenton Valeri, "Au nom de l'auteur: essai d'intervention auctoriale dans *Eracle*", *Bien dire et bien aprendre*, 8, 1990, pp.5-17.
- 2 W.C.Calin, "On the Chronology of Gautier d'Arras", *Modern Language Quarterly*, 20, 1959, pp.181-196.
- 3 Id., "Structure and Meaning in the *Eracle* by Gautier d'Arras", *Symposium*, 16, 1962, pp.275-287
- 4 M.-M.Castellani, "La cour et le pouvoir dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien aprendre*, 8, 1990, pp.18-34.
- 5 F.A.G.Cowper, "Gautier d'Arras and Provins", *Romanic Review*, 22, 1937, pp.291-300.
- 6 Id., "More data on Gautier d'Arras", *PMLA*, 44, 1949, pp.302-316.
- 7 P.Eley, "Patterns of Faith and Doubt, Gautier's *Eracle* and *Ille et Galeron*," *French Studies*, 43, 1989, pp.257-270.
- 8 A.Fourrier, *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t.I, Paris, 1960
- 9 A.Frolow, "La déviation de la 4^e Croisade vers Constantinople : Note additionnelle : La Croisade et les guerres persanes d'Héraclius", *Revue de l'histoire des religions*, 147, 1955, pp.50-61.
- 10 D.S.King, "Humor and Holy Crusade. Gautier's *Eracle* and the *Pèlerinage de Charlemagne*", *Zeitschrift für französische Sprach und Literatur*, 109, 1999, pp. 237-245.
- 11 Id., "The Voice from Within: Intra-textual Auctoritas in Gautier d'Arras's *Eracle*", *Neuphilologische Mitteilungen*, 104, 2003, pp.237-248
- 12 L.Kretzenbacher, *Kreuzholzlegenden zwischen Byzanz und dem Abendlande. Byzantinisch-griechische Kreuzholzlegenden vor und um Basileios Herakleios*

und ihr Fortleben im lateinischen Westen bis zum Zweiten Vaticanum, München, 1995.

- 13 N.J.Lacy, "The Form of Gautier d'Arras, *Eracle*," *Modern Philology*, 83, 1986, pp. 227-232.
- 14 N.Love, "Polite Address and Characterization by Speech in Gautier d'Arras's *Eracle*," *Romance Quarterly*, 25, 1988, pp. 21-29.
- 15 C. Pierreville, "De l'apparence à l'essence: la description dans le roman d' *Eracle* de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 11, 1993, pp. 317-330.
- 16 Id., "Le couple et le double dans les romans de Gautier d'Arras", dans M.-M.Castellini éd., *Arras au Moyen Âge. Histoire et littérature*, Arras, 1994, pp. 97-109
- 17 Id., "L'image du roi et de l'empereur dans les romans de Gautier d'Arras ", *Bien dire et bien apprendre*, 18, 2000, pp. 125-137.
- 18 Id., *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, Paris, 2001.
- 19 Id., "D'Athanaïs à Ganor, les métamorphoses de l'impératrice dans les romans de Gautier d'Arras ", dans *Reines et princesses au Moyen Âge. Ve colloque internationale organisé par le CRISMA, les 24-27 novembre 1999 à Montpellier*, Montpellier, 2003, pp. 659-669.
- 20 G. Raynaud de Lage, "La religion d' *Eracle*," dans *Mélanges de langue et de littérature médiévales offerts à Pierre Le Gentil*, Paris, 1973, pp. 707-713.
- 21 G. Roques, "Remarque sur le texte d' *Eracle* de Gautier d'Arras", *Travaux de linguistique et de littérature*, 19, 1981, pp. 63-67.
- 22 F.Wolfzettel, "La découverte de la Femme dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 8, 1990, pp. 35-54.
- 23 Id., "La recherche de l'universel. Pour une nouvelle lecture des romans de Gautier d'Arras", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 33, 1990, pp. 113-131.
- 24 P.Zumthor, "L'écriture et la voix : Le roman d' *Eracle*", dans L.A. Arrathoon éd., *The Craft of Fiction : Essays in Medieval Poetics*, Rochester Mich., 1984, pp. 161-209.
- 25 井上浩一 『ビザンツ皇妃列伝—憧れの都に咲いた花—』 筑摩書房、1996年
- 26 同 「ビザンツ専制国家体制の確立と皇妃コンクール」、水林彪・金子修一・渡辺節夫編 『王権のコスモロジー』、弘文堂、1998年、308-338頁